

1. 調査の目的と背景

(1) レッドデータブックの役割と国の対応

野生生物を人為的に絶滅させないためには、絶滅のおそれのある種を的確に把握し、一般への理解を広める必要がある。

レッドデータブックとは、野生生物の種を絶滅のおそれのある程度（カテゴリー）に応じてランク付けをし、その生息・生育状況などについて解説した資料集であり、国際的には 1966 年（昭和 41 年）に国際自然保護連合（IUCN）から初めて発行された。

我が国では、植物について平成元年に、（財）世界自然保護基金日本委員会と（財）日本自然保護協会の共同編集により「我が国における保護上重要な植物種の現状」が発行されたのが最初である。

環境省は、「我が国の絶滅のおそれのある野生生物」として、平成 3 年度に動物編を発行したが、生息状況や生息環境の変化に関する最新の知見・情報等を踏まえ、また、1994 年（平成 6 年）に IUCN で採択された新しいカテゴリーの考え方にに基づき、レッドデータブックの見直しを行う必要が生じた。

このため、環境省は平成 7 年度から、哺乳類、鳥類といった分類群ごとに専門家による検討会を設け見直し作業に着手し、平成 12 年 2 月の「爬虫類・両生類」から、順次改訂版レッドデータブックとしてとりまとめ、発行してきた。

平成 14 年度より、2 回目のレッドリスト見直し作業に着手し、平成 18 年 12 月には、鳥類、爬虫類、両生類及びその他無脊椎動物の 4 分類群について、平成 19 年 8 月には、残りの哺乳類、汽水・淡水魚類、昆虫類、貝類、植物Ⅰ及び植物Ⅱの 6 分類群について、新たなレッドリストを公表した。

平成 20 年度より、3 回目のレッドリスト見直し作業に着手し、平成 24 年度に第 4 次レッドリストとして公表した。また、このリストを元に、平成 26 年度にレッドデータブックを発行した。平成 27 年度以降は、生息状況の悪化等によりカテゴリーの再検討が必要な種について随時見直しを行うこととし、第 4 次レッドリストの改訂版として現在までに 4 回見直しを行い公表した。

レッドデータブックは、生物学的観点から個々の種の絶滅の危険度を評価し選定したものであり、規制等の法律上の効果を持つものではないが、絶滅のおそれのある野生生物の保護を進めていくための基礎的な資料として広く普及を図り、野生生物への関心を高めるとともに、各種開発事業の環境影響評価などに活用され、自然環境保全への配慮が促進されることを目的としている。

また、レッドデータブックの掲載種の中でも特に保護の優先度の高い種については、さらに調査を進めた上で必要に応じ、「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律（種の保存法）」に基づく国内希少野生動植物種に指定し保護を図っていくこととしている。

環境省における見直し作業により、絶滅のおそれのある生物の種数は、レッドリスト 2019 で動物では 1,410 に、植物では 2,266 となっており、絶滅のおそれがある生物の種数が増加している。

この理由としては、生息・生育環境の悪化などが大きいと考えられるものの、分類学上の整理が進んだり知見が充実したりしたことにより評価対象種数自体が増加したことも事実であることから、今後とも見直し作業を行い、最新の知見により改訂していくことが必要とされている。

（２）愛知県版レッドデータブックの意義

野生生物は、各地域の自然環境特性に適応して生息・生育していることから、これらの野生生物を的確に保全し生物多様性の確保を図るためには、全国的な情報と併せ、県等の行政区画単位で地域特性ごとに情報整理を行う必要がある。

環境省作成のレッドデータブック（レッドリスト）は、全国の生息・生育状況を基準として「絶滅のおそれの程度」を評価しているが、本県の場合には県内の状況に併せ、愛知県としての環境特性や開発圧の強度などの地域特性を考慮して、絶滅のおそれを評価した。

また、レッドデータブックでは、絶滅の危険性に加え保護上の優先度も示す必要があるが、絶滅の危険度と保護上の優先度は、特定の地域を対象とした場合には必ずしも一致しない。

例えば、ニホンザルは、世界的に見れば地球の北限で生息するサルとして希少であるが、国内では農業被害をもたらしており、有害獣として駆除される場合もある。また、全国的には希少種であるチュウサギ（鳥類、国リスト：準絶滅危惧）は本県では対象外と判定されている。逆に全国的には絶滅のおそれは少ないとして環境省のレッドリストには記載されていないコノハズク（鳥類）は、本県の生息状況から繁殖個体群については絶滅のおそれの最も高い絶滅危惧ⅠＡ類と判定されている。

さらに、選定基準の本県の特徴としては、生息環境の減少率や、開発や捕獲などの人為的圧力による種の絶滅の危険性の評価に加え、本県における生息状況が種の存続に影響力を持つと考えられる種等について「地域固有性」の評価を加えており、世界的に見てもこの地域の生息状況が重要な意義を持つ種の保存を積極的に図ることとし、保護の優先度を加味した。

環境省のレッドデータブックでは、日本が島国であり地理的にある程度孤立していることもあって、このような地域性は考慮しないという方針で作業が進められたが、隣接地と地続きの愛知県のような地域を対象とする場合には、絶滅の危険度と保護上の優先度の間のずれは無視できない問題である。

例えば、渡り鳥であるシギ科のように愛知県では比較的まとまってみられる種でも、本県に限られた繁殖地や越冬地であることから、飛来数の減少はその種全体の存続に大きな影響を与えることが予想され、保護上の優先度は高くなる。

また、本県の特徴的環境である湿地に生息するヒメタイコウチ（昆虫類、国はリスト外、県リスト：準絶滅危惧）や、我が国での分布域の東端であるオオサンショウウオ（両生類、国リスト：絶滅危惧Ⅱ類、県リスト：絶滅危惧ⅠＢ類）なども本県での保護の優先度は国全体で見た場合より高い。

以上のとおり愛知県版レッドデータブックは、地域的情実が異なる中での野生生物のきめ細かい生息状況を把握し、その情報を広く県民へ周知し本県固有の自然環境保全への配慮を促す等の役割を担うものである。

愛知県では、平成 13 年度にレッドリスト動物編を公表し、これを元に同年度に「レッドデータブックあいち動物編」をとりまとめた。その後、見直し作業を行い、平成 20 年度に「レッドデータブックあいち 2009 動物編」をとりまとめ、平成 26 年度に第三次レッドリスト「レッドリストあいち 2015」を公表した。さらに専門家で構成する「愛知県絶滅危惧種等調査検討会」を中心に見直し作業を進め、令和元年度には「レッドデータブックあいち 2020 動物編」（本書）としてとりまとめた。

2. 調査の概要

(1) 調査対象

① 哺乳類

哺乳類の種を単位とし、標本あるいは文献等により、愛知県に確実に生息している（いた）と判断された種のうち、意図的・非意図的にかかわらず県内に移入されたことが明らかな種及び一過性の確認種を除く種を調査対象とした。

調査対象範囲は、愛知県内（島嶼部を含む）の陸上及び陸水中とした。また、沿岸の海域、干潟、河口部も含むものとした。

検討対象期間は縄文時代草創期（約 1 万年前）から現在までとし、後期更新世以前の化石として産出した種は検討対象としなかった。

② 鳥 類

鳥類の種を単位とし、文献、調査記録、観察記録等により、愛知県に生息している（いた）と判断された種のうち、意図的・非意図的にかかわらず県内に移入された種及び不定期または偶発的に記録される種並びに一部の外洋性の種を除く種を調査対象とした。

調査の範囲は、愛知県内（島嶼部を含む）の陸上及び陸水中並びに沿岸の海域、干潟、河口部とした。

③ 爬虫類

爬虫類の種を単位とし、標本あるいは文献等により、愛知県に確実に生息している（いた）と判断された種のうち、意図的・非意図的にかかわらず県内に移入された種を除く種を調査対象とした。

調査対象範囲は、愛知県内（島嶼部を含む）の陸上及び陸水中とした。なお、海域に生息する種（ウミガメ類・ウミヘビ類）は、産卵のため上陸するアカウミガメのみを対象とした。

④ 両生類

両生類の種（亜種を含む）を単位とし、標本あるいは文献等により、愛知県に確実に生息している（いた）と判断された種のうち、意図的・非意図的にかかわらず県内に移入された種を除く種を調査対象とした。

調査対象範囲は、愛知県内（島嶼部を含む）の陸上及び陸水中とした。

⑤ 汽水・淡水魚類

汽水・淡水魚類の種（亜種を含む）を単位とし、愛知県に生息している（いた）と判断された種のうち、意図的・非意図的にかかわらず県内に移入された魚類を除く種を調査対象とした。

調査対象範囲は、愛知県内（島嶼部を除く）の汽水、河川、湖沼等とした。

⑥ 昆虫類

昆虫類の種（亜種を含む）を単位とし、標本あるいは文献等により、愛知県に確実に生息している（いた）と判断された種のうち、意図的・非意図的にかかわらず県内に移入された種及び一過性の確認種を除く種を調査対象とした。

調査対象範囲は、愛知県内（島嶼部を含む）の陸上及び陸水中とした。また、沿岸の浅海域、干

潟、河口部も含むものとした。

⑦ クモ類

クモ類の種を単位とし、標本あるいは文献等により、愛知県に確実に生息している（いた）と判断された種のうち、意図的・非意図的にかかわらず県内に移入された種を除く種を調査対象とした。

調査対象範囲は、愛知県内（島嶼部を含む）の陸上及び陸水中とした。また、沿岸の浅海域、干潟、河口部も含むものとした。

⑧ 貝 類

貝類の種（亜種）を単位とし、標本あるいは文献等により、愛知県に確実に生息している（いた）と判断された種のうち、意図的・非意図的にかかわらず県内に移入された種を除く種を調査対象とした。調査対象範囲は愛知県内（島嶼部を含む）の陸域（淡水域を含む）から海域（内湾域）までとした。海域の調査対象範囲については以下に詳記する。

本県では、平成 14 年発行の「レッドデータブックあいち動物編」（以下、「レッドデータブックあいち 2002 動物編」という。）より陸産貝類、淡水産貝類に加えて内湾産貝類を対象としていた。この時点では各県単位のレッドデータブックに海洋生物、海産貝類を対象として扱っているものは非常に少なかった。和田ほか（1996）によって干潟域の底生生物を対象とした現状が報告され、海産貝類の腹足綱、二枚貝綱が網羅的にリストアップされ 340 種もの絶滅種、絶滅危惧種が掲載された。その後、各県版レッドデータブックも海洋生物、海産貝類を対象として扱うものが多くなり、2012 年には日本ベントス学会編集による干潟の絶滅危惧動物図鑑 - 海岸ベントスのレッドデータブックが刊行され、それを受けて 2014 年に環境省のレッドデータブックでも従来の陸域に加えて、初めて河口域及び内湾の干潟等に生息する種を対象とした。

本書でも引き続き陸域、淡水域に加えて内湾域を対象とした。また、内湾域と言っても様々な生息場所が含まれているため、以下のとおり河口域のヨシ原湿地、干潟、潮下帯に区分した。

- ・ヨシ原湿地：内湾奥の河口域の中潮線付近より上部に発達したヨシ原群落内の干潟と後背湿地を指し、よく保存されたヨシ原湿地では塩湖、感潮クリークとヨシ原より上部の陸上植生など多様な生息場所に恵まれる（ヨシ原湿地の詳細は 734 頁の Q&A を参照）。
- ・干潟：河口域の河川内にできる干潟で、河川の堤防に沿って発達する河口干潟と河口域の海に面した部分に海岸線と平行に広がる前浜干潟を含む。三河湾島嶼域などでは岩礁海岸、転石地、礫の多い砂泥底も含まれる。
- ・潮下帯：本書では干潟より深く、水深約 20 m より浅い部分の海底を指す。本書では砂質、泥質など軟らかい底質の海底を主に調査した。干潮時でも干上がることはないので、直接調査するには潜水、ドレッジなどの特殊な方法が必要である。

なお、これらの生息場所の定義については水産庁・水産資源保護協会（1988）、木村・木村（1999）に準じ、潮下帯の最大水深については本書で新たに定義した。

上述の生息場所は連続的に立地するが、各生息場所にはその生息場所のみ特有な貝類も多い。

(2) 調査体制

調査の実施に当たっては、平成 26 年度に野生動植物に関する専門の学識者を中心とした「愛知県絶滅危惧種等調査検討会」を設置し、調査に関する事項として、調査の進め方、調査結果のデータベース化等を、レッドデータブック作成に関する事項として、評価方法、評価結果等を検討した。

実際の調査及びレッドデータブック作成に関する作業は、分類群毎に実施し、検討会において調査・作業状況を報告するとともに、分類群間での連絡調整を行った。

検討会の体制及び委員は表 1 のとおりである。

表 1 愛知県絶滅危惧種等調査検討会（敬称略）

専門分野等	委 員	任 期
維管束植物	芹沢俊介（愛知教育大学教育学部名誉教授）	H26.10～R02.3
〃	村松正雄（元瀬戸市立水無瀬中学校教諭）	〃
藓類	成田 務（鳳来寺山自然科学博物館学術委員）	〃
苔類	山田耕作（公益財団法人服部植物研究所非常勤研究員）	〃
哺乳類	子安和弘（愛知学院大学歯学部講師）	H26.10～R02.3
鳥類	高橋伸夫（愛知県野鳥保護連絡協議会議長）	〃
両生類・爬虫類	島田知彦（愛知教育大学教育学部准教授）	〃
汽水・淡水魚類	谷口義則（名城大学人間学部教授）	〃
昆虫類	間野隆裕（日本鱗翅学会幹事）	〃
クモ類	緒方清人（日本蜘蛛学会会員）	〃
貝類	木村昭一（日本貝類学会評議員）	〃

3. 調査内容

(1) 調査方法

調査は、平成 26 年度から令和元年度にかけて、分類群毎に以下の方法により実施した。

① 哺乳類

調査対象種について、以下の 3 方法により生息状況の把握を行った。なお、調査結果の記録にあたっては、データベース化を考慮し、所定の項目を電子データとして入力した。

- ・文献調査

既存の文献を収集し、生息場所、確認時期等を調査した。

- ・標本調査

既存の標本に関する情報を収集し、生息場所、確認時期等を調査するとともに、必要に応じて未同定標本の同定を行った。

- ・現地調査

現地踏査を行い、生息状況を調査するとともに、必要に応じて文献調査及び標本調査で把握した既知産地の現状についても調査した。

② 鳥 類

調査対象種について、以下の方法により生息状況の把握を行った。なお、調査結果の記録にあたっては、データベース化を考慮し、所定の項目を電子データとして入力した。

- ・文献調査

調査対象種について、既存の文献、調査記録、観察記録等を収集し、記録年月日、生息場所、個体数等の整理を行った。

- ・現地調査

文献調査および情報収集をした中で、情報が不足している種や地域等について、個別に現地を踏査した。

③ 爬虫類

調査対象種について、以下の 3 方法により生息状況の把握を行った。なお、調査結果の記録にあたっては、データベース化を考慮し、所定の項目を電子データとして入力した。

- ・文献調査

既存の文献を収集し、生息場所、確認時期等を調査した。

- ・標本調査

既存の標本に関する情報を収集し、生息場所、確認時期等を調査するとともに、必要に応じて未同定標本の同定を行った。

- ・現地調査

現地踏査を行い、生息状況を調査するとともに、必要に応じて文献調査及び標本調査で把握した既知産地の現状についても調査した。

④ 両生類

調査対象種について、以下の 3 方法により生息状況の把握を行った。なお、調査結果の記録にあ

たっては、データベース化を考慮し、所定の項目を電子データとして入力した。

- ・文献調査

既存の文献を収集し、生息場所、確認時期等を調査した。

- ・標本調査

既存の標本に関する情報を収集し、生息場所、確認時期等を調査するとともに、必要に応じて未同定標本の同定を行った。

- ・現地調査

現地踏査を行い、生息状況を調査するとともに、必要に応じて文献調査及び標本調査で把握した既知産地の現状についても調査した。

⑤ 汽水・淡水魚類

調査対象種について、以下の 3 方法により生息状況の把握を行った。なお、調査結果の記録にあたっては、データベース化を考慮し、所定の項目を電子データとして入力した。

- ・文献調査

既存の文献を収集し、生息場所、確認時期等を調査した。

- ・標本調査

既存の標本に関する情報を収集し、生息場所、確認時期等を調査するとともに、必要に応じて未同定標本の同定を行った。

- ・現地調査

現地踏査を行い、生息状況を調査するとともに、必要に応じて文献調査及び標本調査で把握した既知産地の現状についても確認・調査した。

⑥ 昆虫類

調査対象種について、以下の 3 方法により生息状況の把握を行った。なお、調査結果の記録にあたっては、データベース化を考慮し、所定の項目を電子データとして入力した。

- ・文献調査

既存の文献を収集し、生息場所、確認時期等を調査した。

- ・標本調査

既存の標本に関する情報を収集し、生息場所、確認時期等を調査するとともに、必要に応じて未同定標本の同定を行った。

- ・現地調査

現地踏査を行い、生息状況を調査するとともに、必要に応じて文献調査及び標本調査で把握した既知産地の現状についても調査した。

⑦ クモ類

調査対象種について、以下の 3 方法により生息状況の把握を行った。なお、調査結果の記録にあたっては、データベース化を考慮し、所定の項目を電子データとして入力した。

- ・文献調査

既存の文献を収集し、生息場所、確認時期等を調査した。

- ・標本調査

既存の標本に関する情報を収集し、生息場所、確認時期等を調査するとともに、必要に応じて未同定標本の同定を行った。

- ・現地調査

現地踏査を行い、生息状況を調査するとともに、必要に応じて文献調査及び標本調査で把握した既知産地の現状についても調査した。

⑧ 貝 類

調査対象種について、以下の 3 方法により生息状況の把握を行った。なお、調査結果の記録にあたっては、データベース化を考慮し、所定の項目を電子データとして入力した。

- ・文献調査

既存の文献を収集し、生息場所、確認時期等を調査した。

- ・標本調査

既存の標本に関する情報を収集し、生息場所、確認時期等を調査するとともに、必要に応じて未同定標本の同定を行った。

- ・現地調査

現地踏査を行い、生息状況を調査するとともに、必要に応じて文献調査及び標本調査で把握した既知産地の現状についても調査した。また、海域の水深 20 m までの調査を行う方法としては、船舶を使用したドレッジ調査を行った（ドレッジ調査の詳細は 735 頁の Q&A を参照）。

（２）評価の区分及び方法

調査対象種の絶滅のおそれの程度については、調査結果をもとに表 2 に示す評価区分基準に従い判定した。

「絶滅」の評価については、「過去に確実に生息していた種」と判断する文献や標本の整備状況及び移動能力が各分類群毎に異なることから、表 3 に示す要件により判定した。なお、評価区分のうち野生絶滅は、原産地や遺伝的混乱の防止体制に疑問があると思われる場合もあり、また個人的に管理されているものをすべて確認することも困難であると判断されたので、今回のレッドデータブックでは絶滅とあわせ、絶滅・野生絶滅として扱うこととした（ただし、表記上は絶滅（EX）とした）。また、愛知県ではリスト外と判定されたが、環境省が平成 31 年 1 月に公表した全国版レッドリストに掲載されている種は、「国リスト」としてリストに掲載した。

判定の結果は、「レッドデータブックあいち 2020 動物編」の基礎となる第四次レッドリスト（案）としてとりまとめた。そして、レッドリストの精度の充実を図るため、平成 31 年 4 月から令和元年 5 月にかけて情報及び意見（パブリックコメント）の収集を行った。これらを勘案し、更に令和元年 11 月末日までの情報を加えて最終的な判定を行い、最新のレッドリストとして本書に掲載した。なお、パブリックコメントで寄せられた意見のうち本書の記述に反映できなかった主要なものは、資料編 Q&A に収録した。

① 哺乳類

収集された情報をもとに、全国的な分布の状況等を勘案して総合的に判断・評価を行い、定性的要件に従い絶滅のおそれの程度を判定した。

② 鳥 類

鳥類については、繁殖、越冬、通過の時期で評価が異なることから、評価対象個体群ごとに評価を行った。また、各調査対象個体群について、愛知県内における「推定個体数」、「個体数の増減」、「生息環境の減少傾向」、「推定生息地数」の 4 項目について、それぞれ表 4 に示す 5 段階で評価し、その総点をその種の評価点とし、原則として総点 28 以上を絶滅危惧ⅠA類（CR）、22～27 を絶滅危惧ⅠB類（EN）、16～21 を絶滅危惧Ⅱ類（VU）、10～15 を準絶滅危惧（NT）と判定した。

③ 爬虫類

収集された情報をもとに、全国的な分布の状況等を勘案して総合的に判断・評価を行い、定性的要件に従い絶滅のおそれの程度を判定した。

④ 両生類

収集された情報をもとに、全国的な分布の状況等を勘案して総合的に判断・評価を行い、定性的要件に従い絶滅のおそれの程度を判定した。

⑤ 汽水・淡水魚類

収集された情報をもとに、全国的な分布の状況等を勘案して総合的に判断・評価を行い、定性的要件に従い絶滅のおそれの程度を判定した。

⑥ 昆虫類

収集された情報をもとに、全国的な分布の状況等を勘案して総合的に判断・評価を行い、定性的要件に従い絶滅のおそれの程度を判定した。なお、トンボ目については、データの蓄積が比較的豊富であることから、表 5 のように市町村単位（平成の大合併前の旧市町村）での「現存数」「絶滅率」をカテゴリーに当てはめ、判定した（手法の詳細は資料編参照）。

⑦ クモ類

収集された情報をもとに、全国的な分布の状況等を勘案して総合的に判断・評価を行い、定性的要件に従い絶滅のおそれの程度を判定した。

⑧ 貝 類

収集された情報をもとに、全国的な分布の状況等を勘案して総合的に判断・評価を行い、定性的要件に従い絶滅のおそれの程度を判定した。

貝類においては収集、整理可能な情報が非常に少なく、多くの種について客観的に評価できるデータが不足している。多くの希少種は限られた生息場所に飛び飛びに分布することが多く、定量的な調査は非常に困難である（風呂田ほか,1999：木村・木村,1999）。従って、ある程度定性的なランク付けを行わざるを得なかった。

表2 「レッドデータブックあいち 2020 動物編」の評価区分基準

区分及び基本概念		定性的要件		準定量的要件※
絶滅 Extinct (EX) ・ 野生絶滅 Extinct in the Wild (EW)	愛知県ではすでに絶滅したと考えられる種。 野生では絶滅し、飼育・栽培下でのみ存続している種。	過去に愛知県に生息したことが確認されており、愛知県において少なくとも野生ではすでに絶滅したと考えられる種（飼育・栽培下では存続している種を含む）。 【確実な情報があるもの】 1 今回の調査や記録により、すでに野生で絶滅したことが確認された。 【情報量が少ないもの】 2 過去50年間前後の間に、信頼できる生息の情報が得られていない。		— 過去50年間信頼できる生息情報が得られていない
絶滅危惧Ⅰ類 Critically Endangered + Endangered (CR+EN)	絶滅の危機に瀕している種。 現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、野生での存続が困難なもの。	次のいずれかに該当する種。 【確実な情報があるもの】 1 既知のすべての個体群で、危機的水準にまで減少している。 2 既知のすべての生息地で、生息条件が著しく悪化している。 3 既知のすべての個体群がその再生産能力を上回る捕獲・採取圧にさらされている。 4 ほとんどの分布域に交雑のおそれのある別種が侵入している。 【情報量が少ないもの】 5 それほど遠くない過去(30年～50年前後)の生息記録以後確認情報がなく、その後信頼すべき調査が行われていないため、絶滅したかどうかの判断が困難なもの。	絶滅危惧ⅠA類 (CR)	ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの。 表4の評価点の合計が28以上 市町村単位で絶滅率80%以上、かつ現存数1以下
			絶滅危惧ⅠB類 (EN)	I A類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの。 表4の評価点の合計が22～27 市町村単位で絶滅率50%以上、かつ現存数1.5～5
絶滅危惧Ⅱ類 Vulnerable (VU)	絶滅の危険が増大している種。 現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧Ⅰ類」のランクに移行することが確実と考えられるもの。	次のいずれかに該当する種 【確実な情報があるもの】 1 大部分の個体群で個体数が大幅に減少している。 2 大部分の生息地で生息条件が明らかに悪化しつつある。 3 大部分の個体群がその再生産能力を上回る捕獲・採取圧にさらされている。 4 分布域の相当部分に交雑可能な別種が侵入している。		表4の評価点の合計が16～21 市町村単位で絶滅率20%以上、かつ現存数5.5～10
準絶滅危惧 Near Threatened (NT)	存続基盤が脆弱な種。 現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧Ⅰ類」として上位ランクに移行する要素を有するもの。	次に該当する種。 生息状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強ましていると判断されるもの。具体的には、分布域の一部において、次のいずれかの傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 1 個体数が減少している。 2 生息条件が悪化している。 3 過度の捕獲・採取圧による圧迫を受けている。 4 交雑可能な別種が侵入している。		表4の評価点の合計が10～15 市町村単位で絶滅率20%以上、かつ現存数10.5～15
情報不足 Data Deficient (DD)	「絶滅」「絶滅危惧」「準絶滅危惧」のいずれかに該当する可能性が高いが、評価するだけの情報が不足している種。	環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧のカテゴリーに移行し得る属性（具体的には、次のいずれかの要素）を有しているが、生息状況をはじめとして、ランクを判定するに足る情報が得られていない種。あるいは確認例が極めて少なく、希少であるか否かも不明な種。 1 どの生息地においても生息密度が低く希少である。 2 生息地が極限されている。 3 生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。 4 生活史の一部または全部で特殊な環境条件を必要としている。		—
地域個体群 Threatened Local Population (LP)	その種の国内における生息状況に鑑み、愛知県において特に保全のための配慮が必要と考えられる特徴的な個体群。			—
国リスト	環境省レッドリストに掲載されているが、愛知県において上記の要件に該当しない種。			—

※準定量的要件は鳥類（上段）及び昆虫類のトンボ目（下段）のみ適用。

表 3 過去の生息種の要件

分類群	内 容
哺乳類	縄文時代草創期以降の確認記録があるもの。一過性の種、移入種、後期更新世以前の化石種は除外。
鳥 類	継続（経年的）確認記録がある種。迷行的に記録される種など一過性の種は除外。
爬虫類	標本等の確実な生息記録がある種。
両生類	標本等の確実な生息記録がある種。
汽水・淡水魚類	標本の確実な生息記録がある種。
昆虫類	標本等の確実な生息記録がある種。隣接県での生息状況も加味。
クモ類	標本等の確実な生息記録がある種。県内調査記録は昭和 35 年以降。
貝 類	標本等の確実な生息記録がある種。

表 4 各評価項目の評価基準（鳥類）

評価項目	評価点	8	4	2	1	0
推定個体数 (注)		0 より多く 10 未満	100 未満	1,000 未満	10,000 未満	10,000 以上
個体数の増減		急減した (80%以上の 減少)	減少した (50%程度の 減少)	減少した (20%程度の 減少)	増減なし	増加した
生育環境の減少傾向 (餌の減少を含む)		極めて大きい	大きい	あり	なし	増加した
推定生息地数		県内の生息地が 2 カ所以下か、散 在していて 10 未 満のつがいが収 容できる程度	県内の生息地が 5 カ所以下か、散 在していて 100 未満のつがいが 収容できる程度	やや少ない	やや多い	多い

注：繁殖の評価に関しては、繁殖している雌の推定個体数とする。

表 5 評価基準（昆虫類のうちトンボ目）

カテゴリー	基 準
絶 滅	過去 50 年間信頼できる生息情報が得られていない。
絶滅危惧ⅠA類	絶滅率 80%以上、かつ現存数 1 以下
絶滅危惧ⅠB類	絶滅率 50%以上、かつ現存数 1.5～5
絶滅危惧Ⅱ類	絶滅率 20%以上、かつ現存数 5.5～10
準絶滅危惧	絶滅率 20%以上、かつ現存数 10.5～15

注 1：現存の定義

現存：約 10 年以内に現存を確認し、かつ生息環境も残されている。

現存可能性あり：約 10 年以内に確認されたが、発生地が不明で、現存を確認できない。または、約 10 年以内に現存を確認していないが、生息環境は残されていると推測される。

絶滅：生息環境が破壊されており、生存の可能性はない、または極めて低い。

注 2：絶滅率の定義

絶滅率＝（（記録のある市町村数）－（現存する市町村数））÷（記録のある市町村数）

現存する市町村は 1、現存の可能性のある市町村は 0.5、絶滅した市町村は 0 とする。

4. 調査結果

(1) 概 要

以上の手法により評価した結果、「レッドデータブックあいち 2020 動物編」に掲載された種数は、表 6 のとおりである。

絶滅のおそれのある種（絶滅危惧Ⅰ類及びⅡ類）の数は 364 であり、その内訳は、哺乳類が 14、鳥類が 67、爬虫類が 1、両生類が 9、汽水・淡水魚類が 26、昆虫類が 80、クモ類が 30 及び貝類が 137 となっている。また、現時点での絶滅危険度は小さいものの、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」種に移行する要素を有する種（準絶滅危惧）の数は 218 であり、その内訳は、哺乳類が 10、鳥類が 17、爬虫類が 1、両生類が 5、汽水・淡水魚類が 6、昆虫類が 90、クモ類が 8 及び貝類が 81 となっている。さらに、県内ですでに絶滅と判定された種の数 32 であり、その内訳は、哺乳類が 3、鳥類が 3、昆虫類が 14 及び貝類が 12 となっている。

また、絶滅危惧のいずれかの階級に該当する可能性が高いと思われるが、情報不足として判断を見送った種数は 89 であり、その内訳は、哺乳類が 2、爬虫類が 4、汽水・淡水魚類が 7、昆虫類が 30、クモ類が 1 及び貝類が 45 となっている。

国内における生息状況から、本県において保全のための配慮が必要と考えられる特徴的な個体群（地域個体群）は、哺乳類で 2 個体群、鳥類で 2 個体群となっている。

なお、環境省が平成 30 年度に公表した全国版レッドリスト掲載種のうち、本県での生息状況からは絶滅危険度が小さいなどとして愛知県版レッドデータブックではリスト外と判定された種は 49 である。

「レッドリストあいち 2015」掲載種と比較すると、絶滅のおそれのある種（絶滅危惧Ⅰ類及びⅡ類）の数は 27 増加し、その内訳は、哺乳類が 1、鳥類が 1、両生類が 2、汽水・淡水魚類が 1、貝類が 24 増加、クモ類が 2 減少となっている。また、県内では既に絶滅した種数は 8 増加し、その内訳は、鳥類が 2、昆虫類が 3、貝類が 3 となっている。

表6 「レッドデータブックあいち 2020 動物編」掲載種数

評価区分 対象	絶滅 (EX)	絶滅のおそれのある種				準絶滅 危惧 (NT)	情報 不足 (DD)	計	地域 個体群 (LP)	国 リスト	県内 確認 種数
		絶滅 危惧 I A 類 (CR)	絶滅 危惧 I B 類 (EN)	絶滅 危惧 II 類 (VU)	小計					環境省 レッド リスト 掲載種	
哺乳類	3 (3)	6 (6)	4 (3)	4 (4)	14 (13)	10 (10)	2 (2)	29 (28)	2 (2)	0 (0)	73 (72)
鳥類	3 (1)	13 (15)	25 (19)	29 (32)	67 (66)	17 (16)	0 (0)	87 (83)	2 (3)	5 (4)	426 (413)
爬虫類	0 (0)	0 (0)	1 (1)	0 (0)	1 (1)	1 (1)	4 (4)	6 (6)	0 (0)	0 (0)	16 (19)
両生類	0 (0)	4 (3)	4 (3)	1 (1)	9 (7)	5 (4)	0 (3)	14 (14)	0 (0)	1 (1)	22 (21)
汽水・淡水 魚類	0 (0)	8 (8)	9 (9)	9 (8)	26 (25)	6 (7)	7 (7)	39 (39)	0 (0)	9 (9)	198 (171)
昆虫類	14 (11)	17 (21)	31 (26)	32 (33)	80 (80)	90 (91)	30 (26)	214 (208)	0 (0)	23 (21)	10,443 (約 10,100)
クモ類	0 (0)	3 (3)	17 (17)	10 (12)	30 (32)	8 (6)	1 (1)	39 (39)	0 (0)	0 (0)	590 (570)
貝類(小計)	12 (9)	53 (55)	26 (15)	58 (43)	137 (113)	81 (61)	45 (36)	275 (219)	0 (0)	11 (11)	約 690 (約 590)
陸産	0 (0)	6 (5)	5 (1)	17 (14)	28 (20)	25 (20)	4 (9)	57 (49)	0 (0)	3 (3)	約 150 (約 150)
淡水産	5 (5)	4 (3)	0 (0)	2 (2)	6 (5)	5 (5)	5 (6)	21 (21)	0 (0)	2 (2)	39 (39)
内湾産	7 (4)	43 (47)	21 (14)	39 (27)	103 (88)	51 (36)	36 (21)	197 (149)	0 (0)	6 (6)	約 500 (約 400)
計	32 (24)	104 (111)	117 (93)	143 (133)	364 (337)	218 (196)	89 (79)	703 (636)	4 (5)	49 (46)	約 12,450 (約 11,960)

注1: 表中()内は、「レッドリストあいち 2015」の掲載種数を示す。

注2: 鳥類については、評価対象個体群ごとにランクが異なる場合は、最上位の評価区分とした。

注3: 国リストとは、環境省が平成30年度に公表したレッドリスト掲載種のうち、本県のリスト対象外と判定された種を示す。

注4: 県内確認種数は「グリーンデータブックあいち 2018」(愛知県環境部自然環境課, 2018)による(クモ類及び貝類を除く)。

(2) 哺乳類

① 愛知県における哺乳類の概況

愛知県は本州中部地方の太平洋岸に面しており、最も標高の高い地点は長野県との県境にある茶臼山の標高 1,415m である。標高 300m 以上の山地は主として北東部である奥三河地区にあり、平野部は南西部の尾張地区（尾張平野）と三河南部（三河平野）に多い。尾張平野は木曽川の沖積地であるが、西三河平野部には矢作川水系と境川水系が流れ、東三河平野部には豊川水系が流れている。海域としては、(i)知多半島の西方に伊勢湾、(ii)知多半島と渥美半島に挟まれて内海として存在する三河湾、(iii)渥美半島の南方に遠州灘（表浜）の沿岸、の 3 海域がある。

上記のように、愛知県では高山帯・亜高山帯植生を欠いているものの、冬には厳しく冷え込む東三河山間部から温暖な知多半島・渥美半島にいたるまで多様な環境が存在しており、そこには陸・海・淡水・空に生息域をひろげている哺乳類が生息している。現在、愛知県に何種の野生哺乳類が生息しているか、という問題への回答はきわめて困難であるといわざるを得ない。愛知県の哺乳類相の研究として初めての広範な調査をおこなった宮尾ほか（1984）は 7 目 36 種（追記のミズラモグラを含む）であるとしている。しかし、この中には近年絶滅したオオカミとカワウソが含まれていないほか、海獣類はすべて除外されている。また、再野生化した家畜であるアナウサギ（1958 年 9 月から旧幡豆町前島に生息していたが、1997 年 11 月に餌を与えていた観光施設が閉鎖され、その後動物業者や世界猿類動物園[犬山市]に移されて無人島になった、とされている：朝日新聞 1998 年 5 月 5 日朝刊[愛知版]による）、ノイヌ、ノネコ、アライグマ（国内で最初に野生化したのは犬山市で、同市の動物施設から 1962 年に逃亡した 12 頭がもとになっている：揚妻, 2001）も野生哺乳類としての扱いを受けていなかった。今回、愛知県における哺乳類の絶滅危惧種のリストを作成するにあたり、絶滅種ないし絶滅危惧種には人為的に移入された種や一過性の確認種は除き、また歴史時代に入る前に絶滅した種（いわゆる化石種）も含めていない。しかし、愛知県における哺乳類の概況を述べる際には、縄文時代草創期以降に生息した野生哺乳類について知られている記録も含める必要があると判断して海獣を含めたリストを作成した結果、その総数は 9 目 73 種（1 亜種を含む）となった（愛知県環境部自然環境課編「グリーンデータブックあいち 2018 哺乳類・鳥類・爬虫類編（子安ほか, 2018）」における「愛知県哺乳類目録」の項を参照）。この中には上記の絶滅種や再野生化家畜も含まれている。クジラ類の記録として漂着記録（ストランディング・レコード）はきわめて重要である（石川, 1994; 川田ほか, 2003; 2004; 栗原ほか, 2005; 2006a; 2006b; 2007; 保尊ほか, 2008; 安井ほか, 2012）。

今回参照された愛知県産野生哺乳類の県内目録（9 目 73 種：グリーンデータブックあいち 2018 哺乳類・鳥類・爬虫類編）が前回の目録（9 目 71 種：レッドデータブックあいち 2009 動物編）と異なるのは、県内で新規に発見されたユビナガコウモリ（翼手目ユビナガコウモリ科）、オヒキコウモリ（翼手目オヒキコウモリ科）の 2 種が付け加えられたことである。翼手目で 2 種が新たに愛知県産哺乳類として認識されたことになる。これらのうち、ユビナガコウモリは 2017 年 2 月に豊田市で越冬中の個体が初めて確認され、その後も目撃等の確認があったため愛知県でも生息することが明らかになった。また、オヒキコウモリは現在国内に 6 カ所の集団生息地が確認されており、そのうちの 2 カ所はいずれも愛知県に隣接する静岡県（海に突き出た岸壁）と三重県の無人島である（Sano, 2015）。愛知県では名古屋市内の 2 地点（中区、守山区）で確認されているのみであり（野呂, 2015）、生息実態は現在のところ不明である。海獣類のうち鯨類（クジラやイルカ）では、今回の評価ではスナメリのみがレッドリストに掲載されている。これはスナメリが沿岸性であり、伊勢湾と三河湾

の内部に定住していることが大きな理由となっている。しかしながら、愛知県には広大な砂地の海岸線があり、多くのストランディング記録による打ち上げによる記録が存在する。必ずしも沿岸海域のみに定住していなくても、回遊域に愛知県の沿岸域が含まれる海獣類の種については、今後の解析によってレッドリストの対象としてふさわしい種が評価される可能性がある。そのためにも、今後の調査、報告、記録などの多方面における研究者や一般の方々の幅広い理解と協力によって、海獣類を含む愛知県産野生哺乳類の記録の更新が必要とされている（最近のストランディング記録については安井ほか, 2012などを参照）。

② 愛知県における絶滅危惧種の概況

今回、愛知県で 50 年以上生息確認されておらず絶滅しているとみなされた種（絶滅：EX）は 3 種であった。また、絶滅のおそれのある種（絶滅危惧Ⅰ類及びⅡ類：CR・EN 及び VU）としてリストに取り上げた哺乳類は 14 種で、その内訳は、絶滅危惧ⅠA類（CR）6 種、絶滅危惧ⅠB類（EN）4 種、絶滅危惧Ⅱ類（VU）4 種となっている。また、現時点での絶滅危険度は小さいものの、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」種に移行する要素を有する種（準絶滅危惧：NT）とされた哺乳類は 10 種である。また、絶滅のおそれの程度を評価するに足る情報が不足している種（DD）は 2 種であった。さらに、国内における生息状況から、本県において保全のための配慮が必要と考えられる特徴的な個体群（地域個体群：LP）は 2 個体群であった。

愛知県内で絶滅とされた 3 種はすべて食肉目で、オオカミ（イヌ科：県内絶滅時期は 1890 年前後）、ニホンアシカ（アシカ科：1906 年頃に県内絶滅）、カワウソ（イタチ科：1913 年前後に県内絶滅）が相当する。これら 3 種のうち、オオカミは国内でも絶滅しており（北海道で 1800 年代末、本州で 1905 年）、アシカは 1974 年、カワウソも 1979 年を最後にして国内での確認例はない。ただし、2017 年から 2018 年にかけて長崎県対馬で確認された 4 頭のカワウソは、韓国から漂着したユーラシアカワウソ（ニホンカワウソと同種のカワウソではあるが遺伝的に差異がある）と考えられている。

絶滅危惧Ⅰ類（CR・EN）とされた 10 種（ⅠA類 6 種、ⅠB類 4 種）の内訳は、齧歯目 1 種（ニホンモモンガ：リス科）、トガリ目 1 種（ミズラモグラ：モグラ科）、翼手目 7 種（ヤマコウモリ、チチブコウモリ、ヒナコウモリ、ノレンコウモリ、テングコウモリ、コテングコウモリ：以上ヒナコウモリ科；ユビナガコウモリ：ユビナガコウモリ科）、食肉目 1 種（ツキノワグマ：クマ科）である。これらの大半が森林性の種であって、なかでもコウモリ類が過半数の 7 種を占めているのが特徴である。ユビナガコウモリは今回初めて愛知県レッドリストに加えられた。

絶滅危惧Ⅱ類（VU）とされた 4 種の内訳は、齧歯目 1 種（カヤネズミ：ネズミ科）、トガリ目 2 種（カワネズミ：トガリ科、アズマモグラ：モグラ科）、翼手目 1 種（モモジロコウモリ：ヒナコウモリ科）である。

準絶滅危惧（NT）とされた 10 種の内訳は、齧歯目 5 種（ニホンリス、ムササビ：以上リス科；ヤマネ：ヤマネ科；ハタネズミ、スミスネズミ：ともにネズミ科）、ウサギ目 1 種（ニホンノウサギ：ウサギ科）、翼手目 2 種（コキクガシラコウモリ、キクガシラコウモリ：ともにキクガシラコウモリ科）、食肉目 1 種（ニホンテン：イタチ科）、鯨目 1 種（スナメリ：ネズミイルカ科）である。

情報不足（DD）の 2 種は食肉目のアナグマ（イタチ科）と翼手目のオヒキコウモリである。

保全のための配慮が必要と考えられる地域個体群（LP）と判断されたのはニホンジネズミ（トガリ目トガリ科）の佐久島個体群とコウベモグラ（トガリ目モグラ科）の名古屋城外堀個体群の 1 目 2 種 2 個体群である。

③ 愛知県哺乳類レッドリスト

目及び科の配列と名称、種の配列及び和名、学名は、原則として“The wild mammals of Japan, 2nd edition” (Ohdachi et al., 2015) に準拠した。

絶滅(EX)

No.	目 名	科 名	和 名	学 名	国ランク
1	食肉(ネコ)	イヌ	オオカミ	<i>Canis lupus</i> Linnaeus	EX
2	食肉(ネコ)	イタチ	カワウソ	<i>Lutra lutra</i> (Linnaeus)	EX
3	食肉(ネコ)	アシカ	ニホンアシカ	<i>Zalophus japonicus</i> (Peter)	CR

絶滅危惧 I A類(CR)

No.	目 名	科 名	和 名	学 名	国ランク
1	トガリ(モグラ)	モグラ	ミズラモグラ	<i>Euroscaptor mizura</i> (Günther)	NT
2	翼手(コウモリ)	ヒナコウモリ	ヤマコウモリ	<i>Nyctalus aviator</i> Thomas	VU
3	翼手(コウモリ)	ヒナコウモリ	チチブコウモリ	<i>Barbastella darjelingensis</i> (Hodgson)	LP
4	翼手(コウモリ)	ヒナコウモリ	ノレンコウモリ	<i>Myotis bombinus</i> Thomas	VU
5	翼手(コウモリ)	ヒナコウモリ	コテングコウモリ	<i>Murina ussuriensis</i> Ognev	
6	食肉(ネコ)	クマ	ツキノワグマ	<i>Ursus thibetanus</i> G.Cuvier	LP

絶滅危惧 I B類(EN)

No.	目 名	科 名	和 名	学 名	国ランク
1	翼手(コウモリ)	ヒナコウモリ	ヒナコウモリ	<i>Vespertilio sinensis</i> (Peters)	
2	翼手(コウモリ)	ヒナコウモリ	テングコウモリ	<i>Murina hilgendorfi</i> (Peters)	
3	翼手(コウモリ)	ユビナガコウモリ	ユビナガコウモリ	<i>Miniopterus fuliginosus</i> (Hodgson)	
4	齧歯(ネズミ)	リス	ニホンモモンガ	<i>Pteromys momonga</i> Temminck	

絶滅危惧 II 類(VU)

No.	目 名	科 名	和 名	学 名	国ランク
1	トガリ(モグラ)	トガリ	カワネズミ	<i>Chimarrogale platycephalus</i> (Temminck)	LP
2	トガリ(モグラ)	モグラ	アズマモグラ	<i>Mogera imaizumii</i> (Kuroda)	
3	翼手(コウモリ)	ヒナコウモリ	モモジロコウモリ	<i>Myotis macrodactylus</i> (Temminck)	
4	齧歯(ネズミ)	ネズミ	カヤネズミ	<i>Micromys minutus</i> (Pallas)	

準絶滅危惧(NT)

No.	目 名	科 名	和 名	学 名	国ランク
1	翼手(コウモリ)	キクガシラコウモリ	キクガシラコウモリ	<i>Rhinolophus ferrumequinum</i> (Schreber)	
2	翼手(コウモリ)	キクガシラコウモリ	コキクガシラコウモリ	<i>Rhinolophus cornutus</i> Temminck	
3	齧歯(ネズミ)	ヤマネ	ヤマネ	<i>Glirulus japonicus</i> (Schinz)	
4	齧歯(ネズミ)	ネズミ	スミスネズミ	<i>Eothenomys smithii</i> (Thomas)	
5	齧歯(ネズミ)	ネズミ	ハタネズミ	<i>Microtus montebelli</i> (Milne-Edwards)	
6	齧歯(ネズミ)	リス	ニホンリス	<i>Sciurus lis</i> Temminck	LP
7	齧歯(ネズミ)	リス	ムササビ	<i>Petaurista leucogenys</i> (Temminck)	
8	ウサギ	ウサギ	ニホンノウサギ	<i>Lepus brachyurus</i> Temminck	
9	食肉(ネコ)	イタチ	ニホンテン	<i>Martes melampus</i> (Wagner)	
10	鯨(クジラ)	ネズミイルカ	スナメリ	<i>Neophocaena asiaorientalis</i> (Pilleri et Gühr)	

情報不足(DD)

No.	目 名	科 名	和 名	学 名	国ランク
1	翼手(コウモリ)	オヒキコウモリ	オヒキコウモリ	<i>Tadarida insignis</i> (Blyth)	VU
2	食肉(ネコ)	イタチ	ニホンアナグマ	<i>Meles anakuma</i> Temminck	

地域個体群(LP)

No.	目 名	科 名	和 名	学 名	国ランク
1	トガリ(モグラ)	トガリ	ニホンジネズミ(佐久島の個体群)	<i>Crociodura dsinezumi</i> (Temminck)	
2	トガリ(モグラ)	モグラ	コウベモグラ(名古屋城外堀の個体群)	<i>Mogera wogura</i> (Temminck)	

④ 愛知県哺乳類レッドリストの変更点

本書に掲載した哺乳類レッドリスト（見直し後）と「レッドリストあいち 2015」に掲載した哺乳類レッドリスト（見直し前）の新旧対照表を以下に示した。

		見直し前のランク									種数
見直し後の ランク	EX	CR	EN	VU	NT	DD	LP	国リスト★1	リスト外・未評価★2		
	EX オオカミ カワウソ ニホンアシカ★1									3	
	CR	ミズナモグラ ヤマコウモリ チチブコウモリ ノレンコウモリ コテンゴウモリ ツキノワグマ								6	
	EN		ヒナコウモリ テンゴコウモリ ニホンモモンガ★2						ユビナガコウモリ	4	
	VU			カワネズミ アズマモグラ モモンゴロウモリ カヤネズミ						4	
	NT				キタガシラコウモリ コキクガシラコウモリ ヤマネ スミスネズミ ハタネズミ ニホンリス ムササビ ニホンノウサギ★3 ニホンテン★4 スナメリ				10		
	DD					オセキコウモリ ニホンアナグマ★5				2	
	LP						ニホンジネズミ (佐久島の個体群) コウベモグラ (名古屋城外環の個体群)			2	
	国リスト ★1 ランク外									0	
	★3									0	
種数		3	6	3	4	10	2	2	0	1	31

*1「国リスト」：環境省レッドリストに記載されているが、愛知県においてEX、CR、EN、VU、NT、DD、LPのいずれのランクにも該当しないと評価された種。
 *2「未評価」：「レッドリストあいち2015」において評価対象とされなかった種。
 *3「ランク外」：「レッドリストあいち2015」掲載種のうち、今回の見直しにおいてEX、CR、EN、VU、NT、DD、LP、国リストのいずれのランクにも該当しないと評価された種。
 ★1：アシカからニホンアシカに和名変更
 ★2：モモンガからニホンモモンガに和名変更
 ★3：ノウサギからニホンノウサギに和名変更
 ★4：テンからニホンテンに和名変更
 ★5：アナグマからニホンアナグマに和名変更

(3) 鳥 類

① 愛知県における鳥類の概況

前回の「レッドデータブックあいち 2009」が刊行された後、日本鳥学会が 2012 年 9 月に「日本産鳥類目録改訂第 7 版」を刊行したが、分類の方法にこれまでとは全く異なる DNA の塩基配列の比較で種間の類似関係を判定する「分子系統学」を採用したことにより、「日本産鳥類目録改訂第 6 版」までのリストとは、目や科を含め、かなり異なった分類となっている。

愛知県の野鳥についても「日本産鳥類目録改訂第 7 版」に準拠した結果、「レッドデータブックあいち 2009 動物編」に記載された愛知県の鳥類目録（2008 年 8 月 31 日現在）で 18 目 67 科 397 種であったものが、今回の「レッドデータブックあいち 2020 動物編」（2019 年 9 月 30 日現在）の分類では 24 目 74 科 418 種に増加している。この中で目数と科数が増加しているのは、分類方法の変更によるもので、実際にはオウチュウ科が増加しただけである。種数については、「日本産鳥類目録改訂第 7 版」で亜種が別種とされたことにより増加したキアシセグロカモメとオオムシクイの 2 種を除けば、県内で新しく確認された種はカラスバト、クロアシアホウドリ、アカアシカツオドリ、タンチョウ、カンムリカッコウ、オニカッコウ、ヒメクロアジサシ、マミジロアジサシ、カラフトワシ、オウチュウ、ハイイロオウチュウ、タカサゴモズ、キバラガラ、チフチャフ、キマユムシクイ、コノドジロムシクイ、ウチヤマセンニュウ、オジロビタキ、ミヤマビタキの 19 種である。

新しく確認された 19 種の中では、本来の分布域から迷行して飛来したものが 4 種、渡りや移動のコースを僅かに外れて飛来したと思われるものが 6 種、ユーラシア大陸の西から分布を拡大しているものが 2 種、中国南部や東南アジアから分布を拡大しているものが 7 種である。最近の約 10 年で新しく確認された種の約半数が、温暖化など地球規模の気象変動による分布の変化で飛来している可能性がうかがえる。

「日本産鳥類目録改訂第 7 版」では 24 目 81 科 633 種が記載されているが、2019 年 9 月 30 日現在県内の野鳥は全国と比較して、目数で 100%、科数で 91%、種数で 66%が記録されている。

上記以外で、現在県内に生息して繁殖している国外移入種は、コジュケイ、ドバト、ソウシチョウの 3 種のみである。過去の一時期繁殖が確認されていたワカケホンセイインコや、1970 年代から継続して繁殖が確認されていたベニスズメは、現在の県内では全く確認されなくなっている。ガビチョウは現在も県内における繁殖の確認はないが、今後も注意して観察を続ける必要がある。

② 愛知県における絶滅危惧種の概況

愛知県では「第三次レッドリスト・レッドリストあいち 2015」（2015 年 3 月）より、鳥類のみが県内で繁殖する種について、評価の対象を「繁殖」と非繁殖期の「通過」又は「越冬」の個体群として、2 通りの評価を行っており、繁殖していない種についても「通過」又は「越冬」の個体群としての評価を実施している。

県内で繁殖する種の中でも、特に標高の高い山地の環境で、現在繁殖が確認されないマミジロ、ビンズイ、ノジコの 3 種について、「繁殖」個体群が「絶滅」と評価された。同様の環境で繁殖する種にはオオジシギ、アカハラ、ホオアカなど多くの種もあるが、近年の繁殖期における繁殖地周辺での確認記録の有無や、平地や沿岸部で現在繁殖が確認されていないヨシゴイやツバメチドリなどを含め、積極的な環境改善などによる繁殖復活の可能性までを含めて、現時点では「繁殖」個体群の評価を「絶滅危惧 I A 類」に止めている。また、過去の一時期に県内で繁殖していたコヨシキリなどの種については、判断が非常に難しいところであるが、ツバメチドリやセイタカシギほど継続

した繁殖ではなかったものと判断されて、今回はとりあえず「リスト外」と評価された。

上述のように県内では特に標高の高い山地と、沿岸部の干拓地や埋立地、および河川や池沼の裸地や湿地で繁殖する種では、「繁殖」が事実上「絶滅」となっていたり、絶滅危惧のランクが高くなった種が多い。同時にシギ・チドリ類を含む水鳥にとって、水辺や湿地は渡りの中継地や越冬地としても重要な環境であるため、こうした水辺や湿地を「通過」あるいは「越冬」の場所としている渡り鳥の大半でも、絶滅危惧のランクが大きく上昇している。

【参考：除外種リスト】

「レッドリストあいち 2015」掲載種のうち、今回の見直しによってリストから除外された種（地域個体群）とその理由は以下のとおりである。

除外種

No. 目 名	科 名	和 名	見直し前 県ランク	除外理由
1 チドリ	シギ	ハマシギの越冬群(藤前干潟および庄内川河口周辺、境川および矢作川河口周辺、汐川干潟、伊川津干潟および福江湾周辺)	LP	県内の越冬地全域で減少傾向が継続しているため、特定の地域個体群に限らず種全体として評価することとした。

③ 愛知県鳥類レッドリスト

目及び科の配列と名称、種の配列及び和名、学名は、原則として「グリーンデータブックあいち 2018 哺乳類・鳥類・爬虫類編」に従った。評価対象ごとにランクが異なる場合は、最上位の評価区分に記載した。

絶滅(EX)

No. 目 名	科 名	和 名	学 名	評価対象 個体群	県ランク	国ランク
1 スズメ	ヒタキ	マミジロ	<i>Zoothera sibirica</i> (Pallas)	繁殖 通過	EX NT	
2 スズメ	セキレイ	ビンズイ	<i>Anthus hodgsoni</i> Richmond	繁殖 越冬	EX リスト外	
3 スズメ	ホオジロ	ノジコ	<i>Emberiza sulphurata</i> Temminck et Schlegel	繁殖 通過	EX VU	NT

絶滅危惧 I A類(CR)

No. 目 名	科 名	和 名	学 名	評価対象 個体群	愛知県 ランク	国ランク
1 ペリカン	サギ	ヨシゴイ	<i>Ixobrychus sinensis</i> (Gmelin)	繁殖 通過	CR CR	NT
2 チドリ	シギ	オオジシギ	<i>Gallinago hardwickii</i> (Gray)	繁殖 通過	CR VU	NT
3 チドリ	シギ	シベリアオオハシシギ	<i>Limnodromus semipalmatus</i> (Blyth)	通過	CR	DD
4 チドリ	シギ	カラフトアオアシシギ	<i>Tringa guttifer</i> (Nordmann)	通過	CR	CR
5 チドリ	シギ	ヘラシギ	<i>Eurynorhynchus pygmeus</i> (Linnaeus)	通過	CR	CR
6 チドリ	ツバメチドリ	ツバメチドリ	<i>Glareola maldivarum</i> Forster	繁殖 通過	CR EN	VU
7 タカ	タカ	チュウヒ	<i>Circus spilonotus</i> Kaup	繁殖 越冬	CR VU	EN
8 フクロウ	フクロウ	コノハズク	<i>Otus sunia</i> (Hodgson)	繁殖 通過	CR VU	
9 ブッポウソウ	カワセミ	ヤマセミ	<i>Megaceryle lugubris</i> (Temminck)	繁殖 越冬	CR EN	
10 スズメ	ヤイロチョウ	ヤイロチョウ	<i>Pitta nympha</i> Temminck et Schlegel	繁殖 通過	CR VU	EN

11	スズメ	ヒタキ	アカハラ	<i>Turdus chrysolaus</i> Temminck	繁殖 越冬	CR リスト外
12	スズメ	ヒタキ	コマドリ	<i>Luscinia akahige</i> (Temminck)	繁殖 通過	CR NT
13	スズメ	ホオジロ	ホオアカ	<i>Emberiza fucata</i> Pallas	繁殖 越冬	CR リスト外

絶滅危惧ⅠB類(EN)

No.	目名	科名	和名	学名	評価対象 個体群	愛知県 ランク	国ランク
1	キジ	キジ	ウズラ	<i>Coturnix japonica</i> Temminck et Schlegel	越冬	EN	VU
2	カモ	カモ	ビロードキンクロ	<i>Melanitta fusca</i> (Linnaeus)	越冬	EN	
3	カイツブリ	カイツブリ	アカエリカイツブリ	<i>Podiceps grisegena</i> (Boddaert)	越冬	EN	
4	ペリカン	サギ	サンカノゴイ	<i>Botaurus stellaris</i> (Linnaeus)	通過	EN	EN
5	ペリカン	サギ	ミゾゴイ	<i>Gorsachius goesagi</i> (Temminck)	繁殖 通過	EN VU	VU
6	ペリカン	サギ	クロサギ	<i>Egretta sacra</i> (Gmelin)	越冬	EN	
7	ヨタカ	ヨタカ	ヨタカ	<i>Caprimulgus indicus</i> Latham	繁殖 通過	EN VU	NT
8	チドリ	セイタカシギ	セイタカシギ	<i>Himantopus himantopus</i> (Linnaeus)	繁殖 越冬	EN VU	VU
9	チドリ	シギ	オオハシシギ	<i>Limnodromus scolopaceus</i> (Say)	越冬	EN	
10	チドリ	シギ	オグロシギ	<i>Limosa limosa</i> (Linnaeus)	通過	EN	
11	チドリ	シギ	オオソリハシシギ	<i>Limosa lapponica</i> (Linnaeus)	通過	EN	VU
12	チドリ	シギ	ホウロクシギ	<i>Numenius madagascariensis</i> (Linnaeus)	通過	EN	VU
13	チドリ	シギ	ツルシギ	<i>Tringa erythropus</i> (Pallas)	通過	EN	VU
14	チドリ	シギ	タカブシギ	<i>Tringa glareola</i> Linnaeus	通過	EN	VU
15	チドリ	シギ	メリケンキアシシギ	<i>Heteroscelus incanus</i> (Gmelin)	通過	EN	
16	チドリ	シギ	ウズラシギ	<i>Calidris acuminata</i> (Horsfield)	通過	EN	
17	チドリ	シギ	キリアイ	<i>Limicola falcinellus</i> (Pontoppidan)	通過	EN	
18	チドリ	タマシギ	タマシギ	<i>Rostratula benghalensis</i> (Linnaeus)	繁殖 越冬	EN EN	VU
19	チドリ	カモメ	コアシサシ	<i>Sterna albifrons</i> Pallas	繁殖 通過	EN VU	VU
20	タカ	タカ	ハイイロチュウヒ	<i>Circus cyaneus</i> (Linnaeus)	越冬	EN	
21	タカ	タカ	サシバ	<i>Butastur indicus</i> (Gmelin)	繁殖 通過	EN NT	VU
22	タカ	タカ	クマタカ	<i>Nisaetus nipalensis</i> Hodgson	繁殖 越冬	EN EN	EN
23	フクロウ	フクロウ	アオバズク	<i>Ninox scutulata</i> (Raffles)	繁殖 通過	EN VU	
24	ブッポウソウ	ブッポウソウ	ブッポウソウ	<i>Eurystomus orientalis</i> (Linnaeus)	繁殖 通過	EN VU	EN
25	スズメ	センニュウ	オオセッカ	<i>Locustella pryeri</i> (Seebohm)	越冬	EN	EN

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

No.	目名	科名	和名	学名	評価対象 個体群	愛知県 ランク	国ランク
1	カモ	カモ	トモエガモ	<i>Anas formosa</i> Georgi	越冬	VU	VU
2	カモ	カモ	シノリガモ	<i>Histrionicus histrionicus</i> (Linnaeus)	越冬	VU	
3	ペリカン	トキ	クロツラヘラサギ	<i>Platalea minor</i> Temminck et Schlegel	越冬	VU	EN
4	ツル	クイナ	バン	<i>Gallinula chloropus</i> (Linnaeus)	繁殖 越冬	VU NT	
5	カッコウ	カッコウ	ジュウイチ	<i>Hierococcyx hyperythrus</i> (Gould)	繁殖 通過	VU NT	
6	カッコウ	カッコウ	ツツドリ	<i>Cuculus optatus</i> Gould	繁殖 通過	VU NT	
7	カッコウ	カッコウ	カッコウ	<i>Cuculus canorus</i> Linnaeus	繁殖 通過	VU NT	
8	チドリ	チドリ	イカルチドリ	<i>Charadrius placidus</i> Gray et Gray	繁殖 越冬	VU NT	
9	チドリ	チドリ	シロチドリ	<i>Charadrius alexandrinus</i> Linnaeus	繁殖 越冬	VU VU	VU
10	チドリ	シギ	アオシギ	<i>Gallinago solitaria</i> Hodgson	越冬	VU	
11	チドリ	シギ	コシヤクシギ	<i>Numenius minutus</i> Gould	通過	VU	EN
12	チドリ	シギ	ダイシャクシギ	<i>Numenius arquata</i> (Linnaeus)	越冬	VU	
13	チドリ	シギ	アカアシシギ	<i>Tringa totanus</i> (Linnaeus)	通過	VU	VU
14	チドリ	シギ	オバシギ	<i>Calidris tenuirostris</i> (Horsfield)	通過	VU	
15	チドリ	シギ	コオバシギ	<i>Calidris canutus</i> (Linnaeus)	通過	VU	
16	チドリ	シギ	オジロトウネン	<i>Calidris temminckii</i> (Leisler)	通過	VU	
17	チドリ	シギ	ハマシギ	<i>Calidris alpina</i> (Linnaeus)	越冬	VU	NT

18	チドリ	シギ	エリマキシギ	<i>Philomachus pugnax</i> (Linnaeus)	通過	VU	
19	チドリ	カモメ	ズグロカモメ	<i>Larus saundersi</i> (Swinhoe)	越冬	VU	VU
20	チドリ	カモメ	オオアジサシ	<i>Sterna bergii</i> Lichtenstein	通過	VU	VU
21	タカ	タカ	ハチクマ	<i>Pernis ptilorhynchus</i> (Temminck)	繁殖	VU	NT
					通過	NT	
22	フクロウ	フクロウ	オオコノハズク	<i>Otus lempiji</i> (Horsfield)	繁殖	VU	
					越冬	NT	
23	フクロウ	フクロウ	コミズク	<i>Asio flammeus</i> (Pontoppidan)	越冬	VU	
24	ブッポウソウ	カワセミ	アカショウビン	<i>Halcyon coromanda</i> (Latham)	繁殖	VU	
					通過	NT	
25	キツツキ	キツツキ	オオアカゲラ	<i>Dendrocopos leucotos</i> (Bechstein)	繁殖	VU	
					越冬	NT	
26	ハヤブサ	ハヤブサ	ハヤブサ	<i>Falco peregrinus</i> Tunstall	繁殖	VU	VU
					越冬	NT	
27	スズメ	キバシリ	キバシリ	<i>Certhia familiaris</i> Linnaeus	繁殖	VU	
					越冬	NT	
28	スズメ	カワガラス	カワガラス	<i>Cinclus pallasii</i> Temminck	繁殖	VU	
					越冬	VU	
29	スズメ	ホオジロ	コジュリン	<i>Emberiza yessoensis</i> (Swinhoe)	越冬	VU	VU

準絶滅危惧(NT)

No.	目名	科名	和名	学名	評価対象 個体群	愛知県 ランク	国ランク
1	カモ	カモ	オシドリ	<i>Aix galericulata</i> (Linnaeus)	繁殖	NT	DD
					越冬	リスト外	
2	カモ	カモ	クロガモ	<i>Melanitta americana</i> (Swainson)	越冬	NT	
3	カモ	カモ	カワアイサ	<i>Mergus merganser</i> Linnaeus	越冬	NT	
4	カイツブリ	カイツブリ	ミミカイツブリ	<i>Podiceps auritus</i> (Linnaeus)	越冬	NT	
5	カツオドリ	ウ	ヒメウ	<i>Phalacrocorax pelagicus</i> Pallas	越冬	NT	EN
6	ペリカン	サギ	カラシラサギ	<i>Egretta eulophotes</i> (Swinhoe)	通過	NT	NT
7	ツル	クイナ	クイナ	<i>Rallus aquaticus</i> Linnaeus	越冬	NT	
8	ツル	クイナ	ヒクイナ	<i>Porzana fusca</i> (Linnaeus)	繁殖	NT	NT
					通過	NT	
9	チドリ	シギ	ヤマシギ	<i>Scolopax rusticola</i> Linnaeus	越冬	NT	
10	チドリ	シギ	ミユビシギ	<i>Calidris alba</i> (Pallas)	越冬	NT	
11	タカ	ミサゴ	ミサゴ	<i>Pandion haliaetus</i> (Linnaeus)	繁殖	NT	NT
					越冬	リスト外	
12	タカ	タカ	ツミ	<i>Accipiter gularis</i> (Temminck et Schlegel)	繁殖	NT	
					通過	リスト外	
13	タカ	タカ	オオタカ	<i>Accipiter gentilis</i> (Linnaeus)	繁殖	NT	NT
					越冬	NT	
14	フクロウ	フクロウ	フクロウ	<i>Strix uralensis</i> Pallas	繁殖	NT	
					越冬	NT	
15	スズメ	ミソサザイ	ミソサザイ	<i>Troglodytes troglodytes</i> (Linnaeus)	繁殖	NT	
					越冬	リスト外	
16	スズメ	ヒタキ	コルリ	<i>Luscinia cyane</i> (Pallas)	繁殖	NT	
					通過	リスト外	
17	スズメ	ヒタキ	コサメビタキ	<i>Muscicapa dauurica</i> Pallas	繁殖	NT	
					通過	リスト外	

地域個体群(LP)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	チドリ	チドリ	ダイゼンの越冬群(藤前干潟および庄内川河口周辺、汐川干潟、伊川津干潟および福江湾周辺、一色干潟、佐久島周辺)	<i>Pluvialis squatarola</i> (Linnaeus)	越冬
2	タカ	タカ	サシバの渡り群(伊良湖岬および渥美半島の山塊群、西三河南東部の山塊群および知多半島の中南部)	<i>Butastur indicus</i> (Gmelin)	通過

国リスト

No.	目名	科名	和名	学名	評価対象 個体群	愛知県 ランク	国ランク
1	カモ	カモ	ツクシガモ	<i>Tadorna tadorna</i> (Linnaeus)	越冬	国リスト	VU
2	ペリカン	サギ	チュウサギ	<i>Egretta intermedia</i> (Wagler)	繁殖	国リスト	NT
					通過	国リスト	
3	チドリ	チドリ	ケリ	<i>Vanellus cinereus</i> (Blyth)	繁殖	国リスト	DD
					越冬	国リスト	
4	タカ	タカ	ハイタカ	<i>Accipiter nisus</i> (Linnaeus)	越冬	国リスト	NT
5	スズメ	サンショウクイ	サンショウクイ	<i>Pericrocotus divaricatus</i> (Raffles)	繁殖	国リスト	VU
					通過	国リスト	

④ 愛知県鳥類レッドリストの変更点

本書に掲載した鳥類レッドリスト（見直し後）と「レッドリストあいち 2015」に掲載した鳥類レッドリスト（見直し前）の新旧対照表を以下に示した。

見直し前のランク											種数
見直し後の ランク	EX	CR	EN	VU	NT	DD	LP	国リスト*1	リスト外・未評価*2		
	EX	ビンスイ	マミシロ ノジコ							3	
	CR		ヨシゴイ オオジシギ シベリアオオハシシギ カラフトアオアシシギ ヘラシギ ツバメチドリ チュウヒ コノハズク ヤマセミ ヤイロチョウ アカハラ コマドリ ホオアカ							13	
	EN			ウスラ ビロードキンクロ アカエリカイツブリ サンカノゴイ ミソゴイ ヨタカ ツルシギ タカブシギ ウスラシギ タマシギ コアジサシ クマダカ アオハズク ブッポウソウ オオセウカ	クロサギ セイタカシギ オオハシシギ オグロシギ オオソリハシシギ ホウロクシギ メリケンキアシシギ キリアイ ハイイロチュウヒ サシバ					25	
	VU			シリガモ コンヤクシギ ズグロカモメ キバシリ	トモエガモ バン ジュウイチ カウゴウ イカルチドリ シロチドリ アオシギ ダイシャクシギ アカアシシギ コオハシギ オシロトウネン エリマキシギ ハチクマ コムシズク アカショウビン オオアカガラ ハヤブサ カワガラス コジュリン	ツツドリ オハシギ ハマシギ オオコノハズク			クロツラヘラサギ オオアジサシ	29	
	NT				カワアイサ ヒクイナ ミサゴ	オシドリ クロガモ ヒメウ クイナ ヤマシギ ミユビシギ ツミ オオタカ ブクロウ ミンサザイ コルリ ヨサメビタキ			ミミカイツブリ カラシラサギ	17	
	DD										0
LP							ダイゼンの越冬群(藤前干潟および庄内川河口周辺、汐川干潟、伊川津干潟および福江湾周辺、一色干潟、佐久島周辺) ★1 サシバの渡り群(伊良湖岬および渥美半島の山塊群、西三河南東部の山塊群および知多半島の山塊群) ★2			2	
国リスト*1								チュウサギ ケリ ハイタカ サンショウクイ	ツクシガモ	5	
ランク外*3							ハマシギの越冬群(藤前干潟および庄内川河口周辺、境川および矢作川河口周辺、汐川干潟、伊川津干潟および福江湾周辺) ★2			1	
種数	1	15	19	32	16	0	3	4	5	95	

注: 評価対象個体群が複数存在する種については、それぞれの種の最も高いランクを用いて比較した。
 *1 「国リスト」: 環境省レッドリストに記載されているが、愛知県においてEX、CR、EN、VU、NT、DD、LPのいずれのランクにも該当しないと評価された種。
 *2 「未評価」: 「レッドリストあいち2015」において評価対象とされなかった種。
 *3 「ランク外」: 「レッドリストあいち2015」掲載種のうち、今回の見直しにおいてEX、CR、EN、VU、NT、DD、LP、国リストのいずれのランクにも該当しないと評価された種。
 ★1: 一色干潟、佐久島周辺を追加
 ★2: 県内の越冬地全域で減少傾向が継続しているため、特定の地域個体群に限らず種全体として評価することとした。

(4) 爬虫類

① 愛知県における爬虫類の概況

本県に記録のある爬虫類のうち、確実に繁殖、定着しているのは2目9科16種類（確実な外来種1種と史前帰化が疑われる3種を含む）である。カメ目のうち、ウミガメ類では産卵から孵化までが確認されているのはアカウミガメのみであり、それ以外のウミガメ類の記録（アオウミガメ、オサガメ等）は、漂着または偶発的な産卵とみられるため、今回の調査対象としていない。陸棲のカメ類のうち、確実に在来種と言えるのはニホンイシガメのみであり、このほか、確実な外来種であるミシシippアカミミガメ、外来種である可能性が高いクサガメ、在来種ではあるが、国外からの移入集団の侵入が懸念されるニホンスッポンがいる。また、今回の調査では対象としなかったが、外来種のカメ類の記録は他にも知られており、特にカミツキガメ及びワニガメの2種は県内での繁殖、定着が懸念される。

有鱗目のうちヘビ類では、4種のウミヘビ類に関する古い記録（新美, 1974）があるが、その後の記録がなく、過去にも現在にも繁殖、定着している状況が確認できなかったことから、今回の調査から除外した。一方、陸棲のヘビ類としては8種が知られており、いずれも本州全域の共通種で、本来は平野域から山地域までに広く見られる種であったと考えられるが、次項で示すように平野部での著しい減少のため、現在では丘陵地、山地域に偏った分布を示す種も少なくない。

トカゲ類では、本州全域に見られるニホンカナヘビと、東日本（伊豆半島を除く）に生息するヒガシニホントカゲの2種が生息する。いずれも本県下では平野部から山地域まで広く生息する普通種である。ヤモリ類では、西日本を中心に分布するニホンヤモリが生息する。この種は人家性に市街部に偏った分布を示す典型的なシナントロープで、外来種であるという説もある。県下での記録もすべて人家周辺から得られており、山間部では記録が少ない。

② 愛知県における絶滅危惧種の概況

アカウミガメは、遠州灘に面した渥美半島表浜が本県の最大の産卵地である。上陸産卵数は近年あまり顕著な変化をしておらず、地元自治体やボランティア等多くの人々の砂浜環境整備により維持されているのが現状である。最大の問題はダムの造成により河川からの砂の供給が乏しくなったことであるが、港湾建設、海岸護岸等も海流の変化をもたらし砂の供給を阻害している。加えて海浜利用の多様化による人為的な砂浜環境の悪化がある。

ニホンイシガメは、本県下の記録自体は少なくないが、近年の生息環境の悪化、及びアライグマを始めとする外来性の捕食者の増加に加え、クサガメとの交雑の問題や、温度性決定に起因する性の偏り等、目に見えない問題が進行している可能性があり、近い将来絶滅危惧種に転じる可能性があることから、準絶滅危惧種とされた。ニホンスッポンについては、本県下の平野部、丘陵部の河川に普通に見られるが、本県でも移入された養殖個体が流出し、在来個体との交雑が進んでいる可能性が高く、明確な検証が行われていない。このため在来集団の減少が目に見えない形で進行している可能性が考えられることから情報不足とされた。

ヘビ類については、偶発的な遭遇に基づく記録方法によってしか情報が得られない特性があり、このことが生息状況の正確な把握を難しくしている。少なくとも平野部においてヘビ類全体の減少が著しいことは明らかであるが、丘陵地、山地域の情報は限られており、全県的な減少の様子を把握することは容易でない。本県では、そうしたヘビ類のうち3種が情報不足種とされた。このうち、タカチホヘビ、シロマダラについては、夜行性や地中性の生活史特性のためもともと調査が困難な

種であり、正確な分布域や個体数密度等不明な点が多いために情報不足とされたものである。一方、ヤマカガシに関しては、かつて平野部の最普通種であったにも関わらず、現在では平野部ではほとんど見られなくなった点や、丘陵地、山地域においても遭遇の機会が減ってきたことを踏まえ、情報不足種とされた。同様にかつて最普通種だったにも関わらず現在平野部で激減した種にシマヘビがあり、こちらは現時点ではランク外とされたが、今後の動向によく注意する必要がある。

③ 愛知県爬虫類レッドリスト

目及び科の配列と名称、種の配列及び和名、学名は、原則として「グリーンデータブックあいち 2018 哺乳類・鳥類・爬虫類編」を基に、新しい知見を加え整理した。

絶滅 (EX)					
(該当種なし)					
絶滅危惧 I A類 (CR)					
(該当種なし)					
絶滅危惧 I B類 (EN)					
No.	目 名	科 名	和 名	学 名	国ランク
1	カメ	ウミガメ	アカウミガメ	<i>Caretta caretta</i> (Linnaeus)	EN
絶滅危惧 II 類 (VU)					
(該当種なし)					
準絶滅危惧 (NT)					
No.	目 名	科 名	和 名	学 名	国ランク
1	カメ	イシガメ	ニホンイシガメ	<i>Mauremys japonica</i> (Temminck et Schlegel)	NT
情報不足 (DD)					
No.	目 名	科 名	和 名	学 名	国ランク
1	カメ	スッポン	ニホンスッポン	<i>Pelodiscus sinensis</i> (Wiegmann)	DD
2	有鱗	タカチホヘビ	タカチホヘビ	<i>Achalinus spinalis</i> Peters	
3	有鱗	ナミヘビ	シロマダラ	<i>Dinodon orientale</i> (Hilgendorf)	
4	有鱗	ナミヘビ	ヤマカガシ	<i>Rhabdophis tigrinus</i> (Boie)	

④ 愛知県爬虫類レッドリストの変更点

本書に掲載した爬虫類レッドリスト（見直し後）と「レッドリストあいち 2015」に掲載した爬虫類レッドリスト（見直し前）の新旧対照表を以下に示した。

見直し前のランク									
	EX	CR	EN	VU	NT	DD	LP	国リスト*1	リスト外・未評価*2
見直し後のランク	EX								
	CR								
	EN		アカウミガメ						
	VU								
	NT				ニホンイシガメ				
	DD					ニホンスッポン タカチホヘビ シロマダラ ヤマカガシ			
	LP								
国リスト*1									
ランク外*3									
種数	0	0	1	0	1	4	0	0	0

*1「国リスト」：環境省レッドリストに記載されているが、愛知県においてEX、CR、EN、VU、NT、DD、LPのいずれのランクにも該当しないと評価された種。
 *2「未評価」：「レッドリストあいち2015」において評価対象とされなかった種。
 *3「ランク外」：「レッドリストあいち2015」掲載種のうち、今回の見直しにおいてEX、CR、EN、VU、NT、DD、LP、国リストのいずれのランクにも該当しないと評価された種。

(5) 両生類

① 愛知県における両生類の概況

本県には両生類 2 目 8 科 23 種類（外来種 1 種を含む）が生息し、その分布域は繁殖場所となる水域環境の有無に強く依存している。まず山地溪流の流水中やその周辺の伏流水中で産卵する種にはタゴガエル（ネバタゴガエル）、ナガラタゴガエル、アカイシサンショウウオ、ハコネサンショウウオ、ヒダサンショウウオ、ヒガシヒダサンショウウオ、マホロバサンショウウオ（旧コガタブチサンショウウオ）がある。また、同じく河川上流部でも、ある程度開けた河川に住む種にはオオサンショウウオとカジカガエルが挙げられる。河川源流部の湿地の一部にはミカワサンショウウオが生息している。山地の止水域にはモリアオガエルやヤマアカガエルが生息する。以上の各種の本県下における生息パターンは様々であるが、生息が丘陵地、山地に限られる点では共通しており、尾張、三河の平野部や知多、渥美半島にはもともと生息していないと考えられる。

一方、平野部側に偏った分布を示す種にはナゴヤダルマガエルとヌマガエルがある。この 2 種の生息地は丘陵地域にも点在してはいるものの、分布の中心は明らかに平野部にある。ニホンアカガエルもかつては平野部を中心とする分布傾向を示していたものと思われるが、現在では平野部の個体群が壊滅的な状態にあり、分布の中心が丘陵地にあるように見える。平野部や丘陵地の湧水湿地にはヤマトサンショウウオ（旧カスミサンショウウオ）が生息していたが、既に消失した産地が多く、現在残っている産地から過去の分布のありようを推測することは難しい。

本県下で、平野部から山地域まで広く分布している（いた）種にはアカハライモリ、アズマヒキガエル、ニホンアマガエル、トノサマガエル、シュレーゲルアオガエルが挙げられる。ただし、このうち現在でも全県的に普通種と言える種はニホンアマガエルとトノサマガエルのみであり、アカハライモリ、アズマヒキガエル、シュレーゲルアオガエルは平野部の集団の消失により、現在の分布は丘陵地、山地域に偏っている。北米産の外来生物であるウシガエルは、平野部から丘陵地までの止水域に広く生息し、生息地の小動物を貪欲に捕食するため、在来の生態系に甚大な影響を与えている。

本県は本州の中央部に位置するため、両生類相には東日本的な要素と西日本的な要素が入り混じっている点が興味深い。アカイシサンショウウオ、ヒガシヒダサンショウウオ、アズマヒキガエルは東日本の両生類相に含まれる要素と言え、本県の集団は西限またはそれに近い個体群である。一方、ナゴヤダルマガエル、ヌマガエル、ヒダサンショウウオ、マホロバサンショウウオ、オオサンショウウオ、ヤマトサンショウウオは西日本の両生類相に含まれる要素であり、本県の集団は東限またはそれに近い個体群である。

② 愛知県における絶滅危惧種の概況

本県に生息する両生類の中の絶滅危惧種を大別すると、以下のパターンに分けることができる。

- (i) 県内の著しく狭い地域（二次メッシュで 1～数メッシュ程度）にしか生息していない種
 - (i') 本県固有の種及び形態型で、県外に同質の集団が見られない
 - (i'') 県外には同種が広く生息しているが、県内ではごく一部に局在する
- (ii) 県内の比較的広い範囲に生息するが、その全域で絶滅が懸念される種

このうち、(i') は県内小集団の消滅がその種及び形態型の絶滅を意味し、他地域からの個体の流入も見込めないため、きわめて短期間に絶滅する恐れがある。この区分にはアカハライモリ渥美種族とミカワサンショウウオが該当し、いずれも絶滅危惧 I A 類とされている。このうちアカハライ

モリ渥美種族は、かつては渥美、知多両半島に知られていたが、現在では知多半島の 1 地点に小規模な集団が残るのみであり、この地点も周辺の開発や耕作放棄により環境が悪化しているため、絶滅が強く懸念される。ミカワサンショウウオはこれに比べると生息地点も多く、生息環境も安定しているが、いずれの産地も小規模で、人工林に位置することから、環境変化の影響で容易に絶滅し得る種である。

一方、(i”) は、その種本来の生息範囲が本県域の辺縁部に若干かかっているために、県境付近の狭い範囲に局在して見られるというケースである。この場合、県境をまたいだ隣県域には多くの産地が見られることになる。具体的には、豊根村に見られるアカイシサンショウウオとナガレタゴガエル、豊田市旧小原村に見られるヒダサンショウウオ、尾張北部に見られるマホロバサンショウウオがこれに相当する。いずれも人工林の溪流源流部に生息し、生息地には大小の砂防施設が設置されているため、現在は比較的安定した環境に見えても、小規模な開発や改修で容易に個体群が消滅する可能性が考えられる。この中で、アカイシサンショウウオとナガレタゴガエルに関しては、隣接する静岡県域に多くの産地が知られているものの、それらとの間には天竜峡（佐久間ダム）が存在し、事実上県境を越えた個体の往来はほぼ不可能な状況となっていることが考慮され、絶滅危惧ⅠA類とされた。一方、ヒダサンショウウオとマホロバサンショウウオは、県境をまたいだ岐阜県側の集団とは山続きになっており、広い意味では単一の集団とみなし得る。このことを考慮し、この 2 種は絶滅危惧ⅠB類とされた。また上記以外に、オオサンショウウオも岐阜県境の木曽川頭首工の集団と瀬戸市蛇ヶ洞川の 2 集団しか見られず、このケースに近い。この種の場合も現状の確認地点数を考えると絶滅が危惧されるが、木曽川頭首工の個体が岐阜県内からの流下個体と考えられることや、瀬戸市の集団が保全活動により安定した状態にあると見られること等が勘案され、絶滅危惧ⅠB類とされた。

また (ii) に区分したように、生息域はある程度広域にわたっていても、その多くの地点で絶滅が懸念される種もある。中でも最も絶滅が懸念されるのがヤマトサンショウウオである。本種の生息範囲そのものは名古屋周辺から知多半島にかけてと、渥美半島にまたがっているが、湿地環境の悪化により各地域で激減しており、絶滅危惧ⅠB類とされた。特に知多、渥美半島の集団は危機的な状況にあり、このまま減少が続けば近い将来ⅠA類と評価せざるを得なくなるであろう。ナゴヤダルマガエルは、本県下では比較的安定した個体群が見られるが、過去と比較すると減少していると考えられ、生息地のほとんどが人為的な水田環境にあること、西日本で壊滅的に減少していること等を勘案し、絶滅危惧Ⅱ類とされた。モリアオガエル、ヒガシヒダサンショウウオ、ハコネサンショウウオは、奥三河地域には安定した集団があり、ただちに絶滅が危惧される状況にはないが、生息域の面積と生息環境を考えると、今後絶滅危惧に陥る可能性もあり、準絶滅危惧種とされた。カジカガエルやアカハライモリ（渥美種族を除く）はこれらよりは広い分布域を持つが、近年の減少傾向が著しく、やはり準絶滅危惧種とされた。2015 年版（レッドリストあいち 2015）で情報不足とされていたヤマアカガエルとツチガエルに関しては、近年新たに情報が蓄積されつつあり（島田・坂部, 2014; 島田他, 2015; 島田, 2018）、両種とも丘陵地、山地域には安定した個体群があることや、ツチガエルに関しては西三河、東三河の平野部にも比較的広範囲に生息していることが明らかになったことを受け、今回のレッドデータブックの掲載種からは除外された。

【 参考：除外種リスト 】

「レッドリストあいち 2015」掲載種のうち、今回の見直しによってリストから除外された種とそ

の理由は以下のとおりである。

除外種

No.	目 名	科 名	和 名	見直し前 県ランク	除外理由
1	無尾	アカガエル	ヤマアカガエル	DD	近年新たに情報が蓄積されつつあり、丘陵地、山地域には安定した個体群があることが明らかになった。
2	無尾	アカガエル	ツチガエル	DD	近年新たに情報が蓄積されつつあり、丘陵地、山地域には安定した個体群があることが明らかになった。また、西三河、東三河の平野部にも比較的広範囲に生息していることが明らかになった。

③ 愛知県両生類レッドリスト

目及び科の配列と名称、種の配列及び和名、学名は、原則として「グリーンデータブックあいち 2018 両生類編」を基に、新しい知見を加え整理した。

絶滅(EX)

(該当種なし)

絶滅危惧 I A類(CR)

No.	目 名	科 名	和 名	学 名	国ランク
1	有尾	サンショウウオ	アカイサンショウウオ	<i>Hynobius katoi</i> Matsui, Kokuryo, Misawa et Nishikawa	EN
2	有尾	サンショウウオ	ミカワサンショウウオ	<i>Hynobius mikawaensis</i> Matsui, Misawa, Nishikawa et Shimada	CR
3	有尾	イモリ	アカハライモリ渥美種族	<i>Cynops pyrrhogaster</i> (Boie) (Atsumi race)	
4	無尾	アカガエル	ナガレタゴガエル	<i>Rana sakuraii</i> Matsui et Matsui	

絶滅危惧 I B類(EN)

No.	目 名	科 名	和 名	学 名	国ランク
1	有尾	サンショウウオ	ヒダサンショウウオ	<i>Hynobius kimurae</i> Dunn	NT
2	有尾	サンショウウオ	マホロバサンショウウオ	<i>Hynobius guttatus</i> Tominaga, Matsui, Tanabe et Nishikawa	NT
3	有尾	サンショウウオ	ヤマトサンショウウオ	<i>Hynobius vandenburghi</i> Dunn	VU
4	有尾	オオサンショウウオ	オオサンショウウオ	<i>Andrias japonicus</i> (Temminck)	VU

絶滅危惧 II 類(VU)

No.	目 名	科 名	和 名	学 名	国ランク
1	無尾	アカガエル	ナゴヤダルマガエル	<i>Pelophylax porosus brevipodus</i> (Ito)	EN

準絶滅危惧(NT)

No.	目 名	科 名	和 名	学 名	国ランク
1	有尾	サンショウウオ	ヒガシヒダサンショウウオ	<i>Hynobius fossigenus</i> Okamiya, Sugawara, Nagano et Poyarkov	NT
2	有尾	サンショウウオ	ハコネサンショウウオ	<i>Onychodactylus japonicus</i> (Houttuyn)	
3	有尾	イモリ	アカハライモリ (中間種族)	<i>Cynops pyrrhogaster</i> (Boie) (Intermediate race)	NT
4	無尾	アオガエル	モリアオガエル	<i>Rhacophorus arboreus</i> (Okada et Kawano)	
5	無尾	アオガエル	カジカガエル	<i>Buergeria buergeri</i> (Temminck et Schlegel)	

国リスト

No.	目 名	科 名	和 名	学 名	国ランク
1	無尾	アカガエル	トノサマガエル	<i>Pelophylax nigromaculatus</i> (Hallowell)	NT

④ 愛知県両生類レッドリストの変更点

本書に掲載した両生類レッドリスト（見直し後）と「レッドリストあいち 2015」に掲載した両生類レッドリスト（見直し前）の新旧対照表を以下に示した。

	見直し前のランク									種数
	EX	CR	EN	VU	NT	DD	LP	国リスト*1	リスト外・未評価*2	
見直し後の ランク	EX									0
	CR	ミカワサンショウウオ アカハライモリ 渥美種族 ナガレゴガエル							アカシサンショウウオ	4
	EN		マホロバサンショウウオ★1 ヤマトサンショウウオ★2 オオサンショウウオ						ヒダサンショウウオ★4	4
	VU			オコヤダルマガエル						1
	NT				ヒガシヒダサンショウウオ★3 ハコネサンショウウオ モリアオガエル カジカガエル	アカハライモリ(中間種族)				5
	DD									0
	LP									0
	国リスト *1							トノサマガエル		1
	ランク外 *3					ヤマアカガエル ツチガエル				2
	種数	0	3	3	1	4	2	0	1	17

*1「国リスト」：環境省レッドリストに記載されているが、愛知県においてEX、CR、EN、VU、NT、DD、LPのいずれのランクにも該当しないと評価された種。

*2「未評価」：「レッドリストあいち2015」において評価対象とされなかった種。

*3「ランク外」：「レッドリストあいち2015」掲載種のうち、今回の見直しにおいてEX、CR、EN、VU、NT、DD、LP、国リストのいずれのランクにも該当しないと評価された種。

★1：コガタブチサンショウウオとされていたが、愛知県を含む中部・近畿の集団がマホロバサンショウウオとして新種記載された。

★2：カスミサンショウウオとされていたが、愛知県を含む中部・近畿の集団がヤマトサンショウウオとして種分化された。

★3：2018年に新種記載された。県内の旧ヒダサンショウウオのほとんどの個体群を含むため、本表では見直し前のランクは旧ヒダサンショウウオのNTとした。

★4：ヒガシヒダサンショウウオの記載に伴い、県内では豊田市大ヶ蔵連町の個体群のみが本種とされた。今回の見直しでは新たな個体群として扱い、ENに該当すると評価された。

(6) 汽水・淡水魚類

① 愛知県における汽水・淡水魚類の概況

本県の平野部は大きく 3 つに分けられ、尾張平野部に木曽川水系および庄内川水系、西三河平野部に境川水系および矢作川水系、さらに東三河平野部に豊川水系の河川が流れる。特に、木曽川、矢作川および豊川の 3 水系には多様な淡水魚類が生息している。

木曽川は、長野県および岐阜県に源を有し、伊勢湾に注ぐ全長 229km の日本有数の大河川である。県内では、その下流域が犬山市から河口までを流れる。水量は多く、流れも緩やかで河畔にヤナギ等の木々が多く茂り、その環境は多様性に富んでいる。主に平野部を貫流すること、河川規模が大ききことから、多くの魚類が生息し、その主たるものはコイ科魚類であり、河口域ではハゼ科を中心とする汽水魚類が見られる。なお、本水系から農業灌漑用水路が濃尾平野地区に網目状に開削され、知多半島にも末端が到達しているため、共通の魚類相が認められる一要因となっている。

矢作川は、長野県を主な源流とし、三河湾に注ぐ流路 118km の中規模河川である。主な支流として名倉川、巴川、乙川等があり、魚類相は、これらの環境を反映して上流のサケ科魚類（イワナ、アマゴ）から中・下流域のアユ、コイ科魚類、さらには河口域のハゼ科魚類まで大きく変化し、多様性に富んでいる。なお、本水系の水生動物を広範に調査・研究する矢作川研究所は、多くの刊行物を出しており、矢作川の自然を知る情報源として活用されている。

豊川は、北設山地を源とする流路 77km の中規模河川であり、水質が良いことでも知られる。上流域は河床が岩石で構成され、急流や淵が多く形成され、ネコギギ、イワナも生息するほか、支流にはトウカイナガレホトケドジョウも生息する。中流、下流域は水量が多くゆったりと流れ、アユ、ボウズハゼ、コイ科魚類などが見られる。

知多半島や渥美半島および三河湾岸には短い河川が多く、海との関わりの深いハゼ科魚類を中心に汽水域や干潟に生息する魚類が多く見られる。季節によってはアユ、ボラ、スズキ、ニホンウナギ等の遡上が見られる。

グリーンデータブックあいち 2018 汽水・淡水魚類編では、計 64 科 198 種を愛知県産全汽水・淡水魚類として掲載した。ただし、文献中に使用されていた和名から種を特定することが困難な複数種を含む混称などは除外したほか、リストに掲載した種の中で標本もしくは写真が無い 30 種については誤同定の可能性もある。本書に掲載したレッドリストは、これら 198 種のうち在来魚類を対象として評価されたものである。

② 愛知県における絶滅危惧種の概況

調査の結果、絶滅危惧ⅠA類（CR）8種、ⅠB類（EN）9種、絶滅危惧Ⅱ類（VU）9種、準絶滅危惧（NT）6種、情報不足（DD）7種の計 39 種が記載された。これらの多くは、里山周辺の池沼や細流、農業用水路のほかに、汽水域および河口干潟を生息環境とする魚類である。

本県では、製造業を主とする産業および農業の発展に伴う土地改変が著しく進行し、淡水魚類全般の生息場所が激減してきた。一方、平野部の水域ではオオクチバスやブルーギル等の外来魚が増加し、生態系は著しい負の影響を受けてきた。絶滅危惧Ⅰ類として評価された魚類のうち、イタセンパラやウシモツゴはこれらの影響を受けて絶滅状態に近い。ネコギギ、カワヒガイ、ヤリタナゴ、デメモロコ、キセルハゼ、トウカイヨシノボリについても、生息地の著しい減少、または個々の生息地の分断化等により局所化しており、開発と外来魚のほかに、トウカイヨシノボリのように近縁種の侵入による交雑というリスクにもさらされており、絶滅の危険性が極めて高い。

スナヤツメ類、カジカ、ウツセミカジカ、カマキリ（アユカケ）、ドンコ、アカザは、主として中流域に生息し、河畔林の減少や河川改修等による生息環境の急激な変化の影響を直接受けている。カジカ類は上流域に生息し、そこで一生を終える大卵型（カジカ）と、中流域に生息し、孵化後海へ降下し再び遡上する小卵型（ウツセミカジカ）があり、両者ともに生息環境の変化が著しい。カマキリ（アユカケ）も回遊魚であり、カジカ類と同様に評価された。アカザは、県内各地に生息するが、個体数は多くなく、土砂流入等に伴う浮き石の減少等により生息場所の著しい減少傾向が見られる。

里山を中心とする支流・細流および池沼に生息するカワバタモロコ、カワヒガイ、ヤリタナゴ、トウカイコガタスジシマドジョウ、ホトケドジョウ、トウカイナガレホトケドジョウ、ミナミメダカは、圃場整備や宅地開発による生息場所の消失の影響を最も強く受けている。なかでも、ミナミメダカやホトケドジョウ類は水域の連続性が失われ個体数が減少している。

河口干潟を含む汽水域に生息するシラウオ、トビハゼ、ヒモハゼ、マサゴハゼ、オオヨシノボリなどは、県内の生息地が極めて局所的である場合が多い。なかには生物地理学的に貴重な個体群を有するものもいる。これら汽水性魚類においては、生息場所の埋め立てや浚渫、護岸工事が直接的に生息環境を消滅させる原因となってきた。また、水質汚濁、底質の有機汚染、土砂の流入による底質の変化なども指摘されている。砂泥底はシルト、細砂、中砂、粗砂、細礫など多様な底質材料で構成されており、微妙なバランスが重要であるとされる。これに加えて、軟泥底に掘られたアナジャコの生息孔内に生息する種もいることから、物理環境の劣化のみならず、これに起因する他の生物の減少により生息環境が悪化し得るものもある。

③ 愛知県汽水・淡水魚類レッドリスト

目及び科の配列と名称、種の配列及び和名、学名は、原則として「グリーンデータブックあいち 2018 汽水・淡水魚類編」を基に、新しい知見を加え整理した。

絶滅(EX)

(該当種なし)

絶滅危惧 I A類(CR)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	コイ	コイ	ヤリタナゴ	<i>Tanakia lanceolata</i> (Temminck et Schlegel)	NT
2	コイ	コイ	イタセンバラ	<i>Acheilognathus longipinnis</i> Regan	CR
3	コイ	コイ	ウシモツゴ	<i>Pseudorasbora pugnax</i> Kawase et Hosoya	CR
4	コイ	コイ	カワヒガイ	<i>Sarcocheilichthys variegatus variegatus</i> (Temminck et Schlegel)	NT
5	コイ	コイ	デメモロコ	<i>Squalidus japonicus japonicus</i> (Sauvage)	VU
6	ナマズ	ギギ	ネコギギ	<i>Tachysurus ichikawai</i> (Okada et Kubota)	EN
7	スズキ	ハゼ	キセルハゼ	<i>Gymnogobius cylindricus</i> (Tomiya)	EN
8	スズキ	ハゼ	トウカイヨシノボリ	<i>Rhinogobius telma</i> Suzuki, Kimura et Shibukawa	NT

絶滅危惧 I B類(EN)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	ヤツメウナギ	ヤツメウナギ	スナヤツメ類	<i>Lethenteron</i> spp.	VU
2	ウナギ	ウナギ	ニホンウナギ	<i>Anguilla japonica</i> Temminck et Schlegel	EN
3	コイ	コイ	カワバタモロコ	<i>Hemigrammocypripis rasborella</i> Fowler	EN
4	コイ	ドジョウ	トウカイコガタスジシマドジョウ	<i>Cobitis minamorii tokaiensis</i> Nakajima	EN
5	コイ	フクドジョウ	ホトケドジョウ	<i>Lefua echigonia</i> Jordan et Richardson	EN
6	コイ	フクドジョウ	トウカイナガレホトケドジョウ	<i>Lefua tokaiensis</i> Ito, Hosoya et Miyazaki	EN
7	スズキ	カジカ	カマキリ(アユカケ)	<i>Rheopresbe kazika</i> (Jordan et Starks)	VU
8	スズキ	カジカ	カジカ	<i>Cottus pollux</i> Günther	NT

9	スズキ	ドンコ	ドンコ	<i>Odontobutis obscura</i> (Temminck et Schlegel)
---	-----	-----	-----	---

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	コイ	ドジョウ	ドジョウ	<i>Misgurnus anguillicaudatus</i> (Cantor)	NT
2	コイ	ドジョウ	ニシシマドジョウ	<i>Cobitis</i> sp. BIWAE type B	
3	キュウリウオ	シラウオ	シラウオ	<i>Salangichthys microdon</i> (Bleeker)	
4	ダツ	メダカ	ミナミメダカ	<i>Oryzias latipes</i> (Temminck et Schlegel)	VU
5	スズキ	カジカ	ウツセミカジカ	<i>Cottus reinii</i> Hilgendorf	EN
6	スズキ	ハゼ	トビハゼ	<i>Periophthalmus modestus</i> Cantor	NT
7	スズキ	ハゼ	ヒモハゼ	<i>Eutaenichthys gilli</i> Jordan et Snyder	NT
8	スズキ	ハゼ	ボウズハゼ	<i>Sicyopterus japonicus</i> (Tanaka)	
9	スズキ	ハゼ	マサゴハゼ	<i>Pseudogobius masago</i> (Tomiya)	VU

準絶滅危惧(NT)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	コイ	コイ	ゼゼラ	<i>Biwia zeze</i> (Ishikawa)	VU
2	コイ	コイ	イトモロコ	<i>Squalidus gracilis gracilis</i> (Temminck et Schlegel)	
3	ナマズ	アカザ	アカザ	<i>Liobagrus reini</i> Hilgendorf	VU
4	スズキ	カワアナゴ	カワアナゴ	<i>Eleotris oxycephala</i> Temminck et Schlegel	
5	スズキ	ハゼ	エドハゼ	<i>Gymnogobius macrognathos</i> (Bleeker)	VU
6	スズキ	ハゼ	オオヨシノボリ	<i>Rhinogobius fluviatilis</i> Tanaka	

情報不足(DD)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	コイ	コイ	コイ(在来型)	<i>Cyprinus carpio</i> Linnaeus	LP
2	コイ	コイ	アブラボテ	<i>Tanakia limbata</i> (Temminck et Schlegel)	NT
3	コイ	コイ	イチモンジタナゴ	<i>Acheilognathus cyanostigma</i> Jordan et Fowler	CR
4	コイ	コイ	シロヒレタビラ	<i>Acheilognathus tabira tabira</i> Jordan et Thompson	EN
5	サケ	サケ	サツキマス・アマゴ	<i>Oncorhynchus masou ishikawae</i> (Brevoort)	NT
6	ダツ	サヨリ	クルマサヨリ	<i>Hyporhamphus intermedius</i> (Cantor)	NT
7	スズキ	ハゼ	チワラスボ	<i>Taenioides snyderi</i> Jordan et Hubbs	EN

国リスト

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	コイ	コイ	ゲンゴロウブナ	<i>Carassius cuvieri</i> (Temminck et Schlegel)	EN
2	コイ	コイ	ハス	<i>Opsariichthys uncirostris uncirostris</i> (Temminck et Schlegel)	VU
3	コイ	コイ	ホンモロコ	<i>Gnathopogon caeruleus</i> (Sauvage)	CR
4	コイ	コイ	ツチフキ	<i>Abbottina rivularis</i> (Basilewsky)	EN
5	コイ	コイ	スゴモロコ	<i>Squalidus chankaensis biwae</i> (Jordan et Snyder)	VU
6	コイ	ドジョウ	オオガタスジシマドジョウ	<i>Cobitis magnostriata</i> Nakajima	EN
7	サケ	サケ	ニッコウイワナ	<i>Salvelinus leucomaenis pluvius</i> (Hilgendorf)	DD
8	サケ	サケ	サクラマス(ヤマメ)	<i>Oncorhynchus masou masou</i> (Brevoort)	NT
9	スズキ	ケツギョ	オヤニラミ	<i>Coreoperca kawamebari</i> (Temminck et Schlegel)	EN

④ 愛知県汽水・淡水魚類レッドリストの変更点

本書に掲載した汽水・淡水魚類レッドリスト（見直し後）と「レッドリストあいち 2015」に掲載した汽水・淡水魚類レッドリスト（見直し前）の新旧対照表を以下に示した。

	見直し前のランク									
	EX	CR	EN	VU	NT	DD	LP	国リスト*1	リスト外・未評価*2	種数
見直し後の ランク	EX									0
	CR	ヤリタナゴ イタセンバラ ウシモツゴ カワヒガイ デメモロコ ネコギギ キセルハゼ トウカイヨシノボリ								8
	EN		スナヤツメ類★1 ニホンウナギ カワバタモロコ トウカイコガタスジシマドジョウ ホトケドジョウ トウカイナガレホトケドジョウ カマキリ(アユカケ) カジカ ドンコ							9
	VU			ドジョウ ニシシマドジョウ シラウオ ウツセミカジカ トビハゼ ヒモハゼ ボウスハゼ マサゴハゼ	ミナミメダカ					9
	NT				ヒセラ イトモロコ アカザ カワアナゴ エドハゼ オオヨシノボリ					6
	DD					コイ(在来型) アブラボテ イチモンジタナゴ シロヒレタビラ サツキマス・アマゴ クルマサヨリ チウラスボ				7
	LP									0
国リスト *1								ゲンゴロウブナ ハス ホンモロコ ツチフキ スゴモロコ オオガタスジシマドジョウ ニッコウイワナ サクラマス(ヤマメ) オヤニラミ		9
ランク外 *3										0
種数	0	8	9	8	7	7	0	9	0	48

*1「国リスト」：環境省レッドリストに記載されているが、愛知県においてEX、CR、EN、VU、NT、DD、LPのいずれのランクにも該当しないと評価された種。

*2「未評価」：「レッドリストあいち2015」において評価対象とされなかった種。

*3「ランク外」：「レッドリストあいち2015」掲載種のうち、今回の見直しにおいてEX、CR、EN、VU、NT、DD、LP、国リストのいずれのランクにも該当しないと評価された種。

★1：スナヤツメはスナヤツメ北方種と南方種に細分化され、愛知県では現時点で南方種のみ確認されているが、北方種の存在も否定できないためスナヤツメ類とした。

(7) 昆虫類

① 愛知県における昆虫類の概況

「愛知県の昆虫、上・下」(1990・1991)には、1980年代末までの記録 6,063 種がまとめられている。その後、30 年近く経過し、その間に得られた膨大な生息情報を基に作成された「グリーンデータブックあいち 2018 昆虫編」(間野編, 2018)には、愛知県内の昆虫の記録種として 29 目 522 科 10,443 種が掲載されている。長年にわたる多くの人の手による調査により、昆虫相全体、特にトンボ目やチョウ目、コウチュウ目やカメムシ目などは全国的に見ても精度の高い解明率といえる。一方で、未解明微小種を含むハチ目やハエ目、全国的にも研究者の少ないコムシ目やネジレバエ目などでは県内記録が比較的少なく、今後、さらに調査が進むことで、まだ多数の種が追加されるものと思われる。

② 愛知県における絶滅危惧種の概況

今回の成果から、以下の総合計 214 種が選定された。また、愛知県内では絶滅が危惧されるような状況にないものの、環境省レッドリストに掲載されている種 23 種についても「国リスト」として掲載した。

絶滅 (EX)	14 種	準絶滅危惧 (NT)	90 種
絶滅危惧 I A 類 (CR)	17 種	情報不足 (DD)	30 種
絶滅危惧 I B 類 (EN)	31 種	国リスト種	23 種
絶滅危惧 II 類 (VU)	32 種		

絶滅種については、記録が途絶えて 20 年が経過し、近隣の生息地との分断により再度の分布が見込めないカワラハンミョウ、正確な記録が途絶えて 50 年経ち追加記録のないフタモンマルクビゴミムシが新たに追加された。この増加傾向は残念ながら今後も続くであろう。

絶滅危惧種にはコバネアオイトトンボなどのトンボ類をはじめ、スジゲンゴロウなどのゲンゴロウ類、またコバンムシなど水生昆虫が依然多く評価された。これは外来魚の放流なども含めた水域環境の劣化と、それに伴う生息昆虫の激減を如実に表している。特に湿地性種は現存する各湿地間の交流が保てるかどうか、存続にとって最重要視すべき点で、一定エリア内にある程度の数の湿地が残されていることが必要であろう。

林にはかつてのように人手が入らなくなったため、樹林性種は比較的安定した傾向にあるが、逆に管理放棄や混交林の繁茂の影響が見受けられる種もある。また、全国的に広がるナラ枯れ、シカの個体数増加に伴う食害などによる食樹・食草の減少が、今後樹林性種の生存に悪影響を与える可能性は否定できない。

草原は単に草刈の対象としか扱われない風潮があり、面積減少や荒廃が極めて著しい。その結果、ホシチャバネセセリなどのセセリチョウやゴマシジミなど草本依存性昆虫は危機的である。河川や浜辺などに発達する草地や砂地などの裸地に生息するオオヒョウタンゴミムシ、シルビアシジミ、ニッポンハナダカバチなども同様で、草地や裸地あるいは氾濫環境の回復には一刻も猶予がない。知多半島や隣接する三重県で再確認されランクの下がったハマベゾウムシは例外的である。

元々どこにでもいた昆虫は、その生活環境が人工的に改変されたため生息できなくなり、細々と生きながらえることとなる。その結果絶滅危惧に瀕する状況に陥ると、それまで絶滅とは無関係で

あった採集圧が、絶滅に拍車をかけるということになる。絶滅をくいどめる生態的な情報は、それら昆虫の採集を中心とする観察、比較、情報等の集積によって得られるにもかかわらず、結果として、採集を禁止せざるを得ないという負のサイクルへと向かうのであれば、非常に残念なことである。

絶滅危惧に瀕している種は、本来の自然保護はどうあるべきかを考え、今後どうすべきかを考えるさまざまな示唆を与えてくれる。

【参考：除外種リスト】

「レッドリストあいち 2015」掲載種のうち、今回の見直しによってリストから除外された種とその理由は以下のとおりである。

除外種

No.	目名	科名	和名	見直し前 県ランク	除外理由
1	チョウ	セセリチョウ	ヘリグロチャバネセセリ	CR	名古屋大学にある本種の 2 頭の標本を披見したが、愛知県の個体ではなかった。
2	コウチュウ	ヒメドロムシ	ミヤモトアシナガミズ ドロムシ	NT	矢作川において相当数の個体や生育適地が確認された。また、近年の研究でアシナガミズドロムシのシノニムであると発表された。

③ 愛知県昆虫類レッドリスト

目及び科の配列と名称、種の配列及び和名、学名は、原則として「グリーンデータブックあいち 2018 昆虫編」を基に、新しい知見を加え整理した。なお、チョウ目については、チョウ類とガ類に区分し、チョウ類・ガ類の順に配列した。

絶滅(EX)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	カメムシ	ナベブタムシ	トゲナベブタムシ	<i>Aphelocheirus nawae</i> Nawa	VU
2	コウチュウ	オサムシ	フタモンマルクビゴミムシ	<i>Nebria pulcherrima pulcherrima</i> Bates	EN
3	コウチュウ	オサムシ	カワラハンミョウ	<i>Chaetodera laetescripta laetescripta</i> (Motschulsky)	EN
4	コウチュウ	ゲンゴロウ	マルガタゲンゴロウ	<i>Graphoderus adamsii</i> (Clark)	VU
5	コウチュウ	ゲンゴロウ	コガタノゲンゴロウ	<i>Cybister tripunctatus lateralis</i> Fabricius	VU
6	コウチュウ	ゲンゴロウ	シャープゲンゴロウモドキ	<i>Dytiscus sharpi</i> Wehncke	CR
7	コウチュウ	ゲンゴロウ	スジゲンゴロウ	<i>Hydaticus satoi</i> Wewalka	EX
8	コウチュウ	ゲンゴロウ	マダラシマゲンゴロウ	<i>Hydaticus thermonectoides</i> Sharp	CR
9	コウチュウ	コガネムシ	マルエンマコガネ	<i>Onthophagus viduus</i> Harold	
10	コウチュウ	カミキリムシ	ヒメビロウドカミキリ	<i>Acalolepta degener</i> (Bates)	NT
11	コウチュウ	カミキリムシ	アサカミキリ	<i>Thyestilla gebleri</i> (Faldermann)	VU
12	チョウ	シジミチョウ	シルビアシジミ	<i>Zizina emelina</i> (de l'Orza)	EN
13	チョウ	タテハチョウ	ヒョウモンモドキ	<i>Melitea scotosia</i> Butler	CR
14	チョウ	タテハチョウ	オオウラギンヒョウモン	<i>Fabriciana nerippe</i> (C. et R. Felder)	CR

絶滅危惧 I A類(CR)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	トンボ	アオイトトンボ	コバネアオイトトンボ	<i>Lestes japonicus</i> Selys	EN
2	トンボ	トンボ	マダラナニウトンボ	<i>Sympetrum maculatum</i> Oguma	EN
3	トンボ	トンボ	オオキトンボ	<i>Sympetrum uniforme</i> (Selys)	EN
4	トンボ	トンボ	ベッコウトンボ	<i>Libellula angelina</i> Selys	CR
5	カメムシ	コバンムシ	コバンムシ	<i>Ilyocoris cimicoides exclamatoris</i> (Scott)	EN
6	コウチュウ	オサムシ	キベリマルクビゴミムシ	<i>Nebria livida angulata</i> Bänninger	EN
7	コウチュウ	クワガタムシ	オオクワガタ	<i>Dorcus hopei binodulosus</i> Waterhouse	VU
8	コウチュウ	カミキリムシ	タケウチホソハナカミキリ	<i>Strongalia takeuchii</i> Matsushita et Tamanuki	
9	コウチュウ	カミキリムシ	チャイロヒメコブハナカミキリ	<i>Macropidonia japonica japonica</i> (Ohbayashi)	
10	チョウ	シロチョウ	スジボソヤマキチョウ	<i>Gonepteryx aspasia nipponica</i> Bollow	
11	チョウ	シジミチョウ	ハヤシミドリシジミ	<i>Favonius ultramarinus</i> (Fixsen)	
12	チョウ	シジミチョウ	ミヤマカラスシジミ	<i>Strymonidia mera</i> (Janson)	
13	チョウ	シジミチョウ	クロシジミ	<i>Niphanda fusca</i> (Bremer et Grey)	EN

14	チョウ	シジミチョウ	ヒメシジミ	<i>Plebejus argus micrargus</i> (Butler)	NT
15	チョウ	シジミチョウ	ゴマシジミ	<i>Maculinea teleius kazamoto</i> (H. Druce)	CR
16	チョウ	セセリチョウ	チャマダラセセリ	<i>Pyrgus maculatus</i> (Bremer et Grey)	EN
17	チョウ	セセリチョウ	ホシチャバネセセリ	<i>Aeromachus inachus</i> (Ménétrières)	EN

絶滅危惧ⅠB類(EN)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	トンボ	モノサシトンボ	グンバイトンボ	<i>Platycnemis foliacea sasakii</i> Asahina	NT
2	トンボ	イトトンボ	オオイトトンボ	<i>Cercion sieboldii</i> (Selys)	
3	トンボ	イトトンボ	ヒヌマイイトトンボ	<i>Mortonagrion hirosei</i> Asahina	EN
4	トンボ	ヤンマ	アオヤンマ	<i>Aeschnophlebia longistigma</i> Selys	NT
5	トンボ	サナエトンボ	コサナエ	<i>Trigomphus melampus</i> (Selys)	
6	トンボ	サナエトンボ	メガネサナエ	<i>Stylurus oculatus</i> (Asahina)	VU
7	トンボ	トンボ	キトンボ	<i>Sympetrum croceolum croceolum</i> (Selys)	
8	バッタ	ヒバリモドキ	ハマスズ	<i>Dianemobius csikii</i> (Bolivar)	
9	カメムシ	コオイムシ	タガメ	<i>Kirkaldyia deyrolli</i> (Vuillefroy)	VU
10	コウチュウ	ミズスマシ	コミズスマシ	<i>Gyrinus curtus</i> Motschulsky	EN
11	コウチュウ	ミズスマシ	ミズスマシ	<i>Gyrinus japonicus</i> Sharp	VU
12	コウチュウ	オサムシ	シロヘリハンミョウ	<i>Callytron yuasai yuasai</i> (Nakane)	NT
13	コウチュウ	オサムシ	ホソハンミョウ	<i>Cylindera gracilis</i> Pallas	VU
14	コウチュウ	オサムシ	セアカオサムシ	<i>Hemicarabus tuberculatus</i> (Dejean et Boisduval)	NT
15	コウチュウ	オサムシ	コハンミョウモドキ	<i>Elaphrus punctatus</i> Motschulsky	EN
16	コウチュウ	オサムシ	ツツイキバナガミズギワゴミシ	<i>Bembidion tsutsui</i> (S. Uéno)	NT
17	コウチュウ	オサムシ	ハバメクラチビゴミシ	<i>Trechiana habeii</i> (S. Uéno)	
18	コウチュウ	コガシラミズムシ	キイロコガシラミズムシ	<i>Haliphus eximius</i> Clark	VU
19	コウチュウ	ゲンゴロウ	ゲンゴロウ	<i>Cybister chinensis</i> Motschulsky	VU
20	コウチュウ	クワガタムシ	ツヤハダクワガタ	<i>Ceruchus lignarius monticola</i> Nakane	
21	コウチュウ	クワガタムシ	ヒメオオクワガタ	<i>Dorcus montivagus montivagus</i> (Lewis)	
22	コウチュウ	コガネムシ	クロモンマゴソコガネ	<i>Aphodius variabilis</i> Waterhouse	NT
23	コウチュウ	カミキリムシ	ヒメヨツスジハナカミキリ	<i>Leptura kusamai kusamai</i> Ohbayashi et Nakane	
24	コウチュウ	カミキリムシ	イガブチヒゲハナカミキリ	<i>Stictoleptura igai</i> (Tamanuki)	
25	コウチュウ	カミキリムシ	ヨツボシカミキリ	<i>Stenygrium quadrinotatum</i> Bates	EN
26	チョウ	シジミチョウ	クロツバメシジミ	<i>Tongeia fischeri</i> (Eversmann)	NT
27	チョウ	タテハチョウ	ヒメヒカゲ	<i>Coenonympha oedippus</i> ssp.	EN
28	チョウ	タテハチョウ	ウラジャノメ	<i>Lopinga achine achinoides</i> (Butler)	
29	チョウ	タテハチョウ	クロヒカゲモドキ	<i>Lethe marginalis</i> Motschulsky	EN
30	チョウ	セセリチョウ	スジグロチャバネセセリ	<i>Thymelicus leoninus</i> (Butler)	NT
31	チョウ	セセリチョウ	ミヤマチャバネセセリ	<i>Pelopidas jansonis</i> (Butler)	

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	トンボ	イトトンボ	ベニイトトンボ	<i>Ceragrion nipponicum</i> Asahina	NT
2	トンボ	サナエトンボ	オグマサナエ	<i>Trigomphus ogumai</i> (Asahina)	NT
3	トンボ	サナエトンボ	フタスジサナエ	<i>Trigomphus interruptus</i> (Selys)	NT
4	トンボ	エゾトンボ	エゾトンボ	<i>Somatochlora viridiaenea</i> (Uhler)	
5	トンボ	エゾトンボ	ハネビロエゾトンボ	<i>Somatochlora clavata</i> Oguma	VU
6	カメムシ	イトアメンボ	イトアメンボ	<i>Hydrometra albolineata</i> (Scott)	VU
7	カメムシ	アメンボ	ババアメンボ	<i>Gerris babai</i> Miyamoto	NT
8	コウチュウ	オサムシ	オオヒョウタンゴミシ	<i>Scarites sulcatus sulcatus</i> Olivier	NT
9	コウチュウ	オサムシ	ハマベゴミシ	<i>Pogonus japonicus</i> Putzeys	NT
10	コウチュウ	オサムシ	ヒトツメアオゴミシ	<i>Callistoides delicolus</i> (Bates)	NT
11	コウチュウ	オサムシ	クビナガキベリアオゴミシ	<i>Chlaenius prostenus</i> Bates	DD
12	コウチュウ	オサムシ	ジャアナヒラタゴミシ	<i>Jujiro ana</i> (S. Uéno)	VU
13	コウチュウ	ゲンゴロウ	クロゲンゴロウ	<i>Cybister brevis</i> Aubé	NT
14	コウチュウ	ガムシ	ガムシ(オオガムシ)	<i>Hydrophilus acuminatus</i> Motschulsky	NT
15	コウチュウ	シデムシ	ヤマトモンシデムシ	<i>Nicrophorus japonicus</i> Harold	NT
16	コウチュウ	ハネカクシ	オオツノハネカクシ	<i>Bledius salsus</i> Miyatake	DD
17	コウチュウ	コガネムシ	オオチャイロハナムグリ	<i>Osmoderma opicum</i> Lewis	NT
18	コウチュウ	タマムシ	クロマダラタマムシ	<i>Nipponobuprestis querceti</i> (Saunders)	
19	コウチュウ	ヒメドロムシ	クロサワドロムシ	<i>Neoriorhynchus kurosawai</i> Nomura	
20	コウチュウ	コメツキムシ	シタラミヤマヒサゴコメツキ	<i>Homotechnes motsulskyi suzuki</i> Ōhira	
21	コウチュウ	コメツキムシ	ツヤヒラタコメツキ	<i>Aganohypogonus mirabilis</i> (Miwa)	
22	コウチュウ	ハムシ	カツラネクイハムシ	<i>Donacia katsurai</i> Kimoto	
23	トビケラ	ニンギョウトビケラ	コブニンギョウトビケラ	<i>Larcasia akagiae</i> Nishimoto et Tanida	
24	トビケラ	フトヒゲトビケラ	ヒトスジキソトビケラ	<i>Psilotreta japonica</i> Banks	
25	チョウ	アゲハチョウ	ギフチョウ	<i>Luehdorfia japonica</i> Leech	VU
26	チョウ	シジミチョウ	ムモンアカシジミ	<i>Shirozua jonsai</i> (Janson)	
27	チョウ	シジミチョウ	ウラクロシジミ	<i>Iratsume orsedice</i> (Butler)	
28	チョウ	シジミチョウ	フジミドリシジミ	<i>Shibataniophyrus fujisanus</i> (Matsumura)	
29	チョウ	シジミチョウ	エゾミドリシジミ	<i>Favonius jezoensis</i> (Matsumura)	
30	チョウ	タテハチョウ	ウラギンズシヒョウモン	<i>Argyrogonia laodice japonica</i> (Ménétrières)	VU

31	チョウ	タテハチョウ	ウラナミジヤノメ	<i>Ypthima multistriata</i> Butler	VU
32	チョウ	セセリチョウ	コキマダラセセリ	<i>Ochlodes venatus</i> (Bremer et Grey)	

準絶滅危惧(NT)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	トンボ	イトトンボ	モートンイトトンボ	<i>Mortonagrion selenion</i> (Ris)	NT
2	トンボ	ヤンマ	ネアカヨシヤンマ	<i>Aeschnophlebia anisoptera</i> Selys	NT
3	トンボ	サナエトンボ	ナゴヤサナエ	<i>Stylurus nagoyanus</i> (Asahina)	VU
4	トンボ	サナエトンボ	キイロサナエ	<i>Asiagomphus pryori</i> (Selys)	NT
5	トンボ	エゾトンボ	トラフトンボ	<i>Epithea marginata</i> (Selys)	
6	トンボ	ヤマトトンボ	キイロヤマトンボ	<i>Macromia daimoji</i> Okumura	NT
7	トンボ	トンボ	ノシメトンボ	<i>Sympetrum infuscatum</i> (Selys)	
8	バッタ	マツムシ	クチキコオロギ	<i>Duolandrevus ivani</i> (Gorochov)	
9	バッタ	クツワムシ	タイワンクツワムシ	<i>Mecopoda elongata</i> (Linnaeus)	
10	バッタ	バッタ	ヤマトバッタ	<i>Epacromius japonicus</i> (Shiraki)	
11	カマキリ	カマキリ	ヒナカマキリ	<i>Amantis nawai</i> (Shiraki)	
12	ゴキブリ	オオゴキブリ	オオゴキブリ	<i>Panesthia angustipennis spadica</i> (Shiraki)	
13	カメムシ	アカガミウンカ	ニホンアカガミウンカ	<i>Ommatidiotus japonicus</i> Y. Hori	
14	カメムシ	タイコウチ	ヒメタイコウチ	<i>Nepa hoffmanni</i> Esaki	
15	カメムシ	ナベブタムシ	ナベブタムシ	<i>Aphelocheirus vittatus</i> Matsumura	
16	カメムシ	アメンボ	オオアメンボ	<i>Aquarius elongatus</i> (Uhler)	
17	カメムシ	アメンボ	エサキアメンボ	<i>Limnoporus esakii</i> (Miyamoto)	NT
18	コウチュウ	ミズスマシ	オオミズスマシ	<i>Dineutus orientalis</i> Modeer	NT
19	コウチュウ	ミズスマシ	コオナガミズスマシ	<i>Orectochilus punctipennis</i> Sharp	VU
20	コウチュウ	オサムシ	アイヌハミョウ	<i>Cicindela gemmata aino</i> Lewis	NT
21	コウチュウ	オサムシ	カワラゴミムシ	<i>Omophron aequale aequale</i> Morawitz	
22	コウチュウ	オサムシ	キバネキバナガミズギワゴミムシ	<i>Bembidion aestuarii</i> S. Uéno et Habu	VU
23	コウチュウ	オサムシ	オオトックリゴミムシ	<i>Oodes vicarius</i> Bates	NT
24	コウチュウ	オサムシ	ホラズミヒラタゴミムシ	<i>Jujiroa troglodytes</i> S. Uéno	
25	コウチュウ	コガシラミズムシ	クビボソコガシラミズムシ	<i>Haliphus japonicus</i> Sharp	DD
26	コウチュウ	コガシラミズムシ	ヒメコガシラミズムシ	<i>Haliphus ovalis</i> Sharp	
27	コウチュウ	コガシラミズムシ	マダラコガシラミズムシ	<i>Haliphus sharpi</i> Wehncke	VU
28	コウチュウ	コツブゲンゴロウ	ムツボシツヤコツブゲンゴロウ	<i>Canthydrus politus</i> (Sharp)	VU
29	コウチュウ	コツブゲンゴロウ	キボシチビコツブゲンゴロウ	<i>Neohydrocoptus bivittis</i> (Motschulsky)	EN
30	コウチュウ	ゲンゴロウ	トダセスジゲンゴロウ	<i>Copelatus nakamurai</i> Guérougiev	VU
31	コウチュウ	ゲンゴロウ	シマゲンゴロウ	<i>Hydaticus bowringi</i> Clark	NT
32	コウチュウ	ゲンゴロウ	マルチビゲンゴロウ	<i>Leidytes frontalis</i> (Sharp)	NT
33	コウチュウ	ゲンゴロウ	サメハダマルケンゲンゴロウ	<i>Hydrovatus stridulus</i> Biström	
34	コウチュウ	ホソガムシ	ヤマトホソガムシ	<i>Hydrochus japonicus</i> Sharp	NT
35	コウチュウ	エンマムシ	アラメエンマムシ	<i>Zabromorphus punctulatus</i> (Wiedemann)	
36	コウチュウ	コガネムシ	ヤマトケシマゴソコガネ	<i>Psammodytes japonicus</i> Harold	
37	コウチュウ	コガネムシ	ヤマトアオドウガネ	<i>Anomala japonica</i> Arrow	
38	コウチュウ	コガネムシ	アカマダラハナムグリ	<i>Poecilophilides rusticola</i> (Burmeister)	DD
39	コウチュウ	コガネムシ	クロカナブン	<i>Rhomborrhina polita</i> Waterhouse	
40	コウチュウ	タマムシ	トゲフタオタマムシ	<i>Dicerca tibialis</i> Lewis	
41	コウチュウ	ヒメドロムシ	ヨコミゾドロムシ	<i>Leptelmis gracilis</i> Sharp	VU
42	コウチュウ	コメツキムシ	サトヤマシモフリコメツキ	<i>Actenicerus kidonoi</i> Ôhira	
43	コウチュウ	コメツキムシ	ジュウジミズギワコメツキ	<i>Fleutiauxellus cruciatus</i> (Candèze)	
44	コウチュウ	コメツキムシ	アカアシコハナコメツキ	<i>Paracardiophorus sequens sequens</i> (Candèze)	
45	コウチュウ	オオキノコムシ	オオキノコムシ	<i>Encaustes praenobilis</i> Lewis	
46	コウチュウ	ナガクチキムシ	ミスジナガクチキ	<i>Stenoxylita trialbofasciata</i> (Hayashi et Kato)	
47	コウチュウ	アカハネムシ	オカモトツヤアカハネムシ	<i>Pedilus okamotoi</i> (Kôno)	
48	コウチュウ	カミキリムシ	ヒゲブトハナカミキリ	<i>Pachypidonia bodemeyeri</i> Pic	
49	コウチュウ	カミキリムシ	トサヒメハナカミキリ	<i>Pidonia approximata</i> Kuboki	
50	コウチュウ	カミキリムシ	フタコブルリハナカミキリ	<i>Japanocorus coeruleipennis</i> (Bates)	
51	コウチュウ	カミキリムシ	ケブカマルクビカミキリ	<i>Atimia okayamensis</i> Hayashi	
52	コウチュウ	カミキリムシ	ヒゲジロホソコバネカミキリ	<i>Necydalis odai</i> Hayashi	
53	コウチュウ	カミキリムシ	オオホソコバネカミキリ	<i>Necydalis solida</i> Bates	
54	コウチュウ	カミキリムシ	ヨコヤマヒゲナガカミキリ	<i>Dolichoprosopus yokoyamai</i> (Gressitt)	
55	コウチュウ	ハムシ	キヌツヤミズクサハムシ (スゲハムシ)	<i>Plateumaris sericea</i> (Linnaeus)	
56	コウチュウ	ハムシ	オオミズクサハムシ	<i>Plateumaris constricticollis</i> (Jacoby)	
57	コウチュウ	チビゾウムシ	ヒシチビゾウムシ	<i>Nanophyes japonicus</i> Roelofs	
58	コウチュウ	ゾウムシ	バックinghamカギアシゾウムシ	<i>Bagous buckinghami</i> O'Brien et Morimoto	
59	コウチュウ	ゾウムシ	ハマベゾウムシ	<i>Aphela gotoi</i> (Chûjō et Voss)	
60	トビケラ	ナガレトビケラ	オオナガレトビケラ	<i>Himalopsyche japonica</i> (Morton)	NT
61	トビケラ	コエグリトビケラ	イワコエグリトビケラ	<i>Manophylax futabae</i> Nishimoto	
62	トビケラ	ヒゲナガトビケラ	モセリーヒゲナガトビケラ	<i>Leptocerus moseleyi</i> (Martynov)	
63	トビケラ	ホソバトビケラ	イトウホソバトビケラ	<i>Molannodes itoae</i> Fuller et Wiggins	
64	チョウ	シロチョウ	ツマグロキチョウ	<i>Eurema laeta betheseba</i> (Janson)	EN
65	チョウ	シジミチョウ	オナガシジミ	<i>Araragi enthea enthea</i> (Janson)	

66	チョウ	シジミチョウ	オオミドリシジミ	<i>Favonius orientalis</i> (Murray)	
67	チョウ	タテハチョウ	オオウラギンスジヒョウモン	<i>Argyrogonome ruslana</i> (Motschulsky)	
68	チョウ	タテハチョウ	オオムラサキ	<i>Sasakia charonda charonda</i> (Hewitson)	NT
69	チョウ	タテハチョウ	オオヒカゲ	<i>Ninguta schrenckii</i> (Ménétries)	
70	チョウ	セセリチョウ	ギンイチモンジセセリ	<i>Leptolina unicolor</i> (Bremer et Grey)	NT
71	チョウ	セセリチョウ	ホソバセセリ	<i>Isoteinon lamprospilus</i> C. et R. Felder	
72	チョウ	ツトガ	ヒメコミズメイガ	<i>Parapoynx rectilinealis</i> Yoshiyasu	
73	チョウ	アゲハモドキガ	フジキオビ	<i>Schistomitra funeralis</i> Butler	
74	チョウ	シャチホコガ	カバイロシャチホコ	<i>Ramesa tosta</i> Walker	NT
75	チョウ	ヤガ	シラユキコヤガ	<i>Eulocastra sasakii</i> Sugi	VU
76	チョウ	ヤガ	オオキイロアツバ	<i>Pseudalelimma miwai</i> Inoue	
77	チョウ	ヤガ	カバフキシタバ	<i>Catocala mirifica</i> Butler	
78	チョウ	ヤガ	オオチャバネヨトウ	<i>Nonagria puengeleri</i> (Schawerda)	VU
79	チョウ	ヤガ	キスジウスキヨトウ	<i>Capsula sparganii</i> (Esper)	VU
80	チョウ	ヤガ	エチゴハガタヨトウ	<i>Asidemia inexpecta</i> (Sugi)	
81	チョウ	ヤガ	エゾスジヨトウ	<i>Doerriesa striata</i> (Staudinger)	VU
82	チョウ	ヤガ	サヌキキリガ	<i>Elwesia sugii</i> Yoshimoto	
83	チョウ	ヤガ	イセキリガ	<i>Agrochola sakabei</i> Sugi	
84	ハチ	クビナガキバチ	アカズクビナガキバチ	<i>Euxiphydria potanini</i> (Jakovlev)	
85	ハチ	コマユバチ	ウマノオバチ	<i>Euurobracon yokahamae</i> (Dalla Torre)	NT
86	ハチ	セイボウ	フタツバトゲセイボウ	<i>Elampus bidens tristis</i> Tsuneki	
87	ハチ	アナバチ	キゴシジガバチ	<i>Sceliphron madraspatanum kohli</i> Sickmann	
88	ハチ	ギンギチバチ	ニッポンハナダカバチ	<i>Bembix niponica</i> F. Smith	VU
89	ハチ	ギンギチバチ	ササキギンギチ	<i>Ectemnius furuichii</i> (Iwata)	NT
90	ハチ	ミツバチ	キヌゲハキリバチ	<i>Megachile kobensis</i> Cockerell	

情報不足(DD)

No.	目 名	科 名	和 名	学 名	国ランク
1	ナナフシ	ナナフシ	エダナナフシ	<i>Phraortes elongatus</i> (Thunberg)	
2	バッタ	カマドウマ	チビクチキウマ	<i>Anoplophilus minor</i> Ishikawa	
3	バッタ	カマドウマ	ミカワクチキウマ	<i>Anoplophilus okadai</i> Ishikawa	
4	バッタ	ヒシバッタ	ギフヒシバッタ	<i>Tetrix giftuensis</i> Storozhenko, Ichikawa et Uchida	
5	カメムシ	タイコウチ	タイコウチ	<i>Laccotrephes japonensis</i> Scott	
6	カメムシ	タイコウチ	ミズカマキリ	<i>Ranatra chinensis</i> Mayr	
7	カメムシ	ミズムシ	ホッケミズムシ	<i>Hesperocorixa distantii hokkensis</i> Matsumura	NT
8	カメムシ	カタビロアメンボ	オヨギカタビロアメンボ	<i>Xiphovelia japonica</i> Esaki et Miyamoto	NT
9	カメムシ	キンカメムシ	ニシキンカメムシ	<i>Poecilocoris splendidulus</i> Esaki	
10	コウチュウ	ツブミズムシ	クロサワツブミズムシ	<i>Satonius kurosawai</i> (M. Satô)	
11	コウチュウ	オサムシ	チイワメクラチビゴミムシ	<i>Trechiana mammalis</i> S. Uéno	
12	コウチュウ	エンマムシ	クロエンマムシ	<i>Hister concolor</i> Lewis	
13	コウチュウ	エンマムシ	エンマムシ	<i>Merohister jekeli</i> (Marseul)	
14	コウチュウ	コガネムシ	トラハナムグリ	<i>Trichius japonicus</i> Janson	
15	コウチュウ	カミキリムシ	ベニバハナカミキリ	<i>Paranaspia anaspidoidea</i> (Bates)	
16	コウチュウ	カミキリムシ	ヒメアカハナカミキリ	<i>Brachyleptura pyrrha</i> (Bates)	
17	コウチュウ	ハムシ	キオビクビボソハムシ	<i>Lama delicatula</i> Baly	
18	コウチュウ	ハムシ	ヒメカバノキハムシ	<i>Syneta brevitibialis</i> Kimoto	
19	コウチュウ	ゾウムシ	チビコバンゾウムシ	<i>Miarus vestitus</i> Roelofs	
20	コウチュウ	ゾウムシ	カギアシゾウムシ	<i>Bagous bipunctatus</i> (Kono)	
21	コウチュウ	ゾウムシ	コカギアシゾウムシ	<i>Bagous fractus</i> O'brien et Morimoto	
22	コウチュウ	ゾウムシ	フタホシカギアシゾウムシ	<i>Bagous kagiashi</i> Chujo et Morimoto	
23	コウチュウ	ゾウムシ	ヤヤコブカギアシゾウムシ	<i>Bagous spicatus</i> O'brien et Morimoto	
24	ハエ	カ	トワダオオカ	<i>Toxorhynchites towadensis</i> (Matsumura)	
25	チョウ	タテハチョウ	ツマジロウラジャノメ	<i>Lasioommata deidamia interrupta</i> (Fruhstorfer)	
26	チョウ	タテハチョウ	キマダラモドキ	<i>Kirinia fentoni</i> (Butler)	NT
27	チョウ	ツトガ	エンスイミズメイガ	<i>Eristena argentata</i> Yoshiyasu	
28	チョウ	ヤガ	マダラウスズミケンモン	<i>Acronicta subornata</i> (Leech)	
29	チョウ	ヤガ	ウスベニキヨトウ	<i>Mythimna pudorina</i> (Denis et Shiffermüller)	
30	ハチ	コツチバチ	ホソツヤアリバチ	<i>Methocha yasumatsui</i> Iwata	

国リスト

No.	目 名	科 名	和 名	学 名	国ランク
1	トンボ	カワトンボ	アオハダトンボ	<i>Calopteryx japonica</i> Selys	NT
2	トンボ	ヤンマ	マダラヤンマ	<i>Aeschna mixta soneharai</i> Asahina	NT
3	トンボ	サナエトンボ	タベサナエ	<i>Trigomphus citimus</i> (Needham)	NT
4	カメムシ	コオイムシ	コオイムシ	<i>Appasus japonicus</i> Vuillefroy	NT
5	カメムシ	ミズムシ	ミヤケミズムシ	<i>Xenocorixa vittipennis</i> (Horváth)	NT
6	カメムシ	ヒョウタンナガカメムシ	アシナガナガカメムシ	<i>Poecantius lineatus</i> Stål	NT
7	カメムシ	ツチカメムシ	シロヘリツチカメムシ	<i>Canthophorus niveimarginatus</i> Scott	NT
8	チョウ	ボクトウガ	ハイイロボクトウ	<i>Pharagmataecia castaneae</i> (Hübner)	NT
9	チョウ	ヤママユガ	オナガミズアオ	<i>Actias gnoma</i> (Butler)	NT

10	チョウ	ヤガ	キシタアツバ	<i>Hypena claripennis</i> (Butler)	NT
11	チョウ	ヤガ	カギモンハナオアイアツバ	<i>Cidaripura signata</i> (Butler)	NT
12	チョウ	ヤガ	ギンモンアカトウ	<i>Plusilla rosalia</i> Staudinger	VU
13	チョウ	ヤガ	ウスミモンキリガ	<i>Eupsilia contracta</i> (Butler)	NT
14	ハチ	セイボウ	オオセイボウ	<i>Stilbum cyanurum</i> (Foerster)	DD
15	ハチ	クモバチ	アオスジクモバチ	<i>Paracyphononyx alienus</i> (Smith)	DD
16	ハチ	アリ	ケブカツヤオアリ	<i>Camponotus nipponensis</i> Santschi	DD
17	ハチ	アリ	トゲアリ	<i>Polyrhachis lamellidens</i> F. Smith	VU
18	ハチ	スズメバチ	キオビホオナガスズメバチ	<i>Dolichovespula media sugare</i> Ishikawa	DD
19	ハチ	スズメバチ	ヤマトアシナガバチ	<i>Polistes japonicus japonicus</i> Saussure	DD
20	ハチ	スズメバチ	モンズメバチ	<i>Vespa crabro flavofasciata</i> Cameron	DD
21	ハチ	ギンギチバチ	カラトイスカバチ	<i>Passaloecus koreanus</i> Tsuneki	DD
22	ハチ	ミツバチ	マイマイツツハナバチ	<i>Osmia orientalis</i> Benoist	DD
23	ハチ	ミツバチ	ルリモンハナバチ	<i>Thyreus decorus</i> (Smith)	DD

④ 愛知県昆虫類レッドリストの変更点

本書に掲載した昆虫類レッドリスト（見直し後）と「レッドリストあいち 2015」に掲載した昆虫類レッドリスト（見直し前）の新旧対照表を以下に示した。

		見直し前のランク									
		EX	CR	EN	VU	NT	DD	LP	国リスト*1	リスト外・未評価*2	種数
見直し後の ランク	EX	トゲナベバタムシ マルガタゲンゴロウ コガタノゲンゴロウ シャープゲンゴロウモドキ スジゲンゴロウ 等、11種	フタモンマルクビゴミムシ カワラハンミョウ							マルエンマコガネ	14
	CR		コハネアオイトトンボ オオキトンボ ベッコウトンボ コバナムシ キベリマルクビゴミムシ 等、16種	マダラナニワトンボ							17
	EN	ヒメヒガ ウラジアナメ	クンバイトンボ オオイトトンボ ヒスマイトトンボ アオヤンマ コサナエ 等、24種	ミスズマシ ホソハンミョウ セアカオサムシ スジグロチャバネセリ	メガネサナエ						31
	VU		エゾミドリシジミ	ベニイトトンボ オグマサナエ フタスジサナエ エゾトンボ ハネビロエゾトンボ 等、27種	ジャアナヒラダゴミムシ ウラクロシジミ ウラギンスジヒョウモン				ガムシ(オオガムシ)	32	
	NT			ハマベゾウムシ ギンイチモンジセリ	モートンイトトンボ ネアカヨシヤンマ ヤマトバツ★1 ニホンアカジマウンカ★2 モセリーヒゲナガトビケラ★3 等、86種			ツマグロキチョウ	サメハダマルゲンシゲンゴロウ	90	
	DD					エダナナフシ★1 チビクチキウマ ミカワクチキウマ ギフヒシバツ ホツクミズムシ 等、26種			タイコウチ ミスカマキリ ツマジロウラジアナメ キマダラモドキ	30	
LP											0
国リスト*1									アオハダトンボ マダラヤンマ タベサナエ コオイムシ ハイロボクトウ 等、20種	ミヤケミズムシ アシナガナガカメムシ シロヘリツチカメムシ	23
ランク外*3			ヘリグロチャバネセリ			ミヤモトアナンナガミズドROMシ					2
種数		11	21	26	33	91	26	0	21	10	239

*1「国リスト」：環境省レッドリストに記載されているが、愛知県においてEX、CR、EN、VU、NT、DD、LPのいずれのランクにも該当しないと評価された種。

*2「未評価」：「レッドリストあいち2015」において評価対象とされなかった種。

*3「ランク外」：「レッドリストあいち2015」掲載種のうち、今回の見直しにおいてEX、CR、EN、VU、NT、DD、LP、国リストのいずれのランクにも該当しないと評価された種。

★1：ヤマトマダラバタからヤマトバタに和名変更

★2：アカジマアサブリュウナからニホンアカジマウンカに和名変更

★3：ヒゲナガトビケラ属の一種からモセリーヒゲナガトビケラに和名変更

★4：ホンドエダナナフシからエダナナフシに和名変更

(8) クモ類

① 愛知県におけるクモ類の概況

愛知県は日本列島のほぼ中央に位置し、平野、山地、海、河川（木曽川・庄内川・矢作川・豊川）、石灰岩地帯（豊橋市嵩山の蛇穴、石巻山他）など地形の変化にも富み、クモ類の生息地としては恵まれている。県の北西から南東にかけて濃尾・岡崎・豊橋と三つの平野部が連なり、尾張部からは知多半島が、東三河平野からは渥美半島が南に突きだしている。県北東部は山地となり、三河高原を形成、最北東部は 1,000m 以上の山地で、最高は茶臼山の 1,415m となっている。太平洋に面した知多半島および渥美半島を含む三河の平野部は温暖な気候（伊良湖、年平均 15.8℃）に恵まれている一方、三河高原では夏は涼しいが、冬の冷え込みは厳しく（茶臼山、年平均 8.4℃）、年平均でも 7℃以上の差がある。

これらの理由から、本県は、南方系・北方系両方のクモ類が交錯して生息する、また、海岸性から平野部・山地性のもの、さらに洞窟性のものまで幅広い生息場所ごとの種が見られる地域となっている。

ところで、愛知県で記録されたクモ類の種数は、1984 年には僅かに 31 科 234 種であった（須賀, 1984）。しかし、その後の調査により 52 科 586 種が確認された（緒方, 2018a）。さらに 1 年間で 4 種類増えて 52 科 590 種となった（緒方, 2019a）。日本産クモ類は 1,659 種（小野・緒方, 2018）であるから、その約 35.6%が愛知県に生息することになる。

○ 山地のクモ

西三河地方の豊田市は 2005 年に藤岡町・小原村・足助町・下山村・旭町・稲武町の 6 市町村と合併し、総面積は 918.32 km² となり県下最大となった。南部は工業地帯や農耕地が占めるが、北部一帯は山間部である。それに加え大小の河川、ため池、湿地も点在し、多様な環境を形成する。当然クモの種数は多く、45 科 480 種を記録する（緒方, 2016a）。これは県に対し科では 86.5%、種では 81.4%に値する。北設楽郡設楽町は、森林が 91%を占めている。同町で確認されたクモ類は 34 科 323 種である（緒方, 1996a）。なかでも同町の段戸裏谷はブナ・ミズナラ・モミ・ツガの原生林で、この森で確認されたクモ類は 28 科 257 種である（緒方, 1996a）。これは、設楽町産の 79.6%に値する（緒方, 1996a）。その後の調査で新たに 35 種が見つかり、2019 年現在 292 種となる（緒方, 未発表）。特筆すべき種では、コガネヒメグモ・シロタマヒメグモ・キヌキリグモ・キハダキヌキリグモ・アズミヤセサラグモ・コケオニグモ・エゾウズグモなどなど枚挙にいとまがない。旧稲武町も環境面では設楽町とよく似ている。ここでは 34 科 254 種が確認された（緒方, 1996b）。東三河地方の新城市も 2005 年に新城市・作手村・鳳来町が合併し 499.2 km² となり、豊田市に次ぐ面積となった。新城市全体では 41 科 331 種が記録された（緒方, 2014a）。なかでも作手地区の水田地帯には北方系のアゴブトグモが、湿地にはババハシリグモが生息する。北東部は山林が占めている。特に鳳来寺山はクモの宝庫で、32 科 249 種が記録された（緒方, 2019b）。

県内でも特定の場所にのみ生息する種としては、豊田市稲武地区面ノ木園地のミヤマタンボグモ、同町月ヶ平のミヤマシボグモモドキ、設楽町段戸裏谷のマルコブオニグモ・ササキグモ・セスジガケジグモ・コガネエビグモなどが挙げられる。ミカワホラヒメグモ（*Nesticus mikawanus* Yaginuma）は豊橋市嵩山町の蛇穴群に生息する。オガタヒメアシナガグモ（*Sinopoda ogatai* Jäger et Ono）は新城市門谷の鳳来寺山に生息する。この 2 種は国内でも唯一の産地である。

○ 丘陵地のクモ

尾張地方の東部は丘陵地が広がる。代表的なクモを列举すると、カネコッタテグモ・キノボリト

タテグモ・ユウレイグモ・ニホンヒメグモ・ユノハマサラグモ・ジョロウグモ・アオオニグモ・ビジョオニグモ・チュウガタコガネグモ・コガタコガネグモ・ヤマシロオニグモ・ワキグロサツマノミダマシ・サツマノミダマシ・マネキグモ・オウギグモ・イタチグモ・コハナグモ・アズチグモ・ネコグモ・マミジロハエトリ・デーニッツハエトリなどが挙げられる。名古屋市で記録されたクモ類は 42 科 299 種である（須賀，2008）。その後 2019 年現在 44 科 351 種となる（緒方未発表）。なかでも 2012 年 7 月に熱田神宮で発見されたチビクロドヨウグモは県内で唯一の生息地である（須賀・緒方・柴田，2013）。また、希少なクモでは 2008 年 7 月に千種区平和公園と 2018 年 1 月に緑区大高城跡公園でムツトゲイセキグモが、2014 年 7 月に名古屋市興正寺でトゲグモが発見された。日進市も北東部は丘陵地が広がる。本市で記録されたクモ類は 37 科 272 種である（緒方，2015）。なかでも 2011 年 7 月に五色園で発見されたモリメキリグモは県初記録となった。また、尾張地方初記録として 2010 年 7 月に五色園でマメイタイセキグモが発見された。丘陵地間には湿地も点在する。このような特異な環境には、シロブチサラグモ・ヤマトコツブグモ・ミナミコモリグモ・イオウイロハシリグモ・ササグモ・クリチャササグモなどが生息する。なかでもスジブトハシリグモとテジロハリゲコモリグモは湿地の依存度が高く、湿地が消滅すると激減する運命にある。

○ 平野部のクモ

西三河地方の平野部のほとんどが市街化している。僅かに残った水田も圃場整備が進み、冬期は乾田化して生物が住みにくい環境になっている。そのため、生息するクモ類の数も種数も年々少なくなっている。特に、水田のクモを代表するシコクアシナガグモ・ヒメヨツボシアシナガグモ・コテングヌカグモ・キバラコモリグモなどは減少傾向にある。市街化周辺に生息するワスレナグモ・ジグモなど地中性のクモの減少は著しい。

知立市は県のほぼ中央に位置し、総面積は 16.31km² で高浜市に次いで小さい。河川や農耕地は見られるが、中心部は市街地で周囲に社寺林が点在する。この社寺林（鎮守の森）が貴重な緑となっており、平野部ではあるが 1900～2018 年の間に 35 科 221 種を確認している（緒方，2018b）。平野部のクモ相としてひとつのモデルになると思われる。比較的に見られるクモとしては、イエユウレイグモ・ユカタヤマシログモ・オオヒメグモ・ハンゲツオスナキグモ・セスジアカムネグモ・オニグモ・イエオニグモ・アシナガグモ・トガリアシナガグモ・ヒラタグモ・チリグモ・イオウイロハシリグモ・ヒメフクログモ・アシダカグモ・ネコグモ・ヤミイロカニグモ・アサヒエビグモ・マミジロハエトリ・キレワハエトリ・ヤガタアリグモなどが挙げられる。

セアカゴケグモは特定外来生物に指定されている。県内では 2005 年 8 月 19 日に常滑市中部国際空港で発見された。その後、分布は急速に拡大し、知多半島だけではなく、名古屋市・岡崎市・豊田市・西尾市・豊橋市など、山間部を除き平野部に広く生息している（緒方，2014b）。本種の生息環境は U 字溝の中、公園ベンチや遊具の隙間、ガードレールや鉄パイプの隙間などの人工物である。外来種のクロガケジグモもマダラヒメグモも同じ環境に棲んでいる。このようなニッチには在来種はほとんど見られない。今後も分布は拡大すると予測される。

○ 海岸・河口付近のクモ

海岸またはその付近のみを好んで生息するクモ類がいる。ヘリジロオニグモは渥美半島の防風林に多数生息する。同じく海浜植物が自生する砂浜にはアシブトヒメグモ・ヒカリアシナガグモ・ヨコフカニグモ・タカノハエトリなどが見られる。最近新種となったスナハマハエトリも渥美半島の表浜に生息する（小野・緒方，2018）。田原市一色海岸の岩山にのみイソタナグモが生息し、また西尾市梶島の崖地にはシマミヤグモが発見された（緒方，2016b）。三河湾の海岸線に沿って、堤防や消

波ブロックにはイソハエトリが飛び跳ねている。その他では、南方系のホシスジオニグモは田原市と西尾市梶島で確認されたが生息範囲は限られる。また、田原市小中山町の西ノ浜では県初記録のサッポロフクログモとアカスジコマチグモが相次いで発見された（緒方, 2019a）。カコウコモリグモは塩性湿地の葦原に生息する。名古屋市港区庄内川河口、豊橋市紙田川河口、田原市汐川河口の 3 ケ所で確認されている。

② 愛知県における絶滅危惧種の概況

今回愛知県として、絶滅危惧種のリストに取り上げられたクモ類は、絶滅危惧ⅠA類（CR）3 種、絶滅危惧ⅠB類（EN）17 種、絶滅危惧Ⅱ類（VU）10 種、準絶滅危惧（NT）8 種、それに情報不足（DD）1 種である。愛知県のクモ類は 590 種（2019 現在）であるから、CR・EN・VU・NT・DD の合計 39 種は全体の約 6.6%にあたる。

「その他無脊椎動物レッドリスト 2019」（環境省, 2019）によると、CR+EN 1 種、VU 4 種とキムラグモ類、NT 5 種、DD 5 種、計 15 種とキムラグモ類が公表されている。日本産のキムラグモ類（広義）とオキナワキムラグモ類（広義）を合わせると現在 14 種（谷川, 2017）であるから、リストの合計は 29 種となる。ここに取り上げられた 29 種は、日本産クモ類（約 1,665 種）の約 1.7%にあたる。この数値は今回取り上げられた愛知県の数値に比べると極端に少ない。現実には、全国的に見て危機に瀕しているクモ類は、この 29 種以外にまだまだ数多くあるので、愛知県の 6.6%は妥当な数値だと考える。

取り上げられた種の主な減少の原因を考察すると、工事・土地開発・農薬・除草剤・殺虫剤などの影響によるものと思われる種が多い。キシノウエトタテグモ・キノボリトタテグモ・ワスレナグモ・コガネグモ・トリノフンダマシ類・イサゴコモリグモ・オビジガバチグモ・アワセグモ・アシナガカニグモなどである。

次に、全国的にも、県内でも比較的広く分布する割にもともと個体数が少ない種である。これらの種は、微妙な環境の変化で生息しなくなってしまうことが多い。言い換えれば、一見同じような環境と思われるところでも生息しているとは限らないのである。シロタマヒメグモ・キヌキリグモ・キノボリキヌキリグモ・キジロオヒキグモ・コケオニグモ・ニシキオニグモ・トゲグモ・ムツトゲイセキグモ・マメイタイセキグモ・ワクドツキジグモなどがその例である。

最後に、その種が住んでいる特殊な環境の悪化、または開発である。洞窟内またはそれに似た環境に棲むミカワホラヒメグモ・アケボノユウレイグモの減少はこの例である。特に、アケボノユウレイグモは、生息場所の乾燥化によって、絶滅に近い個体数にまで減少している。また、湿地の悪化や開発（宅地化等）に伴い、このような場所に生息するテジロハリゲコモリグモ・ミナミコモリグモなども減少傾向にある。そのほか、特殊な溪谷の開発・環境悪化に伴い、チクニドヨウグモ・シノビグモなども減少している。

なお、ムロズミソレグモ（スオウグモ科）は現在まで大阪府・京都府・奈良県・兵庫県・島根県・山口県・愛媛県で採集されている珍種であり、愛知県でも 1977 年、名古屋市天白区で採集されている。しかし、その後の記録は全くなく、生態的にも不明の点が多いので情報不足にランクされた。

③ 愛知県クモ類レッドリスト

目及び科の配列と名称、種の配列及び和名、学名は、原則として「グリーンデータブックあいち 2018 クモ編」を基に、新しい知見を加え整理した。

絶滅(EX)

(該当種なし)

絶滅危惧ⅠA類(CR)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	クモ	ホラヒメグモ	ミカワホラヒメグモ	<i>Nesticus mikawanus</i> Yaginuma	
2	クモ	キシダグモ	ババハシリグモ	<i>Dolomedes fontus</i> Tanikawa et Miyashita	
3	クモ	ツチフクログモ	ミヤマシボグモモドキ	<i>Zora nemoralis</i> (Blackwall)	

絶滅危惧ⅠB類(EN)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	クモ	ユウレイグモ	アケボノユウレイグモ	<i>Belisana akebona</i> (Komatsu)	
2	クモ	ヒメグモ	シロタマヒメグモ	<i>Enoplognatha margarita</i> Yaginuma	
3	クモ	コガネグモ	キジロオヒキグモ	<i>Arachnura logio</i> Yaginuma	
4	クモ	コガネグモ	コケオニグモ	<i>Araneus seminiger</i> (L.Koch)	
5	クモ	コガネグモ	マメイタイセキグモ	<i>Ordgarius hobsoni</i> (O. P.-Cambridge)	
6	クモ	コガネグモ	ムツトゲイセキグモ	<i>Ordgarius sexspinosus</i> (Thorell)	
7	クモ	コガネグモ	ワクドツキジグモ	<i>Pasilobus hupingensis</i> Yin, Bao et Kim	
8	クモ	アシナガグモ	チクノドヨウグモ	<i>Metleucauge chikunii</i> Tanikawa	
9	クモ	サラグモ	キヌキリグモ	<i>Herbiphantes cericeus</i> (S. Saito)	
10	クモ	サラグモ	キノボリキヌキリグモ	<i>Herbiphantes longiventris</i> Tanasevitch	
11	クモ	サシアシグモ	シノビグモ	<i>Shinobius orientalis</i> (Yaginuma)	
12	クモ	コモリグモ	エビチャコモリグモ	<i>Arctosa ebicha</i> Yaginuma	
13	クモ	コモリグモ	シッチコモリグモ	<i>Hygrolycosa umidicola</i> Tanaka	
14	クモ	コモリグモ	イサゴコモリグモ	<i>Pardosa isago</i> Tanaka	
15	クモ	コモリグモ	テジロハリゲコモリグモ	<i>Pardosa yamanoi</i> Tanaka et Suwa	
16	クモ	カニグモ	カトウツケオグモ	<i>Phrynarachne katoi</i> Tikuni	
17	クモ	アワセグモ	アワセグモ	<i>Selenops bursarius</i> Karsch	

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	クモ	ジグモ	ワスレナグモ	<i>Calommata signata</i> Karsch	NT
2	クモ	カネコタテグモ	カネコタテグモ	<i>Antrodiaetus roretzi</i> (L. Koch)	NT
3	クモ	トタテグモ	キノボリトタテグモ	<i>Conothele fragaria</i> (Dönitz)	NT
4	クモ	トタテグモ	キシノウエトタテグモ	<i>Latouchia typica</i> (Kishida)	NT
5	クモ	コガネグモ	ニシキオニグモ	<i>Araneus variegatus</i> Yaginuma	
6	クモ	コガネグモ	トゲグモ	<i>Gasteracantha kuhli</i> C. L. Koch	
7	クモ	コガネグモ	ツシマトリノフンダマン	<i>Paraplectana tsushimensis</i> Yamaguchi	
8	クモ	コモリグモ	カコウコモリグモ	<i>Pardosa nojimai</i> Tanaka	
9	クモ	カニグモ	アシナガカニグモ	<i>Heriaeus mellottei</i> Simon	
10	クモ	カニグモ	オビボソカニグモ	<i>Xysticus trizonatus</i> Ono	

準絶滅危惧(NT)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	クモ	コガネグモ	コガネグモ	<i>Argiope amoena</i> L. Koch	
2	クモ	コガネグモ	オオトリノフンダマン	<i>Cyrtarachne akirai</i> Tanikawa	
3	クモ	コガネグモ	トリノフンダマン	<i>Cyrtarachne bufo</i> (Bösenberg et Strand)	
4	クモ	コガネグモ	シロオビトリノフンダマン	<i>Cyrtarachne nagasakiensis</i> Strand	
5	クモ	コガネグモ	アカイロトリノフンダマン	<i>Cyrtarachne yunoharuensis</i> Strand	
6	クモ	コガネグモ	ゲホウグモ	<i>Poltys illepidus</i> C. L. Koch	
7	クモ	コモリグモ	ミナミコモリグモ	<i>Piratula meridionalis</i> (Tanaka)	
8	クモ	ハチグモ	オビジガバチグモ	<i>Castianeira shaxianensis</i> Gong	

情報不足(DD)

No.	目名	科名	和名	学名	国ランク
1	クモ	スオウグモ	ムロズミノレグモ	<i>Takeoa nishimurai</i> (Yaginuma)	

④ 愛知県クモ類レッドリストの変更点

本書に掲載したクモ類レッドリスト（見直し後）と「レッドリストあいち 2015」に掲載したクモ類レッドリスト（見直し前）の新旧対照表を以下に示した。

見直し前のランク										種数
	EX	CR	EN	VU	NT	DD	LP	国リスト*1	リスト外・未評価*2	
見直し後の ランク	EX									0
	CR	ミカワホラヒメグモ ハバハシリグモ ミヤマシボグモモドキ								3
	EN		アケボノユウレイグモ シロタマヒメグモ キジロオヒキグモ コケオニグモ マメタイセキグモ ムツタゲイセキグモ ワグトツキジグモ チケンドコウグモ キヌキリグモ キノボリキヌキリグモ シノビグモ ニビチヤコモリグモ シツチコモリグモ イサゴコモリグモ テジロハリガコモリグモ カトウツケオグモ	アワセグモ						17
	VU		ツシマトリノフンダマシ	ウスレナグモ カネコトタテグモ キノボリトタテグモ キシノウエトタテグモ ニシキオニグモ トゲグモ カコウコモリグモ アシナガカニグモ オビボソカニグモ						10
	NT			ミナミコモリグモ オビシガバチグモ	コガネグモ オオトリノフンダマシ トリノフンダマシ シロオビトリノフンダマシ アカイロトリノフンダマシ ガホウグモ					8
	DD					ムロズミソレグモ				1
	LP									0
国リスト *1										0
ランク外 *3										0
種数	0	3	17	12	6	1	0	0	0	39

*1「国リスト」：環境省レッドリストに記載されているが、愛知県においてEX、CR、EN、VU、NT、DD、LPのいずれのランクにも該当しないと評価された種。

*2「未評価」：「レッドリストあいち2015」において評価対象とされなかった種。

*3「ランク外」：「レッドリストあいち2015」掲載種のうち、今回の見直しにおいてEX、CR、EN、VU、NT、DD、LP、国リストのいずれのランクにも該当しないと評価された種。

(9) 貝 類

① 愛知県における貝類の概況

○ 陸産貝類

愛知県の陸域環境は、平野、丘陵、山地の3つの地形区分に大別され(庄子, 1978)、それぞれの環境に陸産貝類の分布種の特徴が現れる。

平野部の環境については、濃尾平野東端の大都市である名古屋市を中心に各都市が発展し、地表の殆どはアスファルトで舗装され、コンクリートの構造物やビル、住宅が林立して、本来の形の自然林や湿地などの環境は大部分が消失している。この地域では、国外外来種とされるトクサオカチョウジ、コハクガイ、ヒメコハクガイ、チャコウラナメクジ、オナジマイマイが繁殖し、ごく普通に確認される代表的な陸産貝類となっている。さらに2009年、名古屋港周辺の貿易港の一部地域では、海外からの輸入原材料に付随して侵入したと考えられる国外外来種のメリケンスナガイの一時的定着が確認された。また、沖縄県の各島で大繁殖する原産地不明のコシタカオカモノアラガイも、金城埠頭において、2009年に、空き地の荒れ地であった場所で大繁殖していた例もある。このほかにも名古屋港周辺の埋め立て造成地およびその周辺の広範囲の緑地帯や草地には、現在も外来個体群の可能性が考えられるミジンマイマイの個体数が著しい(早瀬・木村, 2011)。このように濃尾平野における陸産貝類相は、都市化や開発などに伴い外来種が優占し、攪乱が著しい。ただし、在来種(在来個体群であるかは不明)であるオカチョウジガイやナミコギセル、イセノナミマイマイも、様々な環境への適応力が強いいためか、この地域に少なくない。また、西三河平野や東三河平野は、濃尾平野ほど都市化の進行速度は速くないが、それでもこれらの地域の河川や水田、湿地、河畔林などの林の環境は徐々に消失や衰退の傾向にあり、在来の淡水産二枚貝を筆頭に、湿地棲の陸産貝類はナタネキバサナギやナガオカモノアラガイなどの僅かな種に限られるものの、減少傾向にある。

丘陵の環境については、瀬戸市付近から豊田市付近にかけて南北に連なる尾張丘陵から、その延長と考えられる知多半島先端へと丘陵地が延びるが、そこにはそれほど多種の陸産貝類は見られない。しかし、ナニワクチミゾガイ、ヒルゲンドルフマイマイ、クチマガリマイマイなど、愛知県では山地の原生林や森林環境には生息しない特徴的な陸産貝類が、狭い分布範囲ながらこれら丘陵地において確認されている。また、渥美半島も東西に細長く延びる丘陵であるが、フチマルオオベソマイマイは愛知県下においては紀伊半島との共通種のひとつであり、渥美半島のみ分布し、この地域を特徴付ける陸産貝類である。

山地については、陸産貝類が多種多産する環境である。愛知県最北部の犬山市から瀬戸市にかけての尾張山地は、過去に、天野景従の調査(天野, 1966)においては、瀬戸市定光寺周辺に多種の陸産貝類の生息が確認されていた。現在も微小種が多種確認されるものの、小～大形種に関しては既に再確認出来ない種が複数あり、その一例として、ヤマタカマイマイは既に絶滅した可能性が高く、ミヤマヒダリマキマイマイもこの地域では近年再確認出来ず、同様に絶滅の可能性がある。濃尾平野を中心とする都市開発の影響が尾張山地の環境にも一部及んだためかもしれない。一方、岐阜県境部のほかに、長野県・静岡県との県境となる奥三河地域を含む三河山地は、愛知県下で最も広大な山地であり、県境部に原生林も一部残存し、現在も陸産貝類が多種生息している環境である。三河山地を代表する種は多く、ここで全てを示すことは難しいが、ヤマキサゴ、オクガタギセル、トノサマガセル、ホソヤカギセル、スジキビ、カントウベッコウ、スカシベッコウ、ニヨリサンエンマイマイ、ミヤマヒダリマキマイマイなどが代表種としてあげられる。さらに、鳳来寺山の山頂部には、当地をタイプ産地とし、愛知県ではここだけに生息するハウライジギセルも確認される。当該山地には、クチベニマイマイとの中間の特徴を有するハコネマイマイの分布もあり興味深い。このほかに、八名・弓張(やな・ゆみはり)山地は、三河山地の南東側に位置し、JR飯田線に沿う谷を通る中央構造線の南東側の標高500～600mの南北方向に細長い山地である。山地南側には、石巻山や嵩山(すせ)の石灰岩地が位置しており、愛知県(石巻山)固有種と考えられるクビナガギセル、オモイガケナマイマイ、イシマキシロマイマイが生息する。このほかにも、ベニゴマオカタニシやミカワマイマイが隣県の静岡県の石灰岩地域にかけて分布するが、前者は愛知県下では、石巻山・嵩山石灰岩地のみに生息する。トウカイヤマトガイやハチノコギセルも静岡県などにかけて広く分布するが、4種(亜種を含む)共に豊橋市の石巻山あるいは嵩山の石灰岩地をタイプ産地とし

て新種記載された種であり、石巻山や嵩山の各種個体群は、その存在自体が分類学的にもきわめて貴重であるので、当該石灰岩地域の各種個体群の保護は重要である。さらに嵩山に位置する石灰洞の蛇穴には、洞窟ごとに種分化しているとされるホラアナゴマオカチグサ近似種が生息している。

これら 3 つの地形区分での陸産貝類の特徴種のほかに、三河湾の島嶼域や伊良湖岬先端には、南方から黒潮による海流拡散と考えられる陸産貝類の存在も知られている。トカラコギセル、ヒロクチコギセル、ヒラシタラの 3 種が該当し、いずれも愛知県下では伊良湖岬先端部の海岸林に分布が知られるが、ヒラシタラを除く 2 種は、この地の個体群が絶滅した可能性が高く、トカラコギセルについては、現在、三河湾内の竹島と沖島の 2 島のみにごく僅かな個体の生息が確認されている（大貫・他, 2015；早瀬・他, 2017）。

愛知県の陸産貝類相は、上述した陸域の多様な地形のほかにも、太平洋に面した三河湾内の島嶼域や半島先端の地域では、海流（黒潮）の影響も及ぶため、陸産貝類の豊富な他県と比べても見劣りしないほど多様である。しかし、現状は、いくつかの種がきわめて高いレベルでの絶滅の危機に瀕しており、今後、急速に絶滅や絶滅危惧の種数が増大することのないように、引き続き、レッドデータブックでの各種の情報の発信による県民などへの各種および環境保護の啓発、行政側の保護施策の検討が重要と思われる。

名古屋市などの開発の進んだ都市環境が、県の面積の多くを占めるにもかかわらず、これほど多種の陸産貝類が生息することは驚くべきことであり、県東部の三河山を代表とする多くの自然林が残る山地や、伊勢湾・三河湾の内湾から外洋に至る海域、木曽川・庄内川・矢作川・豊川など大きな河川を含む豊かで多種多様な自然環境の複合的存在の賜物と考えられる。国内の他の大都市と同様に、1960～1970 年頃の高度経済成長期に一度、愛知県内でも多くの自然環境や生物種が消滅したが、さらに今後の開発や気候変動などにより、世界中を探しても愛知県のここだけにしか見られない貴重な陸産貝類の存在やそれらが生息する自然環境が消失することのないように、環境への配慮や検討がこれからも求め続けられるであろう。

○ 淡水産貝類

愛知県は木曽川水系、矢作川水系、豊川水系と豊かな水源を持つ水系に恵まれ、平野部にはその支流や灌漑水路、ため池が発達し、淡水産貝類の生息にとって好適な地域であった。また、愛知県は豊かな淡水貝類相を持つ琵琶湖水系との関わりのある東限の地域として、元々多種類の淡水産貝類が生息していた。しかし、豊かな淡水貝類相が保存されていたのは 1960 年代までであった。1970 年以降、平野部の水系は各種排水によって富栄養化し、水質汚濁が進行するに伴って県内の淡水貝類の生息状況は著しく悪化した。また、河川改修工事によって生息場所自体が消失した水系も多い。現在の淡水貝類相は限られた範囲にしろうじて生き残った小規模な個体群が確認される場合が多く、絶滅したと考えられる淡水産貝類も少なくない。

河川上流域には元々淡水産貝類は少なく、本県ではカワニナ科のカワニナ 1 種が知られる。中流域から下流域にはチリメンカワニナ、クロダカワニナが分布する。下流域や平野部の水路や支流、細流の流れが緩やかな砂泥底にはイシガイ科貝類が多く分布し、オバエボシガイ、カタハガイ、ササノハガイ（トンガリササノハガイ）は愛知県が分布の東限であった。しかし、前述の通りこのような生息環境は県内では壊滅的状况で、イシガイ科貝類全般の生息状況が著しく悪化しており、絶滅したと考えられる種も少なくない。

平野部から丘陵にかけての水質の良いため池には現在でもオオタニシ、ドブガイが生息している。平野部の水田に多産し食用にも利用されていたマルタニシは、水田耕作の変化や前述のような生息環境の悪化で現在の生息場所は非常に狭い。現在平野部で普通に見られる淡水産貝類としては、富栄養化した河川や護岸工事された水路にも多産するヒメタニシ、ヒメモノアラガイ（移入種）、サカマキガイ（移入種）、スクミリンゴガイ（通称ジャンボタニシ：移入種）、河口付近まで分布するイシマキガイがあげられる。

○ 内湾産貝類（海産貝類）

県内の内湾域は大きく三河湾と伊勢湾に分けられるが、そのいずれも人間活動の中心となる平野部に近接しているため、埋め立てや各種汚水の流入の影響を受けている。1977 年までで既に、三河湾で 48.0%、伊勢湾で 60.8%の干潟が消失している（水産庁・水産資源保護協会, 1988）。

・ヨシ原湿地の貝類

ヨシ原湿地は干潟や前浜干潟の潮間帯中部から高潮線付近に発達する塩性湿地で、海と陸との境界に位置する。ヨシを主体とした特徴的な海岸植物群集が分布する特殊な環境である。そこに生息する貝類もまた独特であり、カワザンショウガイ科やオカミミガイ科など他の環境ではほとんど見られない多くの種が生息している。高潮線から更に上部の陸上植生まで一連のヨシ原湿地がよく保存された場所は、県内では汐川河口域（汐川干潟）1カ所だけである。潮間帯中部から高潮線付近まで保存されているヨシ原湿地の面積も著しく減少しており、ヨシ原湿地という生息場所自体が県内から消失するおそれがある。従って、現在も残っているヨシ原湿地内には比較的多くの個体が生息する種も、今後の生息については予断を許せない状況である。

・干潟の貝類

前述のように広大な面積の干潟が消失したことにより、生息場所そのものが減少したのはいうまでもなく、水質汚濁や貧酸素層の発生、底質のヘドロ化などで干潟の貝類相が著しく単純化している。減少した貝類は枚挙にいとまがないので、現在干潟に普通に見られる貝類を列挙する。人工護岸や転石地にも多い種としてイシマキガイ、タマキビ、カワザンショウガイ、イボニシ、コウロエンカワヒバリガイ（移入種）、ムラサキガイ（移入種）、ミドリイガイ（移入種）、マガキ。他の貝類や小石などに付着するシマメノウフネガイ（移入種）、干潟の表面付近に多いツメタガイ、アラムシロ、ホトトギスガイ（足糸でつながりマット状のコロニーを形成する）、砂泥底に潜って生息するサルボオ、シオフキ、バカガイ、カガミガイ、アサリ。以上のように移入種を含む少数の種が優占していて、その他の種の個体数は著しく少なく、貝類相は単純化し、多様性が失われた。

2005 年前後から三河湾奥の干潟でハマグリが生貝が見つかるようになり、底質環境が一時的に改善された人工干潟や潮通しの良い内湾域では貝類多様性が明らかに高くなり、現在でもその回復傾向は継続している。その状況を端的に表すのが潮干狩りの対象貝類で、三河湾、伊勢湾（伊勢湾では三重県側を含めて）では広い範囲でハマグリとマテガイが対象となるまでに回復した。また、干潟としては典型的な砂泥質の底質だけでなく、三河湾の旧幡豆町（早瀬・他, 2011）、河和（早瀬・木村, 2017）の干潟に隣接する転石地、礫の多い砂泥底でも高い貝類多様性が確認された。また、前島（早瀬・他, 2015b）、沖島（早瀬・他, 2015a）、梶島（早瀬・他, 2016）、佐久島（早瀬・木村, 2020）、日間賀島（早瀬・他, 2019）の三河湾島嶼域の一連の調査により貝類多様性が高い地点が確認された。日間賀島の貝類相は木村（1995, 1996）による約 25 年前の調査結果との比較が出来たが、スジウネリチョウジガイ、シラギク、アラウズマキ、トウガタガイ科・ウロコガイ科貝類に代表される潮間帯の埋没石や転石下に生息する小形～微小種の回復状況が確認された（早瀬・他, 2019）。

・潮下帯の貝類

干潟の消失は潮下帯にも大きな悪影響を及ぼし、水質汚濁、貧酸素層の発生、底質のヘドロ化に拍車をかけている。三河湾奥の水深 5 m より深い潮下帯部分では、夏季にはほとんど無酸素状態になり、底生生物が全く生息不可能な範囲も狭くない。アマモ場も著しくその範囲を縮小し、アマモ場に特有な貝類もその生息が危機的状況である。現在、三河湾中部から奥部の潮下帯で普通に見られる貝類は、ツメタガイ、シマメノウフネガイ（移入種）、アラムシロ、アカニシ、サルボオ、ムラサキガイ（移入種）、ミドリイガイ（移入種）、ホトトギスガイ、トリガイ、シズクガイ、バカガイ、チョノハナガイ、カガミガイと移入種を含む少数の種が優占していて、その他の種の個体数は著しく少なく、貝類相は単純化し、多様性が失われている。三河湾湾口部分から知多半島南部の伊勢湾側では伊良湖水道を経て南から流入する外洋水の影響で貝類相の豊かな海域も残されているが、その範囲は非常に狭い。この海域は希少な貝類が多数生息していたので、1999 年と 2000 年にドレッジによって重点的に貝類相調査を行った（木村, 2000）。その後 2006 年 10 月、2007 年 8 月にも同海域で詳細なドレッジ調査を行った。1999 年、2000 年と比較して、2006 年、2007 年では明らかに底質に有機質が多くなり、広範囲に大量のホトトギスガイが足糸でマットを形成して生息することが確認された。1999 年と 2000 年の調査では確認されていたヒラドサンゴヤドリは死殻も確認できず、イトカケガイ科貝類の確認種数も著しく減少するなど貝類の多様性は低下した。このような傾向は 2015 年の調査でも確認され、前述した潮間帯の貝類多様性の回復状況と比べて、依然として危機的状況が継続している。三河湾に流入する豊川、矢作川の窒素及びリンの供給量は昭和 55 年を

ピークとし、その後は浄化対策、排出規制等により減少している（岸田，2008）。三河湾全体を考えると流入負荷は減少したものの、干潟、藻場の面積は減少したままで、浄化機能が低下し新生堆積物も増加している（岸田，2008）。外洋水の影響が強いまたは潮通しが良い浅海部には水質並びに底質環境が明らかに改善している海域が認められるが、その改善が潮下帯にまで及んでいない可能性が高い。その反面、外洋水の影響を強く受ける内湾環境の伊良湖漁港（木村，2017）、知多半島内海（佐藤・他，2019）周辺ではオウウヨウラクの個体群の復活、イソチドリの生貝採集など潮下帯（潮間帯直下のごく浅い潮下帯）の貝類多様性の回復状況が確認されている。いずれにしても、今後も継続して潮下帯に生息する貝類の詳細な調査を行うことが望まれる。

② 愛知県における絶滅危惧種の概況

○ 陸産貝類

今回、愛知県で絶滅のおそれがあると認められた陸産貝類は、絶滅（EX）0種、絶滅危惧ⅠA類（CR）6種、絶滅危惧ⅠB類（EN）5種、絶滅危惧Ⅱ類（VU）17種、準絶滅危惧（NT）25種、情報不足（DD）4種の合計53種（NTを含みDDを含まない）であった。「レッドデータブックあいち 2009」の時点では、絶滅（EX）0種、絶滅危惧ⅠA類（CR）3種、絶滅危惧ⅠB類（EN）2種、絶滅危惧Ⅱ類（VU）5種、準絶滅危惧（NT）14種、情報不足（DD）1種の合計24種（NTを含みDDを含まない）であった。2009年版と比較して今回は、絶滅種を除くいずれのランクも2～3倍ほどに種数が増加し、情報不足種も3種増加した。合計種数もほぼ2倍となった。愛知県下において、この10年ほどの間に、生息環境の悪化や分布地・生息個体数の減少が考えられる陸産貝類の種数が増加したことは明らかである。これらの絶滅危惧種の中には、過去の愛知県での生息記録のなかった種も含まれるが、これらは近年の分類学の進展や、この10年ほどの間に行われた県内での緻密な分布調査の実施に起因する。これまでは分布域がきわめて狭く確認されていなかった種が近年の調査により発見された場合や、ある種に内包されていた隠蔽種が識別されるようになった場合もある。このような、研究の発展や調査の進展に伴う、分布域が狭く生息基盤も脆弱な稀産種の発見も、今回の改訂では、絶滅危惧種の種数増加を後押しした。他にも、近年の温暖化に起因する激しい気候変動により、森林や、石灰岩地などの特殊な環境においても、豪雨に伴う土壌流出、夏季の異常高温による林床の乾燥化などが生じており、これらの最近の自然環境の悪化も絶滅危惧種を増加させた要因である。

CRの6種のうち、ヒロクチコギセルとヤマタカマイマイの2種は、愛知県下で近年の生息情報はなく、ほぼ、絶滅したと言っても過言でない状況にある。トカラコギセルも、現在のごく僅かな個体数が確認される程度であり、きわめて厳しい生息状況下に置かれている。ハウライジギセルとミカワマイマイも貝類コレクターの収集対象となるため、減少傾向が著しい。愛知県で唯一捕獲規制が設けられた陸産貝類のオモイガケナマイマイも、特異な形態のため捕獲規制以前の採集圧が高く、近年の異常気象の影響も伴い、生貝を確認することが困難なほど個体数が減少している。

ENの5種のうちの4種は、近年の分類研究の進展および近年の調査実施により発見されたばかりであるが、生息状況の不安定さにより、今回のレッドデータブックでの新規掲載種となった。ホラアナゴマオカチグサ近似種は、既に2009年版では日本国内に広域分布するホラアナゴマオカチグサとしてNTランクに掲載されていたが、近年の研究結果では、地域ごとの固有性が高いグループであることが示され、愛知県下の個体群は、より絶滅の危険度の高い種に再評価された。サンエンマイマイについても、長い間、シメクチマイマイの一形態型とされていたが、狭い地域の固有種であることが明らかとなり、再検討された結果である。

VUの17種のうち、9種は今回の新規掲載種であり、トウカイヤマトガイ、トノサマガセル、イシマキシロマイマイの3種は、2009年版ではNTランクに掲載されていたが、個体数の減少傾向が大きいため、さらに1つランクを上げる必要があると判断された結果である。ベニゴマオカタニシ、ナニワクチミゾガイ、クビナガギセル、ホソヒメギセル、ミヤマヒダリマキマイマイの5種は、2009年版でも同ランクであり、現時点では個体数の大きな減少傾向や分布域の著しい減少が認められないため、ランクを保留した。

NTの25種のうち、15種は今回の新規掲載種である。ゴマオカタニシ、ナガオカモノアラガイ、

オクガタギセル、ハチノコギセル、ミカワギセル、カサネシタラ、クチマガリマイマイ、フチマルオオベソマイマイ、ヒルゲンドルフマイマイの 9 種は、2009 年版でも同ランクであり、現時点では大きな減少傾向などが認められないため、ランクを保留した。2009 年版では情報不足の DD であったヒラドマルナタネは、生息地が限られているほか、生息場所となる蘚類や地衣類の付着する落葉樹の古木の存在も限られることが明確になったため、絶滅の危険性を考慮すべき種に該当するとして、今回はランクを示した。

DD の 4 種のうち、サドヤマトガイおよび 2009 年版で NT であったケシガイは、愛知県産の本種として記録された標本が存在しないことが今回の改訂に伴い判明した。奥三河山地の未調査地域がまだあることから、現時点では誤認記録の断定はせず、情報不足とした。今回の新規掲載種であるピルスブリムシオイガイとフトキセルガイモドキの 2 種は、いずれも僅かな愛知県産標本が確認されてはいるが、近似種との識別が難しい上に愛知県での稀産種であり、現時点ではまだ種としての十分な検討ができておらず、分布や生息状況の情報も十分ではないと判断し、情報不足とした。

○ 淡水産貝類

今回愛知県で絶滅のおそれがあると認められた淡水産貝類は、絶滅 (EX) 5 種、絶滅危惧 I A 類 (CR) 4 種、絶滅危惧 I B 類 (EN) 0 種、絶滅危惧 II 類 (VU) 2 種、準絶滅危惧 (NT) 5 種、情報不足 (DD) 5 種の合計 16 種 (NT を含み DD を含まない) で、愛知県で生息記録がある淡水産貝類の在来種 30 種のうち約 53 % に相当し、きわめて多くの種が危険な状況にあると判断された。今回レッドリストに掲載された 16 種のうちイシガイ、ドブガイを除く 14 種は、環境省のレッドリストに掲載されている。

前項の概況で述べたとおり愛知県内の淡水産貝類の生息状況は極めて深刻で、特に河川下流域や平野部の水路、支流を生息場所とする貝類は危機的生息状況である。今回カワネジガイ、ヒダリマキモノアラガイ、ヨコハマシジラガイ、オバエボシガイ、カタハガイの 5 種が愛知県内では絶滅したと判断された。生息していることを確認するのに比べて、生息していないことを証明することは非常に難しいが、以下の理由から上述の 5 種が絶滅 (EX) と評価された。

カワネジガイとヒダリマキモノアラガイは、愛知県の河川下流域の環境がまだ健全な時代から生息場所の限られた珍しい種と認識されていた。1970 年代よりこれら 2 種の記録された場所を再調査した例があるが、50 年以上本県からの生息記録が無い。また豊橋市蒲池のように、生息地自体が埋め立てで消失した場合も多い。2 種とも小型種で元々個体数が少ないので、見落とされている可能性が全くないわけではないが、現在の河川下流域の現状を考えると県内より絶滅したと判断するのが妥当である。

ヨコハマシジラガイ、オバエボシガイ、カタハガイは、3 種ともイシガイ科貝類で河川下流域の支流や水路などの水質のよい流れの緩やかな砂底を好む。東海地方全域を見てもこのような生息環境自体が残されていない。また上述の 3 種は 1970 年代以降、愛知県内での採集記録が全くなく、1985 年から東海地方 4 県のイシガイ科貝類の生息状況を詳しく調べた調査でも愛知県内から死殻さえ記録されなかった (木村, 1994; 木村・中西, 1997)。以上のことから、このイシガイ科 3 種について絶滅したと判断された。

CR にはイシガイ、マツカサガイ、ササノハガイ (トンガリササノハガイ) のイシガイ科 3 種とマメタニシの計 4 種が評価された。このうち 2 種は環境省のランクは NT で、マメタニシは VU、イシガイに関してはランク外である。前述した通り、愛知県のイシガイ科貝類の生息状況は全国と比較しても危機的で、木村 (1994) および木村・中西 (1997) の報告や今回のレッドデータブックの現地調査によっても現在県内における生息場所は非常に少ない。また、それぞれの生息地でもかろうじて生き残った小規模な個体群が確認されたにすぎず、環境省より高いランクに評価された。

VU にミズゴマツボとミズコハクガイの 2 種が評価された。ミズゴマツボは 2006 年の調査で木曽川中流域の非常に狭い範囲で健全な個体群が確認された (木村, 2006)。その後の調査でも生息地点は上述の 1 地点しか確認されていない。ミズコハクガイは豊橋市から県下での生息が初めて報告された種 (河辺, 2002) で、その後豊田市の 4 ヶ所で生息が報告された (守谷・河辺, 2013; 川瀬, 2016) 微小種であり、愛知県下では、今後の調査で生息地が新たに発見される可能性も考えられるが、全国的にも生息密度が低く、分布域も狭い稀少種である。

NTに5種が評価された。そのうち2種は環境省のランクと同じである。ドブガイは環境省ではランク外であるが、本種も県下の河川下流域では危機的生息状況であるので、他のイシガイ科貝類と同様にリストに登録された。ただし、ドブガイはため池などの止水域に水質がよければ生息している場合があり、他のイシガイ科貝類より低いランクに評価された。

DDにモノアラガイ、フネドブガイ、カラスガイ、ニホンマメシジミ、マシジミの5種が評価された。カラスガイとニホンマメシジミ以外は今回の改訂で新たにDDと評価された。その理由については【情報不足の種】(721頁)を参照されたい。今回マシジミがVUからDDへ評価が変更されたことは注目されるので、この項でもその理由について触れておく。前回は以下の理由でマシジミはVUに評価されていた。“マシジミは愛知県の平野部の河川、湖沼にごく普通に生息していた種であったが、1990年代にカネツケシジミ（タイワンシジミの黄色型）が愛知県にも移入、定着し、マシジミ分布域の多くで、移入したカネツケシジミと置き換わっていることが確認され、2006年からの調査では、河川下流域、大きな水系とつながった水路等には、カネツケシジミが定着し、マシジミはほとんど見られなくなった。”しかし、近年マシジミとタイワンシジミ（移入種）とを遺伝的に識別することが出来ない。つまり、マシジミと認識されていた種は過去に大陸から日本に移入したタイワンシジミの個体群であるという報告（山田・他, 2019）があり、分類学的な再検討結果が確定してから再評価する必要があると判断されたため、今回DDと評価された。

河川下流域や平野部における淡水貝類の生息状況の指標ともいえるイシガイ科貝類について、愛知県で生息が記録された8種全てが絶滅危惧種または準絶滅危惧種にランクされ、そのうちの3種が絶滅と引き続き評価された。これらの事実は、現在愛知県の河川下流域や平野部の淡水貝類の生息環境悪化がいかに深刻で、危機的状況であるかを示唆している。

○ 内湾産貝類（海産貝類）

今回、愛知県で絶滅のおそれがあると認められた内湾産貝類は、絶滅（EX）7種、絶滅危惧ⅠA類（CR）43種、絶滅危惧ⅠB類（EN）21種、絶滅危惧Ⅱ類（VU）39種、準絶滅危惧（NT）51種、情報不足（DD）36種の合計161種（NTを含みDDを含まない）で、愛知県で生息が予想される内湾産貝類（ヨシ原湿地＋干潟・潮下帯の貝類）の在来種を500種と想定した場合、これらの割合は約32%に相当し、きわめて多くの種が危険な状況にあると判断された。しかし、調査対象の項でも述べたように、今回は河口付近の汽水域から水深20mまでの潮下帯に生息する種まで含めたので、愛知県産の内湾産貝類の正確な生息種数は現段階では把握できていない。また、トウガタガイ科などに代表される生息域が比較的広く、分類が困難な微小種を多く含む分類群についての生息状況の把握は今後の課題である。微小種の生息状況に関する調査がさらに進めば、絶滅危惧種に評価される種数も多くなることは必至である。

調査対象の項でも述べたように、2014年に環境省のレッドデータブックでも従来の陸域に加えて、初めて河口域及び内湾の干潟等に生息する種を対象とした。しかし、環境省のリスト外となっている種でも和田ほか（1996）では絶滅危惧種と評価されている種があるので、それらの種の解説には引用文献としている。本書でも和田ほか（1996）のランク区分については表7に再録しておく。

表7 和田ほか（1996）のランク区分

ランク区分	内 容
絶 滅	野生状態ではどこにも見あたらなくなった種。
絶滅寸前	人為の影響の如何に関わらず、個体数が異常に減少し、放置すればやがて絶滅すると推定される種。
危 険	絶滅に向けて進行していると見なされる種。今すぐ絶滅という危機に瀕するという事はないが、現状では確実に絶滅の方向へ向かっていると判断されるもの。
希 少	特に絶滅を危惧されることはないが、もともと個体数が非常に少ない種。
普 通	個体数が多く普通にみられる種。
現状不明	最近の生息の状況が乏しい種。

今回絶滅（EX）に評価された種はタケノコカワニナ、マルテンスマツムシ、ハイガイ、オナガリュウグウハゴロモ、アゲマキ、テリザクラ、イチョウシラトリの7種である。今回マルテンスマツ

ムシ（現地調査でも古い死殻が採集されていた）、オナガリュウグウハゴロモ（木村, 2019）、テリザクラ（河辺・木村, 2015）は、文献・標本調査の結果、新たに絶滅に評価された。

CR には 43 種が評価されたが、このうち近年（2010 年から 2019 年まで）の調査で 1 個体でも生貝が確認されたのは、わずか 11 種である。生貝が確認されなかった 32 種のうち 12 種は、オガイに代表されるように死殻（本書では殻の状態から現生個体と判断されたものと定義する）も全く採集されなかった。死殻でさえ採集できなかった 12 種については絶滅した可能性が高いが、生息していることを確認するのに比べて、生息していないことを証明することは非常に難しい。近年生息が全く確認されず、死殻も採集できない種でも、生息範囲が干潟から潮下帯というように元々広範囲に及ぶ種については、近年の生息状況を完全に把握する事は困難である。このような種は、絶滅している可能性が高いと考えられても、暫定的に CR と評価された。ベニガイは以前から内湾域では死殻も採集されないが、前回調査が不十分であった渥美外海において、その後の調査でも死殻すら確認されないの、前回の EN よりランクアップするべき種と評価された。また、クリイロコミミガイが今回初めて CR と評価されたが、本種は県下で調査が行き届いている生息環境であるヨシ原湿地で新たに本県初記録種として報告された（木村・他, 2019）。

EN には 21 種が評価された。近年の調査で生貝が確認されているが、生息場所は非常に限られており、その面積も著しく小さい種で構成されている。近年干潟の貝類多様性の回復傾向が明らかであるが、イボキサゴ、アダムスタマガイ、スジウネリチョウジガイなど、生貝が確認できるようになり、前回の CR よりランクダウンするべきと評価された種を含む。

VU には 39 種が評価されたが、近年の調査で生貝が確認されているが生息範囲は狭く、採集された個体数も少ない種が多く含まれている。近年干潟の貝類多様性の回復傾向が明らかであるが、そのような傾向は、近年の三河湾島嶼域の調査でも確認され、限られた範囲ではあるが、健全な個体群が確認されたシラギク、アラウズマキ、干潟から潮下帯で多くの死後間もない死殻や少数の生貝が確認されたツヤガラス、ムラサキガイ、ヒメマスオガイなど前回の CR、EN よりランクダウンするべきと評価された種を含む。

NT には 51 種が評価されたが、全種とも近年の調査で生貝が確認されている。個体数は少ないが比較的広い範囲で生息が確認されている種、生息範囲は狭いが生息場所では現在も多産する種が含まれている。三河湾島嶼域の調査で比較的広い範囲で、生息面積は狭いが健全な個体群が確認されたヒナユキスズメ、ムシログイ、干潟から潮下帯の広い範囲で回復傾向が認められたカニモリ、キヌボラ、ハマグリ、イヨスダレガイなど前回の VU よりランクダウンするべきと評価された種を含む。

DD には 36 種が評価された。前回より種数が著しく増加したが、これは環境省のレッドリストに掲載されているものの、県下での生息状況が把握できていない種が多いことを示唆している。その理由については【情報不足の種】（722～725 頁）を参照されたい。今後の調査によっては高いランクに評価される可能性がある種が含まれている。

貝類は生息環境が陸域（山地、丘陵地、湿地など）、淡水域（河川、湖沼、湿地など）、河口域（干潟、ヨシ原湿地、礫底、転石地など）、潮間帯（干潟、岩礁、礫底、転石地など）、潮下帯（泥底、砂泥底、砂底、岩礁、礫底など）と広域に及び、水深 20 m までの潮下帯に線引きして調査対象にしているとは言え、非常に広域でかつ垂直分布の幅も広く、調査・研究が完結しているわけではない。また、前述したように近年海域生息環境は改善しており、貝類多様性の回復傾向が認められる。今後さらに調査、研究が進めば、レッドリストに掲載される種がさらに増えると考えられる。

③ 愛知県貝類レッドリスト

目または上科・科の配列と名称、種の配列及び和名、学名は、原則として「岡山県野生生物目録 2019 21 軟体動物門」http://www.pref.okayama.jp/uploaded/life/602836_5066757_misc.pdf（岡山県野生動植物調査検討会編, 2019）に従った。また、各種の生息環境区分（陸：陸産貝類、淡水：淡水産貝類、内湾：内湾産貝類）を示した。

絶滅(EX)

No.	区分	目名(上科名)	科名	和名	学名	国ランク
1	淡水	モノアラガイ(上科)	ヒラマキガイ	カワネジガイ	<i>Camptoceras hirasei</i> Walker	CR
2	淡水	モノアラガイ(上科)	ヒラマキガイ	ヒダリマキモノアラガイ	<i>Culmenella rezvoji</i> (Lindholm)	CR+EN
3	淡水	イシガイ	イシガイ	オバエボシガイ	<i>Inversidens brandti</i> (Kobelt)	VU
4	淡水	イシガイ	イシガイ	ヨコハマシジラガイ	<i>Inversium jokohamensis</i> (Ihering)	NT
5	淡水	イシガイ	イシガイ	カタハガイ	<i>Obovalis omiensis</i> (Heimburg)	VU
6	内湾	オニノツノガイ(上科)	トゲカワニナ	タケノコカワニナ	<i>Stenomelania crenulata</i> (Deshayes)	VU
7	内湾	新腹足	タモトガイ	マルテンスマツムシ	<i>Mitrella martensi</i> (Lischke)	CR+EN
8	内湾	フネガイ	フネガイ	ハイガイ	<i>Tegillarca granosa</i> (Linnaeus)	VU
9	内湾	スエモノガイ(上科)	リュウグウハゴロモガイ	オナガリュウグウハゴロモ	<i>Offadesuma nakamigawai</i> Kuroda et Horikoshi	
10	内湾	無面	ナタメガイ	アゲマキ	<i>Sinonovacula constricta</i> (Lamarck)	CR+EN
11	内湾	ザルガイ	ニッコウガイ	テリザクラ	<i>Iridona iridescens</i> (Benson in Cantor)	VU
12	内湾	ザルガイ	ニッコウガイ	イチョウシラトリ	<i>Serratina diaphana</i> (Deshayes)	CR+EN

絶滅危惧 I A類(CR)

No.	区分	目名(上科名)	科名	和名	学名	国ランク
1	陸	柄眼	キセルガイ	トカラコギセル	<i>Reinia ashizuriensis</i> M. Azuma	CR+EN
2	陸	柄眼	キセルガイ	ヒロクチコギセル	<i>Reinia variegata</i> (A. Adams)	CR+EN
3	陸	柄眼	キセルガイ	ホウライジギセル	<i>Stereophaedusa ikenoi</i> Minato	CR+EN
4	陸	柄眼	ナンバンマイマイ	オモイガケナマイマイ	<i>Aegista inexpectata</i> Kuroda et Minato	CR+EN
5	陸	柄眼	ナンバンマイマイ	ミカワマイマイ	<i>Euhadra scaevola mikawa</i> Amano	CR+EN
6	陸	柄眼	ナンバンマイマイ	ヤマタカマイマイ	<i>Satsuma papilliformis</i> (Kobelt)	NT
7	淡水	クビキレガイ(上科)	エゾマメタニシ	マメタニシ	<i>Parafossarulus manchouricus japonicus</i> (Pilsbry)	VU
8	淡水	イシガイ	イシガイ	ササノハガイ(トンガリササノハガイ)	<i>Lanceolaria oxyrhyncha</i> (Martens)	NT
9	淡水	イシガイ	イシガイ	イシガイ	<i>Nodularia douglasiae</i> (Gray in Griffith et Pidgeon)	
10	淡水	イシガイ	イシガイ	マツカサガイ	<i>Pronodularia japonensis</i> (Lea)	NT
11	内湾	アマオブネガイ(上科)	アマオブネ	ウミヒメカノコ	<i>Smaragdia</i> sp.	VU
12	内湾	オニノツノガイ(上科)	ウミニナ	イボウミニナ	<i>Batillaria zonalis</i> (Bruguere)	VU
13	内湾	オニノツノガイ(上科)	キバウミニナ	カワアイ	<i>Pirenella pupiformis</i> Ozawa et Reid in Reid et Ozawa	VU
14	内湾	オニノツノガイ(上科)	スナモチツボ	サナギモツボ	<i>Finella pupoides</i> A. Adams	VU
15	内湾	リソツボ(上科)	ホソスジチョウジガイ	スノメチョウジガイ	<i>Phosinella pura</i> (Gould)	NT
16	内湾	リソツボ(上科)	クリムシチョウジガイ	ゴマツボ	<i>Stosicia annulata</i> (Dunker)	VU
17	内湾	クビキレガイ(上科)	イソマイマイ	イソマイマイ	<i>Sigaretornus</i> aff. <i>planus</i> (A. Adams)	VU
18	内湾	シロネズミ(上科)	シロネズミガイ	ハツカネズミ	<i>Macromphalus tornatilis</i> (Gould)	CR+EN
19	内湾	シロネズミ(上科)	ハナゴウナ	ヒモイカリナマコツマミガイ	<i>Hypermastus lacteus</i> (A. Adams)	VU
20	内湾	新腹足	ベッコウバイ	オガイ	<i>Cantharus cecillei</i> (Philippi)	EN
21	内湾	新腹足	アッキガイ	ツノオリレ	<i>Boerotrophon candelabrum</i> (Reeve)	
22	内湾	新腹足	アッキガイ	ヒラドサンゴヤドリ	<i>Coralliophila jeffreysi</i> E.A. Smith	
23	内湾	新腹足	タケノコガイ	イボヒメトクサ	<i>Granuliterebra bathyraphe</i> (E.A. Smith)	
24	内湾	タクミニナ(上科)	タクミニナ	タクミニナ	<i>Mathilda sinensis</i> P. Fischer	
25	内湾	アメフラシ	ウツセミガイ	ウツセミガイ	<i>Akera soluta</i> (Gmelin)	
26	内湾	トウガタガイ(上科)	トウガタガイ	イソチドリ	<i>Amathina tricarinata</i> (Linnaeus)	CR+EN
27	内湾	トウガタガイ(上科)	トウガタガイ	マキモノガイ	<i>Leucotina diana</i> (A. Adams)	CR+EN
28	内湾	トウガタガイ(上科)	トウガタガイ	ヒメゴウナ	<i>Monotygia eximia</i> (Lischke)	NT
29	内湾	オカミガイ	オカミガイ	ナラビオカミガイ	<i>Auriculastra duplicata</i> (L. Pfeiffer)	VU
30	内湾	オカミガイ	オカミガイ	クリイロコミミガイ	<i>Laemodonta siamensis</i> (Morelet)	VU
31	内湾	オカミガイ	オカミガイ	キヌカツギハマシイノミガイ	<i>Melampus sincaporensis</i> Pfeiffer	VU
32	内湾	イガイ	イガイ	ヤマホトギス	<i>Arcuatula japonica</i> (Dunker)	NT
33	内湾	フネガイ	サンカクサルボオ	ヨコヤマミエガイ	<i>Verilarcha interplicata</i> (Grabau et King)	
34	内湾	フネガイ	シコロエガイ	シコロエガイ	<i>Porterius dalli</i> (E.A. Smith)	
35	内湾	カキ	イタボガキ	イタボガキ	<i>Ostrea densamellosa</i> Lischke	CR+EN
36	内湾	イタヤガイ	イタヤガイ	ヒナノヒオウギ	<i>Mimachlamys asperulata</i> (A. Adams et Reeve)	
37	内湾	スエモノガイ(上科)	オキナガイ	コオキナガイ	<i>Laternula impura</i> (Pilsbry)	CR+EN
38	内湾	ツキガイ	ツキガイ	イセシラガイ	<i>Pegophysema bialata</i> (Pilsbry)	CR+EN
39	内湾	ツクエガイ(上科)	ツクエガイ	コヅツガイ	<i>Eufistulana grandis</i> (Deshayes)	NT
40	内湾	ウロコガイ(上科)	ウロコガイ	オウギウロコガイ	<i>Galeommella utinomii</i> Habe	CR+EN
41	内湾	ウロコガイ(上科)	チリハギ	マゴコロガイ	<i>Peregrinamor ohshima</i> Shōji	NT

42	内湾	ウロコガイ(上科)	イソカゼ	イソカゼ	<i>Basterotia gouldi</i> (A. Adams)	CR+EN
43	内湾	無面	マテガイ	ダンダラマテガイ	<i>Solen kurodai</i> Habe	
44	内湾	無面	マテガイ	バラフマテ	<i>Solen roseomaculatus</i> Pilsbry	NT
45	内湾	ザルガイ	ニッコウガイ	ベニガイ	<i>Pharaonella sieboldii</i> (Deshayes)	NT
46	内湾	ザルガイ	ニッコウガイ	オオモノノハナ	<i>Plaetextellina praetexta</i> (Martens)	NT
47	内湾	ザルガイ	ニッコウガイ	アオサギガイ	<i>Psammacoma gubernaculum</i> (Hanley)	
48	内湾	ザルガイ	ニッコウガイ	アワジチガイ	<i>Sylvanus lilium</i> (Hanley)	
49	内湾	ザルガイ	シオサザナミ	フジナミガイ	<i>Hiatula boeddinghausi</i> (Lischke)	CR+EN
50	内湾	オオノガイ	ニオガイ	ウミタケ	<i>Barnea japonica</i> (Yokoyama)	VU
51	内湾	バカガイ(上科)	バカガイ	ヤチヨノハナガイ	<i>Raeta pellicula</i> (Reeve)	CR+EN
52	内湾	マルスダレガイ	マルスダレガイ	ウラカガミ	<i>Dosinia corrugata</i> (Reeve)	CR+EN
53	内湾	マルスダレガイ	ハナグモリガイ	ハナグモリ	<i>Glaconome angulata</i> Reeve	VU

絶滅危惧ⅠB類(EN)

No.	区分	目名(上科名)	科名	和名	学名	国ランク
1	陸	クビキレガイ(上科)	カワザンショウガイ	ホラアナゴマオカチグサ近似種	<i>Cavernacmella</i> aff. <i>kuzuensis</i> (K. Suzuki)	CR+EN
2	陸	柄眼	キバサナギガイ	キバサナギ	<i>Vertigo hirasei</i> Pilsbry	CR+EN
3	陸	柄眼	キバサナギガイ	ヤマトキバサナギ	<i>Vertigo japonica</i> Pilsbry et Y. Hirase	VU
4	陸	柄眼	シタラ	ハチジョウヒメベッコウ	<i>Yamatochlamys circumdata</i> (Pilsbry)	NT
5	陸	柄眼	ナンバンマイマイ	サンエンマイマイ	<i>Satsuma</i> sp. 1	EN
6	内湾	ニシキウズ	ニシキウズ	イボキサゴ	<i>Umbonium moniliferum</i> (Lamarck)	NT
7	内湾	タマガイ(上科)	タマガイ	アダムスタマガイ	<i>Cryptopnatica adamsiana</i> (Dunker)	NT
8	内湾	リソツボ(上科)	ホソスジチョウジガイ	スジウネリチョウジガイ	<i>Rissoina costulata</i> Dunker	VU
9	内湾	クビキレガイ(上科)	クビキレガイ	ハクボククビキレ	<i>Truncatella</i> sp.	
10	内湾	クビキレガイ(上科)	カワザンショウガイ	ヘソカドガイ	<i>Paludinellassiminea japonica</i> (Pilsbry)	
11	内湾	クビキレガイ(上科)	カワザンショウガイ	オオウスイロヘソカドガイ	<i>Paludinellassiminea tanegashimae</i> (Pilsbry)	
12	内湾	クビキレガイ(上科)	ワカウラツボ	ゴマツボモドキ	<i>Hyala</i> cf. <i>bella</i> (A. Adams)	VU
13	内湾	クビキレガイ(上科)	ワカウラツボ	サザナミツボ	<i>Nozeva ziczac</i> (Fukuda et Ekawa)	NT
14	内湾	クビキレガイ(上科)	イソマイマイ	ウミコハクガイ	<i>Teinostoma lucidum</i> A. Adams	VU
15	内湾	新腹足	コロモガイ	オリイレボラ	<i>Scalptia scalariformis</i> (Lamarck)	VU
16	内湾	新腹足	オリイレヨフバイ	ウネムシロ	<i>Reticunassa hiradoensis</i> (Pilsbry)	CR+EN
17	内湾	新腹足	オリイレヨフバイ	アツミムシロ	<i>Reticunassa</i> sp.	CR+EN
18	内湾	ミズシタダミ(上科)	カクメイ	ミカワイシン	<i>Tomura</i> sp.	
19	内湾	ミズシタダミ(上科)	カクメイ	ヤシマイシン近似種	<i>Tomura</i> cf. <i>yashima</i> Fukuda et Yamashita	CR+EN
20	内湾	オオシイノミガイ(上科)	オオシイノミガイ	ムラクモキジビキガイ	<i>Japanacteon nipponensis</i> (Yamakawa)	NT
21	内湾	オカミガイ	オカミガイ	オカミガイ	<i>Ellobium chinense</i> (Pfeiffer)	VU
22	内湾	カキ	ハボウキガイ	ハボウキ	<i>Pinna attenuata</i> Reeve	NT
23	内湾	ザルガイ	ザルガイ	イシカゲガイ	<i>Keenocardium buellowi</i> (Rolle)	
24	内湾	ザルガイ	ニッコウガイ	サビシラトリ	<i>Limecola contabulata</i> (Deshayes)	NT
25	内湾	バカガイ(上科)	バカガイ	アリソガイ	<i>Mactra antiquata</i> (Spengler)	VU
26	内湾	マルスダレガイ	マルスダレガイ	フスマガイ	<i>Clementia papyracea</i> (Gmelin)	

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

No.	区分	目名(上科名)	科名	和名	学名	国ランク
1	陸	ヤマキサゴ(上科)	ヤマキサゴ	ヤマキサゴ	<i>Waldemaria japonica</i> (A. Adams)	
2	陸	ゴマオカタニシ(上科)	ゴマオカタニシ	ベニゴマオカタニシ	<i>Georissa shikokuensis</i> Amano	VU
3	陸	ヤマタニシ(上科)	ヤマタニシ	トウカイヤマトガイ	<i>Japonia katorii</i> Minato	VU
4	陸	柄眼	スナガイ	スナガイ	<i>Gastrocopta armigerella</i> (Reinhardt)	NT
5	陸	柄眼	クチミゾガイ	ナニワクチミゾガイ	<i>Eostrobilops nipponica reikoe</i> Matsumura et Minato	NT
6	陸	柄眼	ミジンサナギガイ	ナガナタネ	<i>Columella edentula</i> (Draparnaud)	LP
7	陸	柄眼	キバサナギガイ	ナタネキバサナギ	<i>Vertigo eogea</i> Pilsbry	VU
8	陸	柄眼	キセルガイ	トノサマガセル	<i>Megalophaedusa ducalis</i> (Kobelt)	NT
9	陸	柄眼	キセルガイ	ホソヒメギセル	<i>Megalophaedusa gracilispira</i> (Möllerndorff)	VU
10	陸	柄眼	キセルガイ	クビナガギセル	<i>Megalophaedusa kubinaga</i> (Kuroda)	VU
11	陸	柄眼	シタラ	ヒラシタラ	<i>Sitalina latissima</i> (Pilsbry)	LP
12	陸	柄眼	ベッコウマイマイ	ヒラベッコウ	<i>Bekkochlamys micrograpta</i> (Pilsbry)	DD
13	陸	柄眼	ナンバンマイマイ	イシマキンロマイマイ	<i>Aegista calcicola</i> (Kuroda in Masuda et Habe)	VU
14	陸	柄眼	ナンバンマイマイ	ミヤマヒダリマキマイマイ(ヒラヒダリマキマイマイ)	<i>Euhadra scaevola</i> (Martens) (<i>E. s. interioris</i> Pilsbry)	VU
15	陸	柄眼	ナンバンマイマイ	カタマメマイマイ	<i>Lepidopisum conospira</i> (Pfeiffer)	VU
16	陸	柄眼	ナンバンマイマイ	ミニピロウドマイマイ	<i>Nipponochloritis oscitans takedai</i> Minato	VU
17	陸	柄眼	ナンバンマイマイ	ニヨリサンエンマイマイ	<i>Satsuma</i> sp. 2	
18	淡水	クビキレガイ(上科)	ミズゴマツボ	ミズゴマツボ	<i>Stenothyra japonica</i> Kuroda	VU
19	淡水	モノアラガイ(上科)	ヒラマキガイ	ミズコハクガイ	<i>Gyraulus soritai</i> Habe	VU

20	内湾	サメハダヒザラガイ	サメハダヒザラ ガイ	キタサメハダヒザラガイ	<i>Leptochiton hakodatensis</i> (Thiele)	
21	内湾	サメハダヒザラガイ	サメハダヒザラ ガイ	サメハダヒザラガイ	<i>Leptochiton hirasei</i> (Is. Taki et Iw. Taki)	
22	内湾	アマオブネガイ (上科)	アマオブネ	ヒロクチカノコ	<i>Neripteron</i> sp.	NT
23	内湾	アマオブネガイ (上科)	ユキスズメ	ミヤコドリ	<i>Phenacolepas pulchella</i> (Lischke)	NT
24	内湾	アマオブネガイ (上科)	ユキスズメ	ツメナリミヤコドリ	<i>Phenacolepas unguiformis</i> (Gould)	
25	内湾	イトカケガイ(上科)	イトカケガイ	オダマキ	<i>Epitonium auritum</i> (Sowerby II)	NT
26	内湾	タマガイ(上科)	タマガイ	ネコガイ	<i>Eunoticina papilla</i> (Gmelin)	NT
27	内湾	クビキレガイ(上科)	クビキレガイ	ヤマトクビキレ	<i>Truncatella pfeifferi</i> Martens	
28	内湾	クビキレガイ(上科)	カワザンショウ ガイ	ヨシダカワザンショウ	<i>"Angustassiminea" yoshidayukioi</i> (Kuroda)	NT
29	内湾	クビキレガイ(上科)	カワザンショウ ガイ	カハタレカワザンショウ	Assimineidae gen. et sp.	VU
30	内湾	クビキレガイ(上科)	ワカウラツボ	ワカウラツボ	<i>Wakauraia sakaguchii</i> (Kuroda et Habe)	VU
31	内湾	クビキレガイ(上科)	イソコハクガイ	アラウズマキ	<i>Circulus duplicatus</i> (Lischke)	VU
32	内湾	クビキレガイ(上科)	イソコハクガイ	シラギク	<i>Pseudoliotia pulchella</i> (Dunker)	NT
33	内湾	新腹足	タモトガイ	スミスシラゲガイ	<i>Mitrella yabei</i> (Nomura)	
34	内湾	新腹足	オリイレヨフバイ	アオモリムシロ	<i>Reticunassa hypolia</i> (Pilsbry)	
35	内湾	新腹足	オリイレヨフバイ	ヒメムシロ	<i>Reticunassa multigranosa</i> (Dunker)	
36	内湾	新腹足	バイ	バイ	<i>Babylonia japonica</i> (Reeve)	NT
37	内湾	オオシイノミガイ (上科)	オオシイノミガイ	オオシイノミガイ	<i>Japonactaeon sieboldii</i> (Reeve)	NT
38	内湾	オオシイノミガイ (上科)	オオシイノミガイ	コシイノミガイ	<i>Pupa strigosa</i> (Gould)	
39	内湾	頭楯	ブドウガイ	カミスジカイコガイダマシ	<i>Cylichnatys yamakawai</i> (Yokoyama)	VU
40	内湾	トウガタガイ(上科)	トウガタガイ	スオウクチキレ	<i>Evalea suoana</i> (Hori et Nakamura)	NT
41	内湾	トウガタガイ(上科)	トウガタガイ	シダイタノウラクチキレ	<i>Parthenina</i> sp.	
42	内湾	トウガタガイ(上科)	トウガタガイ	ヌカルミクチキレ	<i>"Sayella" sp.</i>	NT
43	内湾	オカミミガイ	オカミミガイ	ウスコミミガイ	<i>Laemodonta exaratoidea</i> Kawabe	NT
44	内湾	オカミミガイ	オカミミガイ	ナギサノシタリガイ	<i>Microtralia acteocinoides</i> Kuroda et Habe in Habe	
45	内湾	キヌタレガイ	キヌタレガイ	アサヒキヌタレガイ	<i>Solemya japonica</i> (Dunker)	VU
46	内湾	イガイ	イガイ	ツヤガラ	<i>Jolya rhomboidea</i> (Reeve)	
47	内湾	スエモノガイ(上科)	オキナガイ	オヤイツオキナガイ	<i>Exolaternula</i> sp.	VU
48	内湾	ウロコガイ(上科)	ウロコガイ	キザミウロコガイ属の 一種	<i>Galeomma</i> sp.	
49	内湾	ウロコガイ(上科)	ウロコガイ	ニッポンマメアゲマキ	<i>Pseudogaleomma japonica</i> (A. Adams)	NT
50	内湾	ウロコガイ(上科)	ウロコガイ	ツヤマメアゲマキ	<i>Scintilla nitidella</i> Habe	
51	内湾	ウロコガイ(上科)	チリハギ	スジホシムシモドキヤドリ ガイ	<i>Nipponomysella subtruncata</i> (Yokoyama)	NT
52	内湾	ウロコガイ(上科)	チリハギ	マツモトウロコガイ	<i>Paraborniola matsumotoi</i> Habe	NT
53	内湾	ザルガイ	ニッコウガイ	サギガイ	<i>Rexithaerus sector</i> (Ôyama)	NT
54	内湾	ザルガイ	シオサザナミ	オチバガイ	<i>Gari chinensis</i> (Deshayes)	NT
55	内湾	ザルガイ	シオサザナミ	ムラサキガイ	<i>Hiatula adamsii</i> (Reeve)	VU
56	内湾	オオノガイ	オオノガイ	ヒメマスオガイ	<i>Cryptomya busoensis</i> Yokoyama	VU
57	内湾	オオノガイ	オオノガイ	クシケマスオガイ	<i>Cryptomya elliptica</i> (A. Adams)	NT
58	内湾	オオノガイ	クチベニガイ	クチベニガイ	<i>Corbula erythron</i> Lamarck	

準絶滅危惧(NT)

No.	区分	目名(上科名)	科名	和名	学名	国ランク
1	陸	ゴマオカタニシ (上科)	ゴマオカタニシ	ゴマオカタニシ	<i>Georissa japonica</i> Pilsbry	NT
2	陸	ヤマタニシ(上科)	ヤマタニシ	ムシオイガイ	<i>Chamalycaeus nipponensis</i> (Reinhardt)	
3	陸	収眼	ホソアシヒダナメ クジ	イボイボナメクジ	<i>Granulilimax fuscicornis</i> Minato	NT
4	陸	柄眼	オカモノアラガイ	ナガオカモノアラガイ	<i>Oxyloma hirasei</i> (Pilsbry)	NT
5	陸	柄眼	キセルガイモドキ	キセルガイモドキ	<i>Mirus reinianus</i> (Kobelt)	
6	陸	柄眼	ミジンマイマイ	ヒラドマルナタネ	<i>Pupisoma harpula</i> Reinhardt	
7	陸	柄眼	キセルガイ	オクガタギセル	<i>Megalophaedusa dorcas</i> (Pilsbry)	NT
8	陸	柄眼	キセルガイ	ホソヤカギセル	<i>Megalophaedusa hosayaka</i> (Pilsbry)	NT
9	陸	柄眼	キセルガイ	ハチノコギセル	<i>Megalophaedusa kawasakii</i> (Kuroda)	NT
10	陸	柄眼	キセルガイ	ミカワギセル	<i>Stereophaedusa hickonis mikawa</i> (Pilsbry)	NT
11	陸	柄眼	シタラ	タカキビ	<i>Coneuplecta praealta</i> (Pilsbry)	NT
12	陸	柄眼	シタラ	ウラウズタカキビ	<i>Coneuplecta</i> sp.	
13	陸	柄眼	シタラ	ヒゼンキビ	<i>Parakaliella hizenensis</i> (Pilsbry)	NT
14	陸	柄眼	シタラ	ヒメハリマキビ	<i>Parakaliella pagoduloides</i> (Gude)	NT
15	陸	柄眼	シタラ	スジキビ	<i>Parakaliella ruida</i> (Pilsbry)	NT

16	陸	柄眼	シタラ	カサネシタラ	<i>Sitalina insignis</i> (Pilsbry et Y. Hirase)	NT
17	陸	柄眼	シタラ	ウメムラシタラ	<i>Sitalina japonica</i> Habe	NT
18	陸	柄眼	シタラ	ヒメカサキビ	<i>Trochochlamys subcrenulata</i> (Pilsbry)	NT
19	陸	柄眼	ベッコウマイマイ	カントウベッコウ	<i>Bekkochlamys septentrionalis</i> (Jacobi)	DD
20	陸	柄眼	ベッコウマイマイ	スカシベッコウ	<i>Bekkochlamys serena</i> (Pilsbry et Y. Hirase) in Y. Hirase)	NT
21	陸	柄眼	ナンバンマイマイ	クチマガリマイマイ	<i>Aegista cavicollis</i> (Pilsbry)	NT
22	陸	柄眼	ナンバンマイマイ	カドコオオベソマイマイ	<i>Aegista goniosoma</i> (Pilsbry et Y. Hirase)	NT
23	陸	柄眼	ナンバンマイマイ	フチマルオオベソマイ マイ	<i>Aegista tumida</i> (Gude)	NT
24	陸	柄眼	ナンバンマイマイ	ヒルゲンドルフマイマイ	<i>Aegista hilgendorffii</i> (Kobelt)	NT
25	陸	柄眼	ナンバンマイマイ	ビロウドマイマイ	<i>Nipponochloritis oscitans</i> (Martens)	DD
26	淡水	タニシ(上科)	タニシ	マルタニシ	<i>Cipangopaludina chinensis laeta</i> (Martens)	VU
27	淡水	オニノツノガイ (上科)	カワニナ	クロダカワニナ	<i>Semisulcospira kurodai</i> Kajiyama et Habe	NT
28	淡水	モノアラガイ(上科)	ヒラマキガイ	ヒラマキミズマイマイ	<i>Gyraulus chinensis spirillus</i> (Gould)	DD
29	淡水	モノアラガイ(上科)	ヒラマキガイ	ヒラマキガイモドキ	<i>Polypylis hemisphaerula</i> (Benson in Cantor)	NT
30	淡水	イシガイ	イシガイ	ドブガイ	<i>Sinanodonta woodiana</i> (Lea)	
31	内湾	アマオブネガイ (上科)	ユキスズメ	ヒナユキスズメ	<i>Phenacolepas</i> sp.	NT
32	内湾	オニノツノガイ (上科)	オニノツノガイ	コオロギ(コベルトカニ モリ)	<i>Cerithium dialeucum</i> Philippi	
33	内湾	オニノツノガイ (上科)	オニノツノガイ	カニモリ	<i>Rhinoclavis kochi</i> (Philippi)	
34	内湾	オニノツノガイ (上科)	ウミニナ	ウミニナ	<i>Batillaria multififormis</i> (Lischke)	NT
35	内湾	オニノツノガイ (上科)	キバウミニナ	フトヘナタリ	<i>Cerithidea moerchii</i> (A. Adams in Sowerby II)	NT
36	内湾	オニノツノガイ (上科)	キバウミニナ	ヘナタリ	<i>Pirenella nipponica</i> Ozawa et Reid in Reid et Ozawa	NT
37	内湾	イトカケガイ(上科)	イトカケガイ	クリンイトカケ	<i>Amaea thielei</i> (de Boury)	
38	内湾	イトカケガイ(上科)	イトカケガイ	クレハガイ	<i>Epitonium clementinum</i> (Grateloup)	NT
39	内湾	イトカケガイ(上科)	イトカケガイ	シノブガイ	<i>Epitonium gracile</i> (Sowerby II)	
40	内湾	イトカケガイ(上科)	イトカケガイ	セキモリ	<i>Epitonium robillardii</i> (Sowerby III)	NT
41	内湾	タマキビ(上科)	タマキビ	モロハタマキビ	<i>Lacuna carinifera</i> A. Adams	NT
42	内湾	タマガイ(上科)	タマガイ	カスミコダマ	<i>Natica buriasiensis</i> Récluz	NT
43	内湾	タマガイ(上科)	タマガイ	フロガイダマシ	<i>Naticarius concinnus</i> (Dunker)	VU
44	内湾	クビキレガイ(上科)	カワザンショウ ガイ	クリイロカワザンショウ	<i>Angustassimineea castanea</i> (Westerlund)	NT
45	内湾	クビキレガイ(上科)	カワザンショウ ガイ	ツブカワザンショウ	<i>Assimineea estuarina</i> Habe	NT
46	内湾	クビキレガイ(上科)	カワザンショウ ガイ	ヒナタムシヤドリカワザン ショウ	<i>Assimineea</i> aff. <i>parasitologica</i> Kuroda	NT
47	内湾	クビキレガイ(上科)	ワカウラツボ	カワグチツボ	<i>Fluviocingula elegantula</i> (A. Adams)	NT
48	内湾	クビキレガイ(上科)	ミズゴマツボ	エドガワミズゴマツボ	<i>Stenothyra edogawaensis</i> (Yokoyama)	NT
49	内湾	クビキレガイ(上科)	イソコハクガイ	ナギツボ	<i>Vitrinella</i> sp.	NT
50	内湾	ヤツシロガイ (上科)	トウカムリ	カズラガイ	<i>Phalium flammiferum</i> (Röding)	
51	内湾	新腹足	エゾバイ	モスソガイ	<i>Volutharpa perryi</i> (Jay)	
52	内湾	新腹足	テンゲニシ	テンゲニシ	<i>Hemifusus tuba</i> (Gmelin)	NT
53	内湾	新腹足	オリイレヨフバイ	ムシロガイ	<i>Nassarius livescens</i> (Philippi)	NT
54	内湾	新腹足	オリイレヨフバイ	キヌボラ	<i>Reticunassa japonica</i> (A. Adams)	
55	内湾	新腹足	ベッコウバイ	ナガゴマフホラダマシ (ゴマフホラダマシ)	<i>Engina menkeana</i> (Dunker)	VU
56	内湾	新腹足	アッキガイ	オウウヨウラク	<i>Ocenebrellus inornatus</i> (Récluz)	
57	内湾	新腹足	マクラガイ	マクラガイ	<i>Oliva mustelina</i> Lamarck	NT
58	内湾	新腹足	フデシヤジク	クリイロマンジ	<i>Pseudodaphnella leuckartii</i> (Dunker)	NT
59	内湾	頭楯	カノコキセワタ	カノコキセワタガイ	<i>Philinopsis</i> sp.	
60	内湾	アメフラシ	アメフラシ	ウミナメクジ	<i>Petalifera punctulata</i> (Tapparone-Canefri)	
61	内湾	トウガタガイ(上科)	トウガタガイ	カキウラクチキレモドキ	<i>Brachystomia bipyramidata</i> (Nomura)	
62	内湾	トウガタガイ(上科)	トウガタガイ	ヒガタヨコイトカケギリ	<i>Cingulina</i> cf. <i>circinata</i> A. Adams	DD
63	内湾	キヌタレガイ	キヌタレガイ	キヌタレガイ	<i>Solemya pusilla</i> Gould	NT
64	内湾	フネガイ	サンカクサルボオ	ミエガイ	<i>Striarca symmetrica</i> (Reeve)	
65	内湾	カキ	イタボガキ	クロヒメガキ	<i>Ostrea futamiensis</i> Seki	
66	内湾	カキ	ハボウキガイ	タイラギ(リシケタイラギ)	<i>Atrina lischkeana</i> (Clessin)	NT
67	内湾	カキ	ハボウキガイ	ズベタイラギ	<i>Atrina pectinata</i> (Linnaeus)	NT
68	内湾	スエモノガイ(上科)	オキナガイ	ソトオリガイ	<i>Exolaternula liautaudi</i> (Mittre)	
69	内湾	スエモノガイ(上科)	オキナガイ	オキナガイ	<i>Laternula anatina</i> (Linnaeus)	
70	内湾	ツキガイ	ツキガイ	ツキガイモドキ	<i>Lucinoma annulata</i> (Reeve)	
71	内湾	ウロコガイ(上科)	ウロコガイ	マメアゲマキ属の一種	<i>Scintilla</i> sp.	
72	内湾	無面	マテガイ	マテガイ	<i>Solen strictus</i> Gould	
73	内湾	ザルガイ	ニッコウガイ	ゴイサギ	<i>Macoma tokyoensis</i> Makiyama	

74	内湾	ザルガイ	ニッコウガイ	ユウシオガイ	<i>Moerella rutila</i> (Dunker)	NT
75	内湾	ザルガイ	ニッコウガイ	サクラガイ	<i>Nitidotellina hokkaidoensis</i> (Habe)	NT
76	内湾	ザルガイ	ニッコウガイ	ウズザクラ	<i>Nitidotellina lischkei</i> M. Huber, Langleit et Kreipl	NT
77	内湾	ザルガイ	フジノハナガイ	フジノハナガイ	<i>Donax semigranosus</i> Dunker	NT
78	内湾	オオノガイ	オオノガイ	オオノガイ	<i>Mya arenaria</i> Linnaeus	NT
79	内湾	バカガイ(上科)	バカガイ	ミルクイ	<i>Tresus keenae</i> (Kuroda et Habe)	VU
80	内湾	マルスダレガイ	マルスダレガイ	ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i> (Röding)	VU
81	内湾	マルスダレガイ	マルスダレガイ	イヨスダレガイ	<i>Paratapes undulatus</i> (Born)	

情報不足(DD)

No.	区分	目名(上科名)	科名	和名	学名	国ランク
1	陸	ヤマタニシ(上科)	ヤマタニシ	ビルスブリムシオイガイ	<i>Chamalycaeus pilsbryi</i> (Kobelt)	
2	陸	ヤマタニシ(上科)	ヤマタニシ	サドヤマトガイ	<i>Japonia sadoensis</i> Pilsbry et Y. Hirase	NT
3	陸	オカミガイ	オカミガイ	ケシガイ	<i>Carychium pessimum</i> Pilsbry	NT
4	陸	柄眼	キセルガイモドキ	フトキセルガイモドキ	<i>Mirus japonicus</i> (Möllendorff)	
5	淡水	モノアラガイ(上科)	モノアラガイ	モノアラガイ	<i>Radix cf. japonica</i> (Jay)	NT
6	淡水	イシガイ	イシガイ	フネドブガイ	<i>Anemina arcaeformis</i> (Heude)	
7	淡水	イシガイ	イシガイ	カラスガイ	<i>Cristaria plicata</i> (Leach)	NT
8	淡水	ドブシジミ(上科)	ドブシジミ	ニホンマメシジミ	<i>Pisidium nipponense</i> Kuroda	
9	淡水	マルスダレガイ	シジミ	マシジミ	<i>Corbicula leana</i> Prime	VU
10	内湾	アマオブネガイ(上科)	アマオブネ	ヒメカノコ	<i>Clithon aff. oualaniense</i> (Lesson)	NT
11	内湾	アマオブネガイ(上科)	アマオブネ	ウミヒメカノコ属の一種	<i>Smaragdia cf. souverbiana</i> (Montrouzier in Souverbie et Montrouzier)	
12	内湾	イトカケガイ(上科)	イトカケガイ	ウネナシイトカケ	<i>Acrilla acuminata</i> (Sowerby II)	VU
13	内湾	タマキビ(上科)	タマキビ	ヘソカドタマキビ	<i>Lacuna smithi</i> Pilsbry	
14	内湾	タマガイ(上科)	タマガイ	ツガイ	<i>Sinum incisum</i> (Sowerby I in Reeve)	NT
15	内湾	タマガイ(上科)	タマガイ	ツツミガイ	<i>Sinum planulatum</i> (Récluz in Chenu)	NT
16	内湾	クビキレガイ(上科)	カワザンショウガイ	カワザンショウガイ科の一種	"Assimineae" sp.	
17	内湾	シロネズミ(上科)	シロネズミガイ	ヒナツボ	<i>Berthais egregia</i> (A. Adams)	
18	内湾	スイショウガイ(上科)	スイショウガイ	フドロ	<i>Margistrombus robustus</i> (G.B. Sowerby III)	NT
19	内湾	新腹足	アッキガイ	オニサザエ	<i>Chicoreus asianus</i> Kuroda	NT
20	内湾	新腹足	タケノコガイ	イワカワトクサ	<i>Duplicaria evoluta</i> (Deshayes)	VU
21	内湾	ミズシタダミ(上科)	カクメイ	ヤマトカクメイ	<i>Cornirostra</i> sp.	DD
22	内湾	ミズシタダミ(上科)	ガラスシタダミ	シンジュノナミダ	<i>Xenoskenea</i> sp.	DD
23	内湾	Cimoidea(上科)	キマツボ(キリツボ)	キリツボ近似種	<i>Graphis</i> sp.	
24	内湾	Murchisonelloidea(上科)	ガクバンゴウナ	イリエゴウナ	<i>Ebala</i> sp.	VU
25	内湾	頭楯	クダタマガイ	シグマクダタマ	<i>Cylichna sigmolabris</i> (Habe et Ando)	
26	内湾	頭楯	カノコキセワタ	ヤミヨキセワタ類	<i>Melanochlamys</i> spp.	DD
27	内湾	トウガタガイ(上科)	トウガタガイ	シゲヤスイトカケギリ(カゴメイトカケギリ)	<i>Pyrgulina shigeyasui</i> (Yokoyama)	NT
28	内湾	トウガタガイ(上科)	トウガタガイ	ウネイトカケギリ	<i>Turbonilla scrobiculata</i> Yokoyama	NT
29	内湾	オカミガイ	オカミガイ	ハマシノミガイ	<i>Melampus nuxeastaneus</i> Kuroda	
30	内湾	ウロコガイ(上科)	チリハギ	ガタツキ(コハギガイ)	<i>Arthritica cf. reikoe</i> (T. Suzuki et Kosuge)	DD
31	内湾	ウロコガイ(上科)	チリハギ	ツルマルケボリ	<i>Borniopsis tsurumaru</i> Habe	VU
32	内湾	ウロコガイ(上科)	チリハギ	オカメブンブクヤドリガイ	<i>Montacuta echinocardiophila</i> Habe	
33	内湾	ウロコガイ(上科)	チリハギ	マルヘノジガイ	<i>Nipponomysella oblongata</i> (Yokoyama)	
34	内湾	ウロコガイ(上科)	チリハギ	オキナノエガオ	<i>Platommysia rugata</i> Habe	CR+EN
35	内湾	無面	マテガイ	オオマテガイ	<i>Solen grandis</i> Dunker	
36	内湾	ザルガイ	ニッコウガイ	モモノハナ	<i>Moerella hilaris</i> (Hanley)	NT
37	内湾	ザルガイ	フジノハナガイ	ナミノコ	<i>Donax cuneatus</i> Linnaeus	NT
38	内湾	ザルガイ	シオサザナミ	ハザクラ	<i>Gari minor</i> (Deshayes)	NT
39	内湾	ザルガイ	キヌタアゲマキ	キヌタアゲマキ	<i>Solecurtus divaricatus</i> (Lischke)	NT
40	内湾	オオノガイ	フナクイムシ	ネムグリガイ	<i>Zachisia zenkewitschi</i> Bulatoff et Rjabtschikoff	
41	内湾	バカガイ(上科)	バカガイ	オオトリガイ	<i>Lutraria maxima</i> Jonas	NT
42	内湾	バカガイ(上科)	バカガイ	カモジガイ	<i>Lutraria rhynchaena</i> Jonas	NT
43	内湾	バカガイ(上科)	バカガイ	ユキガイ	<i>Meropesta nicobarica</i> (Gmelin)	NT
44	内湾	マルスダレガイ	マルスダレガイ	シオヤガイ	<i>Anomalodiscus squamosus</i> (Linnaeus)	NT
45	内湾	マルスダレガイ	マルスダレガイ	ウスハマグリ	<i>Aphrodora kurodai</i> (Matsubara)	CR+EN

国リスト

No.	区分	目名(上科名)	科名	和名	学名	国ランク
1	陸	柄眼	キセルガイ	エルベリギセル	<i>Megalophaedusa aurantiaca moellendorffi</i> (Nordsieck)	DD
2	陸	柄眼	キセルガイ	オオギセル	<i>Megalophaedusa martensi</i> (Martens)	NT
3	陸	柄眼	シタラ	オオウエキビ	<i>Trochochlamys fraterna</i> (Pilsbry)	DD

4	淡水	タニシ(上科)	タニシ	オオタニシ	<i>Cipangopaludina japonica</i> (Martens)	NT
5	淡水	マルスダレガイ	シジミ	ヤマトシジミ	<i>Corbicula japonica</i> Prime	NT
6	内湾	カサガイ	コガモガイ(ユキノカサガイ)	ツボミ	<i>Patelloida conulus</i> (Dunker)	NT
7	内湾	タマガイ(上科)	タマガイ	サキグロタマツメタ	<i>Laguncula pulchella</i> Benson in Cantor	CR+EN
8	内湾	イガイ	イガイ	コケガラス	<i>Modiolus moduloides</i> (Röding)	NT
9	内湾	ネリガイ	サザナミガイ	オビクイ	<i>Entodesma navicula</i> (A. Adams et Reeve)	VU
10	内湾	バカガイ(上科)	チドリマスオ	クチバガイ	<i>Coecella chinensis</i> (Deshayes)	NT
11	内湾	マルスダレガイ	フナガタガイ	ウネナシトマヤガイ	<i>Neotrapezium liratum</i> (Reeve)	NT

④ 愛知県貝類レッドリストの変更点

本書に掲載した貝類レッドリスト（見直し後）と「レッドリストあいち 2015」に掲載した貝類レッドリスト（見直し前）の新旧対照表を以下に示した。

		見直し前のランク																	
見直し 後の ランク	EX	カワネシガイ ヒダリマキモノアラガイ オハエボシガイ ヨコハマシシラガイ カタハガイ 等、9種	CR	マルデンスマツムシ	EN		VU		NT		DD		LP		国リスト #1		リスト外・未評価 #2		種数
	CR		トカラコギセル ヒロクチコギセル ホウライジギセル オモイガケナマイマイ ササノハガイ(トンガリサ サノハガイ) ★1 等、44種	ベニガイ							ヤマタカマイマイ マメタニシ ヌノメチウジガイ ヒメゴウナ					ツノオリレ クリイロコミガイ ヨコヤマミミガイ ヒナノヒオウギ		53	
	EN		イボキサゴ アダムスタマガイ スジウネリチウジガイ ハボウキ アリソガイ	ホラアナゴマオカチグサ 近似種 ★2 サザナミツボ オリイレボラ ウネムシロ アツムシロ ムラクモキジビキガイ オカミミガイ サビシラトリ	フスマガイ						ハチジョウヒメベッコウ ヘソカドガイ ミカワイシン ★3					キバサナギ ヤマトキバサナギ サンエンマイマイ ハクボクダビキレ オオウスイロヘソカドガイ ゴマツボモドキ ウミコハクガイ ヤシマイシン 近似種 イシカゲガイ		26	
	VU		アラウスマキ アサヒキスダレガイ	シラギク オオシイノミガイ ツヤガラス ムラサキガイ ヒメマスオガイ クシケマスオガイ	ヤマキサゴ ベニゴマオカニシ トウカイヤマトガイ スナガイ ナニワクチミノガイ ナガナタネ ★4 ナタネキバサナギ ★5 ヤマトクビキレ ★6 カハタレカワザンショウ ★7 オヤヅオキナナガイ ★8 オチバガイ ★9 等、34種					ヒラベッコウ ★10 カタマメマイマイ ミズコハクガイ カミスジカイコガイダマシ					ヒラシタラ ニョリサンエンマイマイ キタサハダヒザラガイ サメハダヒザラガイ ミヤコドリ ツメナリミヤコドリ アオモリムシロ ヒメムシロ スオウチキレ シダタイノウラクチキレ キザミウロコガイ属の一種 マツモトウロコガイ		58		
	NT					ヒナユキスズメ カニモリ ムシロガイ キヌボラ ハマグリ イヨスダレガイ	ゴマオカニシ イボイボナメクジ ナガオカモノアラガイ キセルガイモドキ オクガタギセル カサネシタラ ★11 ウメムラシタラ ★12 トブガイ ★13 モロハタマキビ ★14 等、60種	ゴマオカニシ イボイボナメクジ ナガオカモノアラガイ キセルガイモドキ オクガタギセル カサネシタラ ★11 ウメムラシタラ ★12 トブガイ ★13 モロハタマキビ ★14 等、60種	ヒラマルナタネ ヒゼンキビ ヒメハリマキビ ヒラマキミズマイマイ ナギツボ ★15		ムシオイガイ ウラウズタカキビ コオロギ(ニペルトカニモリ) ナガゴマフホラダマシ (ゴマフホラダマシ) オウウヨウラク クリイロマンジ ミミエガイ クロヒメガキ マメアゲマキ属の一種 ゴイサギ		81						
	DD		ハサクラ ユキガイ シオヤガイ		ケンガイ マシジミ	モノアラガイ	サドヤマトガイ フトキセルガイモドキ フネトブガイ カラスガイ ニホノマメシジミ ヒメカノ ウネナシイトカケ オニサザエ イワカワトクサ ヤミヨキセワタ類 ★16 ハマノイノミガイ ガタヅキ(コハギガイ) マルヘノジガイ オキナノエガオ モモノハナ ナミノコ キヌタアゲマキ オオトリガイ カモシガイ ウスハマグリ				ヒルスアリムシオイガイ ウミヒメカノ属の一種 ヘソカドタマキビ ツガイ ツツミガイ カワザンショウガイ科の一種 ヒナツボ フドロ ヤマトカクメイ シンジュノナミダ キリツボ近似種 イリエウナ シグマクダタマ シゲヤストカケギリ (カゴメイトカケギリ) ウネイトカケギリ ツルマルケボリ オカメブンクヤドリガイ オオマテガイ ネムグリガイ		45						
	LP																		0
国リスト #1															エルベリギセル オオギセル オオウエキビ オオタニシ ヤマトシジミ 等11種			11	
ランク外 #3																		0	
種数	9	55	15	43	61	36	0	11	56	286									

*1「国リスト」：環境省レッドリストに記載されているが、愛知県においてEX、CR、EN、VU、NT、DD、LPのいずれのランクにも該当しないと評価された種。

*2「未評価」：「レッドリストあいち2015」において評価対象とされなかった種。

*3「ランク外」：「レッドリストあいち2015」掲載種のうち、今回の見直しにおいてEX、CR、EN、VU、NT、DD、LP、国リストのいずれのランクにも該当しないと評価された種。

★1: トンガリササノハガイからササノハガイ(トンガリササノハガイ)に和名変更

★3: イシン属の一種からミカワイシンに和名変更

★5: ナタネキバサナギからナタネキバサナギに和名変更

★7: カハタレカワザンショウ(未記載種)からカハタレカワザンショウに和名変更

★9: オチバからオチバガイに和名変更

★11: カサネシタラガイからカサネシタラに和名変更

★13: ヌメチウジとツボミを統合した評価

★15: ナギツボ(未記載種)からナギツボに和名変更

★2: ホラアナゴマオカチグサからホラアナゴマオカチグサ近似種に和名変更

★4: ナガナタネガイからナガナタネに和名変更

★6: ヤマトクビキレガイからヤマトクビキレに和名変更

★8: オキナガイ属の一種からオヤヅオキナガイに和名変更

★10: ヒラベッコウガイからヒラベッコウに和名変更

★12: ウメムラシガラガイからウメムラシガラに和名変更

★14: モロハタマキビ(セトウツボシカドタマキビ)からモロハタマキビに和名変更

★16: ヤミヨキセワタからヤミヨキセワタ類に和名変更

(10) 引用文献等

概論の執筆にあたって引用あるいは参照した主な文献を分類群ごとに以下に掲載した。配列は著者名のアルファベット順とした。

① 哺乳類

- ・揚妻芳美, 2001. 愛知県におけるアライグマ野生化の過程とその現状. マンモ・ス特別号, (3): 1-18.
- ・保尊 脩・子安和弘・織田銃一, 2008. 愛知県三河湾東部におけるスナメリのストランディング記録 6. マンモ・ス特別号, (10): 53-58.
- ・石川 創(編), 1994. 日本沿岸のストランディングレコード(1901-1993). 鯨研叢書, (6): 1-94.
- ・川田伸一郎・夏目明香・子安和弘, 2003. 愛知県三河湾東部におけるスナメリのストランディング記録 1, (2002 年 10 月～2003 年 4 月). マンモ・ス特別号, (5): 36-41.
- ・川田伸一郎・夏目明香・子安和弘, 2004. 愛知県三河湾東部におけるスナメリのストランディング記録 2, (2003 年 5 月～2004 年 4 月). マンモ・ス特別号, (6): 26-32.
- ・子安和弘・織田銃一, 2009. 愛知県産哺乳類目録. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 2009: レッドデータブックあいち, pp.19-22. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.
- ・子安和弘・高橋伸夫・大竹 勝, 2018. グリーンデータブックあいち 2018 哺乳類・鳥類・爬虫類編. グリーンデータブックあいち 2018, pp.A-1-31. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.
- ・栗原 望・川田伸一郎・夏目明香・子安和弘, 2005. 愛知県三河湾東部におけるスナメリのストランディング記録 3, (2004 年 4 月～2005 年 3 月). マンモ・ス特別号, (7): 32-40.
- ・栗原 望・山崎 健・織田銃一, 2006a. 愛知県豊橋市大崎町に漂着したカマイルカ(*Lagenorhynchus obliquidens*). マンモ・ス特別号, (8): 74-78.
- ・栗原 望・山崎 健・子安和弘・織田銃一, 2006b. 愛知県三河湾東部におけるスナメリのストランディング記録 4, (2005 年 4 月～2006 年 3 月). マンモ・ス特別号, (8): 79-86.
- ・栗原 望・子安和弘・織田銃一, 2007. 愛知県三河湾東部におけるスナメリのストランディング記録 5, (2006 年 4 月～2006 年 12 月). マンモ・ス特別号, (9): 48-56.
- ・宮尾嶽雄・花村 肇・高田靖司・酒井英一, 1984. 哺乳類. 愛知の動物, pp.286-235. 愛知県郷土資料刊行会, 名古屋.
- ・野呂達哉, 2015. オヒキコウモリ. レッドデータブックなごや 2015 動物編, p.51. 名古屋市環境局環境企画部, 名古屋.
- ・Sano, A. 2015. *Tadarida insignis* (Blyth, 1861). The wild mammals of Japan, 2nd ed., pp.130-131. Shoukadoh Book Sellers, Kyoto.
- ・安井謙介・加藤利依・神戸 敦・今井尚子・齋藤幸子・岡地潔・小鹿登美・鳥山忠征・高橋佳子・塩澤憲治, 2012. 愛知県田原市高松町にストランディングしたカマイルカ. 三河生物, 4: 63-66.

② 鳥類

- ・子安和弘・高橋伸夫・大竹 勝, 2018. グリーンデータブックあいち 2018 哺乳類・鳥類・爬虫類編. グリーンデータブックあいち 2018, pp.A-1-31. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.
- ・日本鳥学会(編), 2000. 日本産鳥類目録 改訂第 6 版, pp.346. 日本鳥学会.
- ・日本鳥学会(編), 2012. 日本産鳥類目録 改訂第 7 版, pp.438. 日本鳥学会.

③ 爬虫類

- ・子安和弘・高橋伸夫・大竹 勝, 2018. グリーンデータブックあいち 2018 哺乳類・鳥類・爬虫類編. グリーンデータブックあいち 2018, pp.A-1-31. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.

④ 両生類

- ・島田知彦, 2018. グリーンデータブックあいち 2018 両生類編. グリーンデータブックあいち 2018, pp.B-1-10. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.
- ・島田知彦, 2018. 第 3 章 第 7 節 水とともに生きる両生類. 新修豊田市史自然編, pp.524-545. 豊田市.
- ・島田知彦・坂部あい, 2014. 西三河平野部の水田におけるツチガエルの分布. 豊橋市自然史博物館研報 (24): 7-15.
- ・島田知彦・田上正隆・楠田哲士・藤谷武史・高木雅紀・河合敏雅・堀江真子・堀江俊介・波多野順・廣瀬直人・池谷幸樹・国崎 亮・須田暁世・坂部あい, 2015. 濃尾平野に生息する水田棲カエル類の分布状況. 豊橋市自然史博物館研報 (25): 1-11.

⑤ 汽水・淡水魚類

- ・浅香智也・鳥居亮一・向井貴彦・地村佳純・大仲知樹・荒尾一樹・谷口義則, 2018. グリーンデータブックあいち 2018 汽水・淡水魚類編. グリーンデータブックあいち 2018, pp.C-1-37. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.

⑥ 昆虫類

- ・穂積俊文ほか, 1990. 愛知県の昆虫(上). viii+506pp. 愛知県農地林務部自然保護課, 名古屋.
- ・間野隆裕(編), 2018. グリーンデータブックあいち 2018 昆虫編. グリーンデータブックあいち 2018, pp.D-1-280. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.
- ・岡田正哉ほか, 1991. 愛知県の昆虫(下). iii+416pp. 愛知県農地林務部自然保護課, 名古屋.

⑦ クモ類

- ・環境省, 2019. その他無脊椎動物レッドリスト 2019. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室.
- ・緒方清人, 1996a. 真正クモ類. 設楽町史 自然編 資料編, pp.234-266. 設楽町.
- ・緒方清人, 1996b. クモ類. 稲武町史 自然 資料編, pp.127-146. 稲武町.
- ・緒方清人, 2014a. 新城市のクモ類. 新城市の自然誌 = 昆虫・動物編 =, pp.25-39. 鳳来寺山自然科学博物館.
- ・緒方清人, 2014b. 愛知県三河地方におけるセアカゴケグモの現状. 蜘蛛, 47: 48-54.
- ・緒方清人, 2015. 真正クモ類. 日進市史資料編補七自然 資料編目録, pp.1-92. 日進市.
- ・緒方清人, 2016a. クモ類. 豊田市生物調査報告書 資料編, pp.343-395. 豊田市.
- ・緒方清人, 2016b. 西尾市吉良町 梶島のクモ類. 蜘蛛, 49: 22-25.
- ・緒方清人, 2018a. グリーンデータブックあいち 2018 クモ編. グリーンデータブックあいち 2018, pp.E-1-24. 愛知県環境部自然環境課, 名古屋.
- ・緒方清人, 2018b. クモ目. 新編知立市史 8 資料編 自然. 知立市.
- ・緒方清人, 2019a. 愛知県産クモ類目録と追加種(X I). 蜘蛛, 52:15-57.
- ・緒方清人, 2019b. 新城市門谷鳳来寺山のクモ類について, 鳳来寺山自然科学博物館, 48: 1-16.
- ・小野展嗣・緒方清人, 2018. 日本産クモ類生態図鑑 自然史と多様性. 713pp. 東海大学出版会, 神奈川.
- ・須賀瑛文, 1984. 真正蜘蛛類. 愛知の動物. 愛知県郷土資料刊行会.
- ・須賀瑛文, 2008. クモ類. 新修名古屋市史 資料編 自然, pp.323-336. 名古屋市.
- ・須賀瑛文・緒方清人・柴田良成, 2013. 8 クモ類調査. 都市部における生物多様性の保全と外来生物対策事業報告書, pp.121-131. なごや生物多様性保全活動協議会.
- ・谷川明男, 2017. 日本産クモ類目録 ver.2017 R1. <http://www.Asahi-net.or.jp/~dp7a-tnkw/japan.pdf>.

⑧ 貝類

- ・天野景従, 1966. 愛知県の陸貝相. 東海高校研究紀要, (4): 69-82 + 2pls.
- ・風呂田利夫・関口秀夫・菊池泰二・田北徹・東幹生・佐藤正典, 1999. 九州の干潟を中心とした浅海域開発と環境アセスメントの問題点. 1997 年秋期大会シンポジウム報告. 海の研究, 8 (1): 47-68.
- ・早瀬善正・木村昭一, 2011. 名古屋港周辺の陸産貝類相, 特に新たな外来移入種メリケンスナガイ (新称) について. ちりばたん, 41 (2): 48-59. 日本貝類学会.
- ・早瀬善正・種倉俊之・社家間太郎・松永育之・吉川尚・松浦弘行・石川智士, 2011. 愛知県幡豆町の干潟および岩礁域潮間帯の貝類相. 東海大学海洋研究所研究報告, (32): 11-33.
- ・早瀬善正・木村昭一・大貫貴清, 2015a. 沖島 (三河湾) の転石地潮間帯の貝類相. かきつばた, (40): 23-30. 名古屋貝類談話会.
- ・早瀬善正・大貫貴清・吉川尚・松永育之・社家間太郎, 2015b. 前島 (三河湾) の転石地潮間帯の貝類相—特徴的な 16 種の記録. ちりばたん, 45 (3): 105-122. 日本貝類学会.
- ・早瀬善正・木村昭一・河辺訓受・川瀬基弘・林誠司・西浩孝・守谷茂樹・石井健一郎・大貫貴清・岩田明久・仲田彰男, 2016. 梶島 (三河湾) の潮間帯の貝類相. かきつばた, (41): 27-39. 名古屋貝類談話会.
- ・早瀬善正・木村昭一, 2017. 河和 (三河湾) の内湾潮間帯の貝類相. ちりばたん, 47 (1-4): 28-42. 日本貝類学会.
- ・早瀬善正・木村昭一・西浩孝・守谷茂樹・岩田明久, 2019. 日間賀島 (三河湾) の潮間帯貝類相. かきつばた, (44): 1-15. 名古屋貝類談話会.
- ・早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島 (三河湾) の潮間帯貝類相. ちりばたん, 50(1): 33-79. 日本貝類学会.
- ・早瀬善正・西浩孝・河辺訓受・木村昭一・矢橋真・大貫貴清・岩田明久・仲田彰男, 2017. 伊良湖岬の陸産貝類. かきつばた, (42): 1-5. 名古屋貝類談話会.
- ・河辺訓受, 2002. 石巻山周辺淡水貝観察調査会報告 —愛知県でミズコハクガイを初記録—. かきつばた, (28): 31-32. 名古屋貝類談話会.
- ・河辺訓受・木村昭一, 2015. 愛知県に生息していたテリザクラ—かつての汐川干潟の貝類相—. かきつばた, (40): 31-33. 名古屋貝類談話会.
- ・川瀬基弘, 2016. 東海丘陵湧水湿地群に生息する貝類. 矢作川研究, (20): 13-16.
- ・木村昭一, 1994. 東海地方の淡水貝類相. 研究彙報(第 33 報): 14-34. 全国高等学校水産教育研究会.
- ・木村昭一, 1995. 日間賀島南部海岸の潮間帯付近の軟体動物相. 研究彙報(第 34 報): 16-27. 全国高等学校水産教育研究会.
- ・木村昭一, 1996. ドレヅジによって採集された日間賀島南部海域の底生動物. 研究彙報(第 35 報): 3-19. 全国高等学校水産教育研究会.
- ・木村昭一, 2000. 伊勢湾・三河湾でドレヅジによって採集された貝類(予報). かきつばた, (26): 18-20. 名古屋貝類談話会.
- ・木村昭一, 2006. 愛知県におけるミズゴマツボの産出記録. かきつばた, (32): 22-25. 名古屋貝類談話会.
- ・木村昭一, 2017. 伊良湖漁港内で採集された貝類. かきつばた, (42): 6-12. 名古屋貝類談話会.
- ・木村昭一, 2019. オナガリュウグウハゴロモは絶滅したのか?. かきつばた, (44): 33-37. 名古屋貝類談話会.
- ・木村昭一・木村妙子, 1999. 三河湾及び伊勢湾河口域におけるアシ原湿地の腹足類相. 日本ベントス学会誌, 54: 44-56.
- ・木村昭一・木村妙子・村山棕, 2019. 愛知県 (伊勢湾) で初めて生息が確認されたクリイロコミミガイ. かきつばた, (44): 40-43. 名古屋貝類談話会.
- ・木村昭一・中西尚文, 1997. 東海地方に分布するオトコタテボシ属の 1 種. ちりばたん, 27 (2): 41-48. 日本貝類学会.
- ・岸田弘之, 2008. 流域における物質循環の動態と水域環境への影響に関する研究. 建設マネジメント技術 2008 年 10 月号: 27-33.
- ・守谷茂樹・河辺訓受, 2013. 三重県, 愛知県で確認されたミズコハクガイ, かきつばた, (38): 50-51. 名古屋貝類談話会.
- ・岡山県野生動植物調査検討会(編), 2019. 岡山県野生生物目録 2019 21 軟体動物門. 岡山県環境文化部自然環境課, 岡山.
- ・大貫貴清・佐藤拓也・木村昭一・早瀬善正・吉川尚, 2015. 沖島と前島 (愛知県西尾市東幡豆町) の陸産貝類. かきつばた, (40): 39-42. 名古屋貝類談話会.
- ・佐藤大義・浅田要・永井僚, 2019. 南知多町内海海岸 (伊勢湾) の貝類相. かきつばた, (44): 20-30. 名古屋貝類談話会.
- ・水産庁・水産資源保護協会, 1988. 干潟. 15pp.
- ・庄子士郎, 1978. 愛知県 地学のガイド, 256 pp. コロナ社, 東京.
- ・和田恵次・西平守孝・風呂田利夫・野島哲・山西良平・西川輝昭・五島聖治・鈴木孝男・加藤真・島村賢正・福田宏, 1996. 日本の干潟海岸とそこに生息する底生動物の現状. WWF Japan Science Report 3. 182pp.
- ・山田充哉・石橋亮・河村功一・古丸明, 2010. ミトコンドリア DNA のチトクローム b 塩基配列および形態から見た日本に分布するマシジミ, タイワンシジミの類縁関係. 日本水産学会誌, 76: 926-932.

5. 掲載種の解説

レッドリストに掲載された各動物について、種ごとに形態的な特徴や分布、県内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は各分類群冒頭の凡例のとおりとした。準絶滅危惧種、情報不足種、地域個体群についても、絶滅危惧種と同じ様式で記述した。なお、無脊椎動物（昆虫類、クモ類、貝類）の情報不足種については、対象種の解説を数行で記述した。また、国リストの種については、対象種が愛知県では絶滅危惧種（準絶滅危惧種、情報不足種を含む）と判断されなかった理由を数行で記述した。

「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」の表記については、略称として「種の保存法」と表記することとした。また、愛知県の「自然環境の保全及び緑化の推進に関する条例」の表記については、略称として「県条例」と表記することとした。

執筆責任者は、凡例の後、または各種解説の末尾に表記した。ただし、編集者の都合で、一部加筆した場合もある。また、県の責任で全面改訂を依頼した魚類と両生類以外は、必要に応じ、2002年版及び2009年版の執筆責任者も表記した。

なお、ここで「執筆責任者」というのは「本書に書かれた内容に責任を持つ者」という意味で、「本書の文章を作成した者」という意味ではない。今回の「レッドデータブックあいち 2020」は、2002年版及び2009年版の改訂版であるが、旧版との内容の一貫性を保つため、今回の執筆責任者が内容上特に問題がないと判断した部分については、原則として旧版（レッドリストあいち 2015 付属資料を含む）の文章表現をそのまま踏襲することとした。